

---

# 円周率の天才

Y-m a

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

円周率の天才

### 【Nコード】

N0766U

### 【作者名】

Y - m a

### 【あらすじ】

非凡な自分を模索するあまり、交差する人間の業に陥る青年の焦燥的な憂鬱が巻き起こすファンタジー

## 前触れ（前書き）

アラサーと呼ばれ始めたのは成人式のあの日から…そうやって生きていくのだらうとぼんやりしていた、奇しくも成人式の帰りの電車内での出来事からすべては始まった

## 前触れ

円周率… 円周率は3

違うのだろうか？

円周率は だ… 様… 御 様…

私は溜め息混じりに空を仰いだ…

円周率を何桁… いや、何万桁だな

暗記でき、暗唱できても生きた心地はしない…

円周率は3… いや、御 様だつ。

「私は円周率の天才である」

終電間際の電車さえ、半端に見えるこの家路に  
私は異人となったのだ…

吊革が揺れているのさえわかる

さてさて

私は何者なのか

誰もがわかるように

しかし、円周率のように伝えるにはどうしたらいいものか？

電車内を我が物顔で見渡してみる

恐ろくなんらかのヒントが散りばめられているだろう…な

フフッ…

## 冥界への切符

3で意識すれば人は道を踏み誤ることはない…

そればかりだ…

成人式は勢いで四次会まで行つたが…相変わらず無茶な連れだ…

電車内が寂しく感じる

それよりも四次会まで参戦した自分が愚かしい

いや、四次会まで企てた奴らが愚かしいのだっ

私は自己顯示欲のようなものを見え隠れさせ  
自己正当化とまではいかないが…

余韻に浸りたがっていた…

「お兄さんアラサーなんだって???」

耳元で囁くような声が聞こえてきた

声の方を向くと

一つ目の…これは坊主だろうか

何というか…見習いの袈裟を着込んだ一つ目小僧が…

表向き無反応な私の内をノックした…

心臓が酷く高鳴る…

よ、妖怪…

「お、おうっ、そっだとも、俺はアラサーだぜ？」

微笑を浮かべ一っ目小僧は黙りこくった



## 下手な妖怪

沈黙が5分ほど続いた…

その間、一つ目小僧はずっと私を好意的な目で見つめていた…

す、少なからず笑みを浮かべていた。と言わざるを得ない…

だ、だいたい

一つ目小僧など…下手な妖怪に今更ビクつく男ではないだろ？私という人間だつ。

「お、おいっ！ひ、一つ目小僧っ！お、俺はアラサーだぞ？それがどうした？一つ目小僧めっ」

ペチッと

私は一つ目小僧の頭を張った

一つ目小僧は、顔を真っ赤にして  
私に言い返してきた。

「叩かないで…叩かないで…僕には目が一つしかないのだから、叩  
かないで…叩かないで…」

下手な妖怪の下手な言い返し…

都会の風がいかにかこの下手な妖怪に覲面するか  
思い知らせてやる！

ペチッペチッ

ペチッペチッ

私は頭を叩き続けた…  
何度も何度も…

一つ目小僧はさらに真っ赤になり、やがて  
自ら光を放つような赤い、人型の雷球のようになった…

「酷いっ！酷いっ！何度も何度も頭を叩いて…酷いっ！酷いっ！こ  
うなったら、その忌まわしい右手にとりついてやる」

ひっ！！

謂われてみれば。

都会人も、「とりつく」だの  
そう言ったりアルな表現には弱い…

急いで

引っ込めた右の手のひらが横にパッキリ割れ

その傷口が目玉になった…

辺りに一つ目小僧はなく  
その目玉に姿を変えたようだった

開き直りのアラサー

「うわぁーっ!!」

ここで笑うところだぞ?とお笑い芸人向けのサクラに対する新人教育。

そんなニュアンスで遅れて私は発狂した…

「目…目が手に…」

当たり前の話だが、私の叫び声を聞きつけ、車掌らしき人物が慌てて私の居る車両まで飛んできた…

それはそれは何事かと言つような面持ちで  
私に駆け寄つてきた

「お客様、如何なさいましたか？」

私は涙ながらに  
自分の手のひらを車掌に見せた

ギョロギョロ…

ギョロギョロ…

「うわっ！…お…お客様。これは…テレビの撮影か何かですか？」

おいおい…

これがサクラ営業の本番だったら…

いや、素人臭くて良いかもしれん…

「う、うん…そうだと…マジビビり？フッフッフッ」

私は半ば放心状態で車掌のそれに合わせることで必死だった

そのせいか

車掌は幾分かホッとした様子で辺りを見回した

「カメラは見当たりませんか？お客様：私もね？オカルトの類は得意ではないし、これがテレビ撮影用の特殊メイクと言うなら話は別ですが、撮影許可なく…つまり、アポなしとなれば、些か場が悪い…駅所まで来てもらいますけど？それともガチですか？」

そう言われてみたら…

ガチな方がまだ良いんじゃないか？  
痴漢やスリじゃあるまいし…色々詮索されても…困るしな

「そ、そうなんだよ。」

ひ、一つ目小僧がさ？手にとりついてしまっただけ？」

車掌は物わかりの良さげな顔をして



後ろを振り向いた…

「お客様…一つ目小僧には、一つ目なりにも、目があるじゃないですかあ？私には目も鼻も口も…ないんですよ？」

後ろを振り向いていた車掌がこちらを向き直した瞬間…

目、鼻、口のない顔が顯れた

うつかり

凝視してしまった私は電車を乗り違えたのだと思わざるを得なかった…

「ひいっ…のっぺらぼっつー！ー！」

私は立ち上がり、自分の足で逃げることを余儀なくされた

「お化け列車だ…

乗客も車掌もみんな化け物だ」

成人式…成人式を思い出せば、幾分か落ち着ける…

## 面積や円周

そうだ…そうだ…

成人式では、知事だかなんだが、若者に沿った話し方だとかで祝辞をやっていたが、かなりナウかったんだ…

「君達はさ？生き残った尊いメンズだろ？もつと胸を張りなよ？」

だったか？

二次会では、このまま行くとセーラー服で成人式でなきゃなんないよ…

とか…マジ受けたよなあ…

三次会でラーメン食べて

四次会で…なんだっけなあ…

思い出せない…

円周率なんだよ…円周率

なぜか、成人式の話が吹き飛ぶくらい  
円周率に固執してたんだ…

なんだったか…

四次会は確か肝試しに

廃校になった高校に入ってたんだっただか？

季節外れの肝試しだったが…

そうなんだ…

円周率の計算方法は

円周を求める際

円の面積を求める際と同じなんだよ…

直径× $\pi$  円周。であり

半径×半径× $\pi$  円の面積。なんだから

そこから 値を求めるのは簡単なんだ…

しかし…じゃあ ってなんなんだろうって…アレ？

四次会はどうなったんだっけ？

## チキン野郎

四次会で、私は肝試し嫌いなことに気づいていた…。

自分の知らない世界が開けるなんて…  
身の毛の弥立つ虚しさだ…

「おまえってホント、チキン野郎だよな？」

同級生なのに、誰より頼もしいタツちゃんが、私に一喝した…

「良いか？知らない世界なんてないに越したことはないんだよ？さ  
わらぬ神に祟りなしだ。わかるよな？もういいや、お前のタイミン  
グで来いよ？先に行ってるからな？うひゃっ、30分こいつと話し  
込んでたよ…」

そう言うと

タツちゃんが廃校に駆け足で入っていった

もうかれこれ、30分くらいタツちゃんに口説かれていたのも隠し  
ようのない事実だ…

しかし、他のメンツが先に廃校に向かってから、30分たったのだ  
と思うことにした…。

チキン野郎で結構さ…  
身の毛が弥立つ…  
きつとみんなすぐに血相変えて戻ってくるさ…

行くんじゃないかった

知るんじゃないかった  
ってね。



しかし、さらに30分たつたにも関わらず  
みんな戻らなかった…

私は妙な開放感に救われたように  
みんなが廃校に向かってから一時間後…その場から立ち去り  
このお化け列車に乗ってしまったわけだ…

さわらぬ神に祟りなしか…

最初はピンとこなかったのにな…

## 化け物列車の車窓から

私は夢の中で目を覚ますのが得意だ。  
どんな良い夢も悪い夢もすぐに覚める…

しかし、夢は続いたままだ…

化け物列車が単に化け物列車なのか？  
冥界に入り込んでしまったのか？

それだけでも確認したい…

私は左の窓をのぞき込んだ

延々と続く田園風景…

見慣れた建物や店…

冥界には入り込んでないみたいだ…

よかった

次の駅まで耐え抜けば

元通りだ…

「あんた…地獄に落ちたのかい？」

ギーッギーッ

ギーッギーッ

包丁を研ぐ老婆の姿があつた…山姥だ…

「私も長年生きていれば、謂われもない言い掛かりはあるもんだ…  
山姥だの、鬼婆だのねえ…しかし、どうだい？あんたの頭が人を見  
損なつてやしないかい？ヒヒッ…」

ギーッギーッ

ギーッギーッ

電車の揺れを構うこともなく、包丁を研ぎ続ける老婆をまともな人間と捉えるのはなんとも難しく…

「つ、つまり、私の被害妄想であり、極度の幻覚症状を引き起こしていると言いたいのか？ そんなバカな…」

と言いたところだが  
化け物列車と自負したのは、他でもない私なのだ…

化け物だろうが、こちらの精神状態を指摘してくる以上…郷に従え  
ってやつか…

「違うっ！…私は山姥で鬼婆だっ！…八つ裂きにしてくれる…！」

ギーッ…ガタンッ

研ぎ石を床に乱暴に置き捨て  
錆だらけの包丁を私に突きつけてきた…

「ちょっ…待て。あなたは人間だ！！鬼婆ではない…」

私の説得も虚しく、山姥はジリジリと近付いてくる…

「ヒッヒッヒッ…セラピストさんのお肉はどんな感触かな？ヒッヒッヒッ」

説得は諦めよう…

相手は鬼婆、山姥なんだ

「うわぁーっ!」

山姥を一押ししてから  
私は走り出した

一駅耐え抜けばいいんだ

## 山姥の質問

後一押ししていれば…

「ヒッヒッヒッ…なかなか逃げ足の早いセラピストさんだねえ…私も長年生きていれば、こんなに逃げ足の早いセラピストさんに出会えるんだねえ…」

山姥の速さには勝てず、  
追いつかれた私は、首根っこを掴まれ、右のシートに放り投げられた…

「な、なんなんだ？この列車は…一つ目小僧にのっぺらぼうに鬼婆に…私の恐怖心が見せる幻だっ…！」

すると…どうだろうか

辺りは閑古鳥が鳴くほどガランとしていたかに見えたのに…



乗車率80%…といったほか？

人間が大量に…いる

二重幻覚（から空きの車内に妖怪）…  
いや、人集りを避けたいがあまり見えた幻覚だったのか？

「ちよっ…退いてくれませんか？」

私はそうだった…  
シートに座ったのだった…

奇しくも見知らぬ老婆の上に…

「す、すみません」

慌てて席を立つも

怪訝な顔をしてそっぽを向く老婆…

周りはどうやら、私の気違いじみた行いをそれぞれ知っているらしく

（こちらは妖怪と戦っていたのだと言うに…）

すっかり、萎縮していた…

一駅耐え抜けば…か

私は幻覚を見ていた…

なんて自己中心的な幻覚なんだ…

「ひっ！！」

右手にはまだ目玉が残っていた…

## 弱み

右手にある目玉に集中したいものだが、化け物列車だと錯覚していた時間に、乗客に何か失態を働いてはいないか？と気にならずにはいれなかった…

一度覚めた夢の続きを見るのが困難のように  
それが地獄だったとしても、悪夢だったとしても、それは同じよう  
だ…

「よお。あんちゃん？人の頭ぺちぺち張りよってからに、いきなり  
発狂してどっか行きよったが、どうしてくれるんや？！」

身の丈60寸はあろうかという、派手なスーツを着たスキンヘッド  
の熊みたいな…極道屋が

金の縁がガツチリついたサングラスをインテリジェンスに扱い

私の前に立ちはだかった…

人はこういった現実を逃避したがるものだ…

しかし、まあ…不幸中の幸いってやつだ  
右手にある目玉に  
なんとか集中することができそうだ…

「フフフッ見たまえ！君の知らない世界の幕開けだ！！」

バッ

と右手の平をこれ見よがしに曝した  
奴さんこれに度肝抜かれて、すたこらさっさだ。

ギョロギョロ

ギョロギョロ

「な、なんや？それは？手品かなんかやろ？笑わしよるなあ…どれ  
？貸してみい。決ったるわ。」

ダメだ…

決られてはダメだ

極道屋が私の細腕をむんずと掴み、目玉に手をかけた瞬間…

また、あの赤い雷球が顕れ、極道屋の額に目玉が移った…

「うわっ…あれ？おい。右手の目玉はどこに消えたんや？」

私はここぞとばかりに、極道屋の隙をついて  
その場を走り去った…

神の思し召しとでも言わんばかりに、丁度、駅に着いた頃だったの  
で、一目散に私は下車したのだった…

フフフッ…化け物の二丁上がりだ



## 幻肢痛

時に、私の右手からなくなった目玉だが…  
一抹の違和感を残している…

現実的な表現をするなら、あの極道屋にドスで切りつけられたことにでもしようか…

こんなとき人は妙に強気になる…

うまく切り抜けられはしたが、仮にあのまま極道屋にハマリ、とやかく因縁を付けられ続けたにせよ、その苦難を乗り越え生き抜けることのできた自分を想定してしまう…

どこか英雄伝のようなヘラクレス像を思い描く…

頭の中の友達はしきりに休むなっ！！休むなっ！！を繰り返す…そのような偽りの強さに頼っては、痛い目に遭うと…

丸裸にされた気分だ…

B O O M   B O O M . . .

携帯が鳴っている…

「あっ…タツちゃんからだ…どうしようかな…」

私は急に我に返ったように、鼓動を高鳴らせた…

「もしもし…タツちゃん？ごめん…やっぱり怖くていけなか…」

自分の不甲斐なさを晴らしたい一心…と思いきや…タツちゃんからの電話は逆に私を呼ぶものだった…

「た、助けて…ップーップーップー」

タツちゃん…

タツちゃんからのSOSだ…廃校で何かあったのか？

「いや、タツちゃんが芝居でもうって、廃校に来させようとしたに決まってる…タツちゃんだもん…」

私は強気だったのだ…

タツちゃん達の優しさに甘えたのかもしれない…

右手の違和感が些かの痛みに変わったことに気づきながら、私は帰路についたのだった

## 守護大名達の調和

家に着いた…

何の気なしにテレビをつけると、地方チャンネルのニュース（つまり、地元の事件ってわけだ）が流れていた…

「物騒な世の中だ…」

と呟く私はすでにアラサーどころではなく、アラフォーやもしれない…

「ん？」

火事で全焼した  
廃校より11人の焼死体が発見されました…

だつて!!

「あの廃校じゃないか? いや…待てよ…11人は多すぎる…タツち  
ゃん入れても5人しかいなかったはず…いったい何があったんだ?」

タツちゃん…あの電話はガチだったんだね…

私は僅かながらの希望を胸にタツちゃんに電話した…

プルルル

プルルル

「はいつ太刀川ですけど。」

あれ？普通に出たな…

「あつ！タツちゃん？デコポンだけど？ニユース見た？あの廃校全焼したんだよ？」

タツちゃんは気怠そうにそれに答えた

「火付けたのは俺らだけど、焼死体に関しては知らないよ…デコボン何で来なかった？みんな半狂乱で大変だったんだぞ？デコボン守れんやった奴がユダとか、危なかったんだぜ？」

そんな…

自分一人いないだけで

廃校が全焼するなんて…タツちゃん達らしいや

「ハハッ、メンゴメンゴ…タツちゃんらしいやん？」

タツちゃんもなんだか疲れているみたいで、話を切り上げたかったのか…もしくは…いや…そんなことはないか…



「デコポンもあんま付き合い悪いと寒い目に遭うからさ。気をつけなよ？おやすみ。」

「うん、おやすみ。」

詳しく知りたいんだけど、タッチちゃんに無理させるわけにはいかな  
いし

いいよな…

## 添え木

廃校の火事について、考えを巡らしてみた。  
タツちゃん達が悪ノリで火を付けたにせよ

焼死体が11体も発見されたなんて…

タツちゃん達、気が気じゃないよな…

気に病みすぎて  
また火を付けなきゃいいけど…

あのとき…あのとき自分も廃校に行っていれば…

b  
o  
o  
m

b  
o  
o  
m

ん？  
メールだ！

送り主は…あ、悪魔っ！！

『次は御前だ！！悪魔より』

ひっ！！！

何なんだ…メアドも知らないやつなのに、既に悪魔と登録されてる…

また…幻覚か？

だとしたら、悪魔の正体は…タツちゃん？

タツちゃんらしい悪ノリかな？

『こ、この悪魔めっ!!お前は誰だ?!』

と返信したところ…

b  
o  
o  
m

b  
o  
o  
m

返事が来た

『悪魔は悪魔だ…次は御前だ！！悪魔の生贄となる柔肉の子羊は御前となる…』

プッ……なんかウケるよ。

私はまた異次元に迷い込んだのだと…仮にタツちゃんの質の悪い悪戯にせよ。

これはもう異次元と捉えるしかない…

「ザ、ザザー…あくまにはせいとどつをはんでんさせるちからがある。たとえば…」

いきなり、テレビが砂嵐になり  
悪魔が話し始めた…

「たとえば、そのベッド。せいとどうをはんてんさせて、うごかしてやろう…」

ズズズッ…

私を乗せたベッドが独りでに動いた…

「さらに、くうかんじょうでせいしをせる…いまベッドはうっかしたじょうたいだ」

私を乗せたベッドは宙に浮かび、さらにクルクル回転した…



## 添え木2（前書き）

クルクルと激しく回転するベッド：突如現れた悪魔の仕業だと、  
わかには信じがたいデコポンの心情は天変地異を匂わせていた。

## 添え木2

クルクル回るベッドに私は歯を噛みしめ、しがみついた…

どうしようもない…

私達は落下しようとしていたのだろうか…

悪魔からの曲がりなりの浮遊感というプレゼントに…

私は歯を噛みしめるばかりだった…

「わかったか？むしけらめ！！」

その一言を最後にテレビは消え、砂嵐は去った…

しかし、ベッドはクルクルクルクル回っていた…

歯を噛みしめる私に対し、ベッドはクルクルクルクル回っていた…

と、飛び降りるしかない…

言っても10寸程度の高さではないか？

このままでは酔ってしまっ…

「見てろよ？悪魔めっ！！」

意を決し、ベッドから飛び降りた私は…

こともあろうに、着地を失敗した…

足首を肉離れしたのだった…

激痛が走り、腫れ上がった足首のそれはまるで悪魔がとりついた腫瘍のようで、私は付け焼き刃の祈りを行い、すぐに向き直った。

「悪魔め…私のセーフティライフを駆逐せんとす悪魔め…この肉離れの痛み…忘れるものか…」

肉離れの痛みを、歯を食いしばり耐える私は、あのクルクル回るベツドでの私に酷似していた…

「くしからず…くしからず…」

すべては、悪魔の算段であつたのか？  
悪魔は果たして去っていったのか？

そればかりが、思考を留めて離さなかったのだ。

最悪な啓示…

私は肉離れをする運命だったのか…

ピースエンビー

卑屈になれど、拭えぬ恐怖心…  
悪魔が何をしてきても抗い得ない確信がある…

それはやがて、無垢への嫉妬に変わる…

ピュアへのテゼ…

私は天使に出会いたいのだ…

悪魔を中和してくれる天使に…

「例え…で、天使を墮としてさえも…幸せにすがりたい…これ以上の罰は…」

まだクルクルと回るベッドに私は、狂犬病めいた反応を示した…

水を避けるような…

涎が滴り落ち…

カーペットを濡らす…構いもしない…

いや、構い過ぎて忘れている…



その程度の仕業など、どうでも良い…

私は平和を愛しているのだ…

「早く！！魔力よ静まれ！！なぜまだベッドは回転したままなんだ  
！！」

クルクルと回り続けるベッドに固執することで、寧ろ、心が微少な  
りにも和らいだ気がした…

涎で濡れたカーペットを手で拭い…

私はそれでも部屋から出た…

b  
o  
o  
m

b  
o  
o  
m

## ジキル博士とフランケンシュタイン

家から出た私は、慌てるでもなく、スペードのロイヤルストレートフラッシュが揃ったかのような、ポーカーフェイスを保ったままだった…

ポーカーフェイスと言えば万物共通の悪癖、と高を括るものだが…

考えすぎはよくない…

もう一つの人格は穏和なフランケンシュタインかもしれないからだ

しかし、ここでスペードのロイヤルストレートフラッシュを叩き出そうものなら、人々は遠慮なく私の人生にハイド氏を探り出すだろう…

まあ、そんな心境だというわけだ。

テレビの突撃レポートでもない限り、部屋で回り続けるベッドなど  
バレるわけもない…

「…デコポン。」

あつ…タツちゃん

タツちゃんは筋肉質であり、逞しく、白いタンクトップにGパンを  
履き

ラッパが付けそうな極太のプラチナのチェーンを首から掛けてい  
た…

しかし、相変わらずの粒みtain瞳は…私には愛らしく見えた

「や、やあ…タツちゃん。」

タツちゃんは私の呼びかけに少し目を逸らし、親指を立てた。

「デコポン…あのときデコポンが俺らに一言”WHAT’S UP？”って言うてくれてたら…バカやらなかったよ…マジでさ。でも信じてほしい…ホーミー同士悪さはやるかもだけど、サイコなマーダーをチヨイスするブローはブローだ…わかるよな？」

タツちゃんの話はdon’t miss itなんだ。

絶対聞き逃せない

この辺りのルールなんだ…

「当たり前さ！！タッチャん達はマジッパないけど、絶対殺しなんてしないに決まってる…」

タッチャんは口を抑え、涙を流した…私にはわかる。これがホーミーティアだと…

「うぐっ…サンキューな？デコポン…だが、コップは既に俺達を二ガだと思い込んで…デコポンは俺達のママであり、ハウスであってほしいから、この件には関わらないで欲しいんだ…」

私は男として、戦士としての自我が芽生えたことに気づいた…まさに、スピードのロイヤルストレートフラッシュだ…

しかし、ホーミーなんだ…私はポーカーフェイスを貫いた

「オーライだよ？みんなの在るべき場所を俺が守ってみせるよ？」

私とタツちゃんはアームレスリングみたいな、かたい握手を交わし

その後は無言で去った

互いの道を歩きだしたんだ…

## 聖水の存在

ひとつ問題がとりあえず片付いた…ことにしよう…タッチちゃん達を信じるしかない…

あのベッドは自分で治めるしかないんだ…

元在る場所…社会の掟…

タッチちゃんは高鳴るアドレナリンを抑えるために、オートバイに跨り、ウィリーしながら

「COOL!! COOL!!」

と耐え抜いていた…



タツちゃんの良き理解者、カミカゼはタツちゃんの常に先回りをしていた…

タツちゃんのアドレナリンがあるボルテージを超えたとき、カミカゼはオートバイのキーをさっと取り、オートバイをふかし温める…

タツちゃんの急激なリクでオートバイのエンジンがイカレてはヤバいからな…

カミカゼはタツちゃんを最も理解する男…

私にもカミカゼみたいなホーミーがいたらな…

って、都合良すぎだ…

呪いには霊媒師の御祓いとか聖水とか…

「はっ！！それだっ！！近くの教会に行って聖水を分けてもらおう」

私はカミカゼのように速く…いや、もっと…いや、もっともっと速く走り出した…教会に向かって

精神と時の…

教会…

日頃は辛気臭くて…むしろ粹がっていた私だが、なぜだか古傷が痛む。

そんなときに神の仕業とか思い立つから呪われてるんだろう…

迷える子羊は何人も教会なるもので救われ、仮に言うなら私のような不幸を神の仕業と位置づけたんだろう…

「神への冒涇ではないか？私が冒涇しているなど、神にとっては…」

私は深い溜息をつき

ただ、今抱える問題に集中した…

パツと見、洋館にあるような、こぎつぱりとしていて、それでいて大きな門の向かって右側に、人が通るほどのドアがついている。

そこから、私は我が物顔（少なからず、そう思うほどの奇行なのだ。自分にとっては）で入り、更に教会の建物内にノックもなく入った…

勢いを忘れると逃げ出しそうになる…

教会内に侵入？し、立ち尽くした眼前には十字架が掲げられ  
周りにはオペラグラスが神話を語っている…

しかし…見渡しても神父様？司祭様？はいない。

「悪魔と出会いましたね？」

心臓が口から飛び出しそうなくらい、私は驚いてしまった…

背後から…背後から声がした…

## 断罪

十字架に向かつて並ぶ長椅子に座り、  
喉元まで出掛かった心臓を飲み込んだ私は、  
コトのあらましを神父  
様に伝えた…

聖職者なる振る舞いで、目尻の下がった優しい目が鋭く光った…

「悪魔に出会い…ベッドが宙に浮き、止め処なく回り続ける…だから、それを治めるために私の聖水が要ると？にわかには信じがたい話ではありませんか？神の御前、汝の訴えの真偽は神のみぞ知るものではありますが、神聖なる価値のあるこの聖水を汝に与え賜うべきか？思慮に困る限りですよ？簡単に言いましょう…神の御心の範疇を優に超えています。」

私には神父様が何を言いたいのかさっぱり分からなかった…

「神の御心の範疇と言うと…それほど強力な悪魔…つまり魔王…まさか魔神？私にもわかじこみの知識しかありませんが…そんな…」

神父様はしばし考え込み、奥の棚に向かい歩き出した。その棚から取り出し、私の眼前まで運ばれた精巧な瓶の中では、美しく輝く聖なる水が波打っていた。それを私に見せ神父様は話し始めた。

「ええ…仰るとおり小悪魔程度の悪さには思えません。問題の次元が違いすぎますね…あなたの見解が正しいと言うことにしましょう。して、500万円にてこちらの聖水をお譲りしましょう…」

私は啞然とした…辺りを見渡し、傍聴人はいないのか？と声なき声で訴えていた…

私は健全な生活を大枚叩いて買わなければならないのか？

「そ、そんなっ！！私は困り果てた迷える子羊何ですよっ！！いい加減なことを言わないでください！！」

私は立ち上がり、神父様に言い放った…が、激は空を切り、神父様は首を横に振った…。

「神は皆に平等なのです。あなたなら一目置いて500万円すぐ払えなければ怠慢であると神は仰っています…」

最初の意気込みはどこへやら、慣れない信仰に安易に手を出した自分が悪いんだろうか…



神の裁きはまるで、閻魔大王との謁見に似ていた…

「怠慢ととられるのは耐え難い…この話はなかったことにしていた  
だきたい。」

私は神父様の返事も聞かず、急ぎ足で教会を後にした

## 自己神格化の代名詞

私はポケットに手をつ込み、イライラ、イソイソと歩いていた。

神父？神父がなんだ？

私の何が神の恩恵を消費していたと言った？

どうせまた、なんたらが食卓に並ぶまで、などと私の存在を脅かそうと言っただろう…

そのなんたらが食卓に並ばなければ、お百姓様だろうがなんだろうが、成り立たないではないか？

違うのか？

少なからず、私が神から与え賜れたものを食すとき、彼らはそう捉えるに決まっている…。

私は食べることが仕事なのだ…

半永久的な現実とは、私の思考よりは遅く  
しかし、命はそれに左右されている…

風が…ヒューツと吹いた…決して痛くもない、頬を撫でるような風  
だ…ったのだが、いまの私にはあまりに重い仕打ちだった

「あゝーーーーっ!!!!!!!!!!」

私は半狂乱になり、辺りをのたうち回った…

「何故だ！！神は神は何故私を見離した！！！！あゝーーーーっあゝ  
ーーーーっあゝーーーーっ…あゝーーーーっ」

私の中で、天変地異が起きた。

今まで優しいと感じていたことが厳しく、厳しいと感じていたことが優しく感られた。

自給自足？自己神格化？  
これが自我なのか？

わからない…

そして…私は気を失った

## 未知との遭遇

「メヲサマセ！！ワレワレハアクマダ！！メヲサマセ！！」

眩い光の元、何やら単調な話し方をする声にどやされ、私は目を覚めました…

銀色のタイツを全身に纏い、真っ黒で巨大な目はまるで、マッカーサー大尉のように鋭く私を見つめていた…

「アクマダ！！ワタシガアクマダ！！ワタシガアクマダ！！」

何度も自分を悪魔だと自負する…え、エイリアン？グレイ…か。は、

私を困らせた。

辺りは柔らかいイメージを帯びた精密な機械群が立ち並び、他のグレイ…宇宙人が何やら操作をしていた。

「あ、悪魔？お前が人ん家のベッドをクルクル回してたのか？」

宇宙人はバカに長い指をプルプル震わしながら、私の質問に答えた。

「ソウダ。オマエノベッドハドウリヨクゲンニナッタ。ハンエイキ  
ユウテキニリヨウ…カツヨウスル…」

動力源になるのか…

寄りによって私のベッドが…

「シンパイスルナ？ワタシタチノチヨウサノケツカ、モットモコノ  
チイキニガイノナイドウリヨクゲンニナッタカラ…シンパイスルナ  
？」

心配するなって言われても…

「……あっ……うっっ……」



言葉にならなかった…

しざつ

宇宙人達が重力に関係なく、高所にある機械にふわふわ浮いて、作業しているのを見ているうちに、体に感覚が戻ってきた（というよりは、体に意識が行かなかったというか…四肢五臓六腑のような感覚だろうか？）

「うおっ…なんだこれは？」

体中を縛り付ける物はない…  
しかし、体が動かない…

金縛りのような…

内臓は無意識に動いているというの、に…

「カッテニウゴケナイヨウナマリョクヲツカッテイル。ワレラハア

クマダカラダ。」

そう言い残し

宇宙人はふわふわとマンションで言うところの三階に当たるだろうか？

その高さまで行き、何やら作業し始めた…

もう…何が何やら

うちに帰りたいとも思えず（なんせ、ベッドがクルクル回りっぱなしだから）

出口を探すなど、そんな余裕もなく

魔力…魔力…

彼らの話に合わせてなければ…

突破口を…はったりか？紳士的に？いや…負けを平に認めよう…

「あ、悪魔よ！！私の負けだ。さあ…私を解き放ちたまえ！！」

1体の宇宙人が私の方を向き、私の足を右、左の順番で指さした。

「ドコニデモイケ！！」

そう言うと、宇宙人はまた作業に戻った…

確かに、私の両の足は動くようになった…

足だけ  
！  
：

## 宇宙人の励まし方

「あーっ！！足しか動かねーっ！！！！なんとかしやがれーっ！！」

私はとうとう…と言うか、案の定壊れた…。

勝負に出たのだ…

壊れたと言うのに

前向きな発想を本線に、最悪の事態を…想定していた…。

「ひっ…あーっ！！！！げ、激痛だけを伴うとかだろ？麻酔によって除去されたすべての”痛み”がお前等の手によってこの施設に蓄積されていて…ひっ…いや、よ、止せ？わかるだろ？わ、私のベツ

ドが…む、無害なんだ。」

咄嗟の思いつきにしては、宇宙的で残酷で…ぞ、斬新だし、有り得  
そうな最悪の事態だ…

「はあ…はあ…はあ…見てみる？もはや、拷問の意味もない…。ひ  
っ…よ、止せ！！」

また、1体の宇宙人が今度は私の耳元までやって来て囁くように話  
し始めた…。

「アンシンシロ？コヒツジヨ。セカイハカクニヨツテホロブ。オマ  
エガシヌノハソノアトダ。アンシンシロ？ソレトモ、カクデセカイ  
ガホロブマエニ、アンラクシサセテヤロウカ？イマノオマエナラ、  
ワカルハズダ。」

茫然自失…

絶望の中に光を見た私は、茫然自失した…

「人類と供に滅びたい…私を家に帰してくれ。」

私はそう言い残し、意識を失った…。



s t a y

そう…私は樂觀視していたのかもしれない。

あれほど喚いた私なのだから、目が覚めたときには、地についたベツドでした…みたいな

そんな期待をしていた…

「オキロ！ワタシタチハアクマダ！！」

眩いばかりの真っ白な部屋ではまだ幾体もの宇宙人がふわふわしながら、作業していた。

あ、悪魔だ…

「オマエニチカラヲヤル。ミッツノナカカラエラベ。ヒトツハソラ  
ヲトブチカラ。フタツハミタイモノヲミルチカラ。ミッツハワタシ  
タチノナカマニナルチカラ。サアエラベ。」

ち、力？

私は悪魔と契約を交わしているのか？

いや、待てっ

私なりにこの究極の3択を吟味しようじゃないか？

何々？

まず、空を飛ぶ力か…奴さん方ふわふわ浮いてやがるな…確かに

うーむ…良い…

二つ目は見たいものを見る力…か…千里眼みたいなものか？

…良い…

最後に宇宙人になれる力…か

「お、おい…なぜ、私にそんなチャンスがあるんだ？」

宇宙人は無表情だが、不思議そうな顔で私を眺めた。

「ザンネンダガ… チャンスデハナイ。 コレハラクインダ…。 オマエ  
ノベッドヲドリヨクゲンニスルニハ、 オマエニチカラヲアタエル  
シカナイ。 コトワルケンリハナイ。」

喜ぶ暇もなく、私は現実に戻されていった…。

## 周回遅れ

輝いている人間を見る度に私は、私のようなものは常々思っていたことがある。

やがて、終わりは来てそれでも生きようと願うなら、私のようになるのだと…

人生はそうあるべきだし、そうあれば…多くの人が救われるから…

輝いている人間の発するメッセージには常に多くの人を客観視する意図が含まれているが

私が望んでいたのは、終わり…手中にあった輝きの終わりなのだ…

「ときに、異星人よ？三つの力、一度ずつ試させてくれはしないだろうか？」

宇宙人が少し笑ったような気がした…

「イイダロウ…スコシハハナシノワカルヤツノヨウダ…」

違うさ…私は私を手のひらの上に乘せたただけだ。

私の体は嘘のように軽くなり、縛り付けられていたかのような閉塞感  
は寸分もなく

体が浮き上がった…

”私はバカ正直な人間です” とも言わんばかりに体が浮き上がった…

「コレガソラヲトブチカラダ。オマエガコノチカラヲカクソウガ、  
ヒケラカソウガワタシタチニモンダイハシヨウジナイ。タダ、チカ  
ラヲホジスルダケデ、スバラシイドウリヨクゲントナル。」

寸分の閉塞感もない私の感覚は寸分でも良いから閉塞感を…

この力は間違っている...



## インスタントパaddockス

「ヨシッ。オマエガエランダトオリ、ソラヲトブチカラヲアタエタ。  
チキュウニモドレ。」

躊躇ではないが、反論の余地なく私は蒼い光に包まれた…

光から覚めた私は、薄暗い部屋の中にいた…

ブオンブオンとベッドが相変わらず回り続ける部屋

タツちゃんの薦めで、ファンになったアイドルグループ『シェパー  
ディブオブプードル』のポスターが貼ってあり…

タッチちゃんは<sup>シェバーディオブブールドル</sup>SOPを危険視すると同時に愛していると言っていた…

タッチちゃんが言うには、油田は半年で完成するようになった。とか地球に飛来した隕石は、地球側の石からの逆輸入だ。とか

SOPにディープだった…

ブオンブオンブオンブオン…

すでに、動力源となってしまった私のベッドはタービンのように力強く廻っていた…

私はベッドより10寸ほど高く浮かんでみた…

「タツちゃんが言ってたな。インスタントパラドックスは神曲だつて…世界が回っているってことは、最初か現在が嘘ってことらしい…」

タツちゃんらしいや…

「キラキラ夢を見たの　優しくて嘘をついたのに　キラキラ夢を見たの　怖くて嘘をついたのに」

SOPの代表曲『インスタントパラドックス』を口ずさみながら、  
私はまた一寸、また一寸と上昇していった…

## 聖痕現象と聖教徒の淫乱

私は薄暗い部屋の窓からシャボン玉のように飛び出し、空を縦横無尽に駆け回った…。

すべての人間に自分のできる限りの無重力を与えているかのような浮遊感は、重く…とても孤独で…前衛的だった。

異星人の奴らは、私が力を持っているだけで良いとは言っていたけど、どんなカラクリなんだろうな…

超高エネルギーを生み出すカラクリってやつが、あのベッドをクルクル回転させることで生まれるんだろ…

まあ…世の中の電力の総てはタービンだから…

要はタービンが回ればいいんだ…

「ハハハッ 見慣れた街並みがネバーランドみたいだね…」

夕暮れ時の景色は炬燵に潜り込んだみたいに真っ赤で、誰かが自分を見つけたしやしないかと、かなり興奮していた。

「あっ…えーっ！！人が空を飛んでるよっ！！知らない人が空を飛んでるよー！！」

小学生らしき少年が私を指さし、あたかもスーパーマンかのように……しかし、明確に他の友達に伝えていた。

オーラルセックスのような……いや、相手が小学生だからだろうか？

私のような産な奴は、穴があつたら入りたくなるみたいに、薄暗い部屋に一目散に逃げ帰つたのだつた……

彼の少年の友達間での信頼を損ねる形になつたか……

私は罪悪感の真っ只中にいながら……帰路を得たのだつた……

## 繁殖欲に着眼

私は小学生に怯えていた…

それは、自分の与えられた力を認め始めたからかもしれない…

だいたい、あの小学生の少年…だけに見られたのか？

実は反芻児で、良い意味でトリ役というか…

皆は既に気づいていて、答えを待っていたとしたら…

それは導かれるように、私を怪人扱い…いや、もはや存在しなかったことにするやもしれない…



薄暗い部屋で、発起を隠匿することばかり、考察していたが…

思い出せ！！

私が小学生だった頃

何に心を奪われていたか？

U F O か？エイリアンか？なんだった？

ダメだ…

まったく思い出せない…

だからこそ、怯えているんだ。

あの小学生がどんな動きをとるのかを…

自意識過剰になり、私は弱いものを探すように人道を逸れた虫けらのように一塊に重んじていった…

空を飛べるからなんだ？

もし、空を”飛べなければ”悩むことではなかったのに

私は無意識に敬遠していた”回転するベッドに突っ込む”と言う愚行に出てしまった…

バキッベキッ…

骨が折れる音がした

痛みがどこか遠くにあり、内臓に刺さってやしないか？  
砕けた骨が体内に残りはしないか？など

一丁前に医者のような判断をしながら…肉々しいイメージを保ちながら、最後の力を振り絞り、道路上に飛び、降りたのだった…

## 薄れゆく存在感

痛みが迫ってくる…  
違うことを考えたい…

ほ、骨が何本も折れてるんだ。痛いに決まってる。あの異星人どもが早く…早く私を見つけてくれさえすれば…

「うおっ…デコポンっ！！大丈夫かっ?!」

タッちゃん…

タッちゃんの巡回時間になんとか重なった…  
タッちゃんになら、すべてを話せる。

「デコポンっ！…誰にやられたんだ！…デコポンっ！…」

安心したやら、なんやらで私はタッチちゃんの前で笑ってしまった。

「アハハハハッ！タッチちゃ…ゴフッ…」

吐血した…  
痛みが襲ってきた…

ヤバイ…ううっ…

「あーっ…ゴフッゴフッ…」

私の痛ましさに、タッチちゃんは慌てふためき、ケータイを取り出した。そして、救急車を呼んでくれていた…

病院か…

どうしよう…説明…

「えっ？患者の状態？…かなり苦しそうです。血も吐いてるし…なんだろう…とにかく来てくださいよー!」

タッチちゃんが救急車を呼んでるうちになんか考え出さなきゃ…

この大怪我の原因を…

ベッドがクルクル回転していて、それに突っ込んだから？何を言っているんだ…ましてベッドがクルクル回転してる理由なんて…宇宙人の話をするわけにもいかないし…外科と精神科を梯子するのだけはイヤだ…

私の存在感は意識的に薄れていった

## タツちゃんの仲間のカーニバル

タツちゃんは仲間を持っている。

一人はすでに紹介したけど、カミカゼ…

タツちゃんの側近的な男

トレードマークは坊主に生える一本線のモミアゲ…

次は、カルテ…物凄くフランクで、時にタツちゃんの自尊心を崩壊させるほど…

トレードマークのもじやもじや毛は天パーだけど、カルテは天才パワの略だってさ…



んで…次は、カード…

無口で口下手だけど、的確に物事が運ぶ度、カードをお星様と崇める習慣がある…

トレードマークの金髪の七三分けは、タツちゃんのお気に入り…

120

最後にカーニバル…  
実は、タツちゃんが唯一仲間だと思っていない…七色に染まった長髪のサイケマン…

タツちゃん曰く、俺がとやかく言わない方が、カーニバルの犠牲者が減るからとか…

そんな冷酷無比なカーニバルが、どこからともなく現れ、タッチャんがあたふたしてるケータイを取り上げた…

「異星人の仕業です。解るでしょ？またベッドみたいですよ？はい…はい…」

ピッ…

啞然とするタッチャんを余所に、カーニバルが私を見て屈んだ…

「デコポオン？水臭いぜ？未知との遭遇には一人で立ち向かうべきじゃないぜ？必ず、人間にも伝わる答えがあるんだ…」

これからどこにいくやら、一張羅のタキシードを着たカーニバルは、  
社会の窓を全開にしていた…

## カーニバルライク

「デコポンも宇宙人に会ったんだろ？デコポンのことだから、三つの力、全部欲しいとか間抜けなこと言っただよな？あのな…デコポンは空を飛ぶだけの男になってしまったが…ワターシはウチュージンのナカアーマであるから、その大怪我も立ちどころに治せるんだぜ？」

私はタツちゃんの方を向いた…

タツちゃんは目を逸らし場の悪そうな顔をしていた…

「そ、そりゃ…良いや。じゃ、じゃあカーニバル先生？頼みます…ぜ。」

カーニバルは頷き、私にウィンクした…。  
些かの寒気と共に、私の怪我は完治した…。

「ハッハッハアーツ。まあ、落ち込むなよ？デコポンよ？ウチユージンのナカアーマなのは俺だけだ…タツちゃんは空さえ飛べないぜ？」

えっ？

みんな契約したって言ってたじゃないか？  
タツちゃん？

私はまたタツちゃんの方を向いた。

「…まあ、そう言うことだ…デコポンよ？気を悪くすんなよ？じゃあな…」

タツちゃん…

タツちゃん…違う!! 私は…私は出来心なんかで空を飛びたかった訳じゃない…「生きたい」一心だったんだ…

しかし、去っていくタツちゃんの後ろ姿に私は声が出なかった…

「大丈夫だ。デコポン! カーニバル様がついてるぜ?」

違うっ!!

タツちゃんが正しい!!

タツちゃんが正しい!!

宇宙人は本当に悪魔だったんだ！！

「ウワァアッ！！」

私は猛り狂い、空に飛び出した…

「タツちゃん！！タツちゃん！！ウワァアッ！！」

自分の力に恥じながら、それでもその力こそが償いだと気づいたんだ…

ララバイ

タツちゃんが去っていつてから、空を飛んだけど、タツちゃんはまだ居た…

居たというか…確認できたというか…

「デコポン…違うんだ。タツちゃんと俺は二手に分かれたに過ぎないんだ…宇宙人が言うには、悪魔つてのは宇宙人のことではなく、実際に存在する宇宙科学を持ってしても駆逐できないウイルスみたいなものらしいんだ…そこで、タツちゃんは宇宙科学を”使わない”道を選び、俺は宇宙科学を”使う”道を選んだんだ…宇宙人も仲間なんだぜ?」

空を浮かぶ私の前に、また空を浮かぶカーニバル…一瞬虹でも架かったかのようなカーニバルの虹色の長髪が、私を見つめているかの



ようだった…

しかし、頭は混乱するばかり、悪魔とは何なのか？ベッドがクルクル回転する一件は宇宙人の仕業だと解ったし…

「カーニバル…つまり、悪魔とは何なんだ？」

カーニバルは微笑を浮かべ、目を逸らした。

「悪魔が何なのか？が解れば宇宙科学でやつつけられるってのはどうだ？デコポン…まだ時間が掛かりそうか？」

身震いがする質問だった…すべてがリセットされたような…自分らしさを取り戻せたような…

「そんなアバウトなんじゃなくて、悪魔って…」

するとカーニバルの様子がおかしくなった…

急に苦しみ始め、肌は青黒く、目は赤くなり、髪は真っ白になった

牙が生え、体は二周りは大きくなった…

「ツマリ、コウイウコトダ。ウチュウカガクノダイショウ…ウワァーアッー！」

カーニバルは物凄いスピードで彼方へ飛んでいった

「あれが…悪魔なのか…」

私は暫く、空に浮かんでいた…いや、浮かびすぎていた。

目下に入集りができていた

デコポンだっ！

「あつ、アレ、デコポンだっ！！デコポンだよ。」

あの時の小学生だろうか…

近所では、タツちゃんと連んでるだけで名前が通るもんだし…な  
タツちゃんの人脈は計り知れない…

が…しかし、バレた…

宇宙人はバレようが、バレまいが構わないと言っていたが…

私に至ってはバレては困るのだ…困るはずだ。

「ハハッ、デコポンの奴死んじまったか？ありや、幽霊の類だぜ。」

同級生だったタチウミ館海の奴にまでバレた…

素潜りの日本記録を持つ館海は真っ白な肌にも関わらず、海が似合う男と皆に知らしめた奴だが…

まさか、私が空を飛ぶとは思っまいな…

「おーいっ！！みんなあっ！！オラは死んじまったであーっ！！アハハハッ！！」

私が空を縦横無尽に駆け回っていると

空から光が伸びてきて、私を包み込み…  
体の自由が利かなくなった…

事もあるうちに、館海の前で…これは拐かされている…私は宇宙人達に拐かされている…

「あーっ！！UFOだ！！デコポンがUFOに吸い込まれちゃったぜ！！チクショーツ！！不可解で奇妙奇天烈で…あーっ！！デコポンっ！！」

館海が私に何か言ってたみたいだったが、無情にも私はUFOに更迭されていくのだった。

凡庸、水面までの間に

光の海を… 館海のやつに会ったからだろう…

まるで、素潜りをやり終えて、海上に顔を出すまでの浮遊の間…

そんな時間がこの私に与えられた…

記録だけで十分だろう… 走馬燈など…

眼前が真っ白になり、私は視界を奪われた…。

また、ベッドに寝かされ、意識だけが続いていた。

「ザンネンダ…デコポン…」

宇宙人にまでデコポンと言われる始末…カーニバルが言うとおり仲間ってわけか…

「ザンネンダ…デコポン…デコポンハナンヤカンヤイウテモ、チカララヒケラカシタリセンオモトツタンニ、ワテツライワ…」

前に話した宇宙人とは違ったんだろうか…

何やら流暢さに深みがあるというか…言葉尻だけでイントネーションは酷いくらい単調だが…

「アキマヘンヨ？シャカイジンナンヤカラ、ナンカモウワカリマツシャロ？タシカニドウリヨクゲンハカクホデキマスケド、ワカリマ



「ッシャロ？」

解りまっしやらず…

残念な私には解りまっしやらずだった…

「動力源って…どんな仕組みなんだ？悪かったよ。」

私の半ばぶっきらぼうな質問に対し、宇宙人はため息をついた。

「ハア…アンサンセツカチヤカラ、カンタンニセツメイセナアカンナ…マズ、ドウリヨクラウミダスニハイキトシイケルモノノオモイガヒツヨウナンデスワ。」

”オモイ”か…

確かに仮に電気があったにしても、コンセントにプラグを繋ぐことで電力を得れると”思えない”としたら？

せつかくの発電設備も何もかも嘘になる…

太陽があるから、暑いんだろうが、太陽が熱いかどうかなんて私は知らない…

ってことかな…

t o h e l p

「ホンマハナ？ジケンヲワンサカオコシテ、ヒトビトノチュウモク  
ヲアンサンニムケサセヨウオモタンヤケド、マア、アンサンガメダ  
ッテシモタカラナ…」

分かるような…分からないような…  
宇宙人は兎にも角にも残念がつている。

「事件と私、どんな意味があるんだ？」

相変わらず、ぶっきらぼうと云うか…カルテほどではないにせよ  
些かフランクな質問に宇宙人はまたため息をついた…

「イミツチューカナ？ジブンチノベッドガタイヨウヤネン…。ジケンオキマシタ。ハテ？ナンデデシヨ？アンサンチノベッドガクルクルマワリヨルカラヤツ！！ツテハナシヤナ。ワカリマツシヤロ？」

…解りまつしやら…ないっ！！

なぜ、それが動力になるのか  
私は自分の頭の堅さを呪った…

いや…諦めるのはまだ早い…

私のクルクル回ってるベッドが太陽…ってことは、UFOが動いているのはベッドがクルクル回転しているからか…

「つまり…つまりだっ！！ベッドがクルクル回転しているから、という即席の既成事実が必要なわけだな？道筋というか…なるほどっ！！宇宙科学は凄いなっ！！人間の行動によって生まれる何らかのエネルギーってわけか？」

宇宙人は深く頷いた…。

「ソウデスネン。ワカリハリマシタカ？ワテトシテハ、アンサンカ  
ンレンノジケンヲオコシマクツテ、アンサンハ、トンデニゲルツチ  
ユーズシキヲオモイエガイトツタンヤケドナ？ドヤ？」

ドヤ？って言われてもな…

私だって羨望を受けたいに決まってる

どっちでも良いんだと最初に言っただじゃないか…

「私は空を飛び回り、皆に夢を与えたい!!」

すると、宇宙人がまた、深く頷いた…。

「ジャア、アンサンニヒーローニナツテモライマシヨウカネ…」

その後、私は宇宙人と私の演じるヒーロー伝について、練り上げたのだった…

t o b e h e r o

「これは、あくまでも演技だからな？デコポン。」

タツちゃんと来たら、宇宙人に対して一步も譲らなかったとか…  
その結果、まあヒーローには私が良いのではないかと提案したそう  
だ。

「しかし、実弾をデコポンの心臓に打ち込むわけだから…宇宙人共  
と俺らの絆が試されるわけだ。」

場所はタツちゃんの部屋。シェパーディブオブプードルのポスター  
で埋め尽くされた

ビーボーイらしからぬアイドルグッズだらけの部屋で私達は、いや、私がヒーローになる為に計画を練っていた。

「タツちゃん…でも、実弾って大丈夫かな？宇宙人だよ？」

タツちゃんは満面の笑顔でそれに応えた。

「おいおい…失敗したら、俺がデコポンを殺したことになるんだぜ？そこは完璧に大丈夫だ。それより、デコポンの心臓を撃ち抜けるかどうかなんだよ。」

だ、だよな…



タツちゃんはホーミーだもんな…

「な、なんだよ。タツちゃん。わ、私を撃つことが楽しいみたいじゃないか？w」

もちろん、冗談だ  
ホーミー同士の冗談ってやつだな。

「おもしれーのは、おもしれーけど、それも俺らと宇宙人との絆の  
為だ。俺は歴史的なこの瞬間にヘビーな答えが待ってる気がするよ  
…」

タツちゃんの話は頼もしく、私の心は興奮し、  
それを落ち着かせることで一杯だった…

「だね？タツちゃんはスゲーな？」

私達は夜通し、復活祭の計画を話し続けた…

t o h e a r t

タツちゃんの配役によれば、館海と私を発見した小学生にこのシヨ  
ーを見せれば、確実にうまくいくらしい…

「だいたい、細かい根回しは要らないんだよな。デコポンが空を飛  
び回ってればよ？自ずと注目されるんだからさ。要は俺の拳銃捌き  
なわけよ…」

タツちゃんは珍しく緊張していた…

タツちゃん曰く、これは集大成であり、油断ならない始まりだって  
ことらしい…

「l i f e g o e s o nなんて言いたかないが、まず、デコポ  
ンは実弾を心臓にぶち込まれるわけだから…デコポン？心から、  
l i f e g o e s o nだ。」

私とタツちゃんは

静まりかえり、互いの右腕を斜めに押し当て、絆を確かめ合った…。

「良いんだ…タツちゃん。仮に宇宙人が単なる遊びでこの計画を持ちかけていたとしても、歴史的な…へ、へビーな答えが待ってるよね？」

タツちゃんは深く頷いた…

私の伝説が始まるなんて夢にも思わなかったが、タツちゃんとならやれる気がする…

「ほら、デコポン。これやるよ。SOPのハンドタオルだ。俺愛用のな？」

タツちゃん…

タツちゃんから手渡されたハンドタオルには、『S?P』と赤文字で書かれてあり、桃色のタオル生地と見事にマッチしていた。

「サンキューだよ！タツちゃん！！絶対大事にするよ！！そして、絶対成功させようね？」

私達は計画の成就を予感せざるを得なかった…

少なからず、あの時の私は浮かれすぎていたのか、疑うこともなかった…。

タツちゃんが私をどんな目で見ていたかなど……もつてのほかだった

「当たるようにしてくれるさ…」

結局タッチちゃんは宇宙人が巧い具合に私の心臓を打ち抜くような弾道を描くだろうと、結論づけた…

「当たって当たり前、要は無敵のデコポン、不死身のデコポンを知らしめたいわけだから…」

タッチちゃんはとても残念そうだった…

「タッチちゃん…私としてはタッチちゃんがヒーローになるべきだと思っただけだな。私も生半可に空が飛べるから…」

タツちゃんは深く頷いた

「伝わってしまったか…俺はSOPに相応しい男になりたいと日がな真剣に、それでいて紳士的に思慮していたし、宇宙人の手なんか借りずに成り上がりたかった…ヒーローになりたかったよ…」

タツちゃん…

私のヒーローなんて名ばかりの…でも…豊かなエネルギーを生み出す

私はエネルギーを生み出す…

「タツちゃん！…お、オレやるよ！…お…可笑しいかもしれないけど…私なら…タツちゃんだっているし、宇宙科学だって凄いだろ？」

タツちゃんは親指をグツと立て、私も親指をグツと立て返した…

無敵のデコポン

不死身のデコポン

それがヒーローの条件。私は止まらない優越感を野性で誤魔化していた…

誰だっそうだ  
ヒーローになりたいに決まってる…

始まる…私の復活祭が



## ポップインフレ

宇宙科学ほどではないにせよ、我らが高度文明は素晴らしい…

動物の力ではどうしようもないことを、さも当たり前のようにこなしてきたのだから…

我々人類も捨てたものではない。

木陰が巨大建築物となり…

馬が自動車となり…か？

素晴らしい…

そして、それに課せられる重圧もまた…

素晴らしい…

私はクルクル回転するベッドの傍らで眠り  
翌朝、復活祭へ向け心の準備をしていた。

へっちゃらだ。へっちゃらすぎる。

「ちゃんちゃらおかしくて、臍で茶を沸かせるよー!」

自分への叱咤激励は何か…言い得て妙だった。

私は居ても立つても居られず、床から跳ね起き（もちろんベッドに当たらないように）カーテンを開けた…

「えっ？あれ？」

寝静まる町並みをつつくように  
ザーッザーッと雨が…

b o o m

b o o m

それを見計らったかのようにタッチちゃんからのメール

『デコポン。雨天決行だが、忘れるなよ？ 館海と第一発見者の小学生の前で撃たれるのが最大のポイントだ??』

だ、だよな…  
相変わらずタッチちゃんは冷静だ…

私はカーテンを閉め、床についた…

雨天決行だって… 館海や例の小学生は現れるのだろうか？

「いや、何度だってやってやる！！」

私は夢に入るドアを見つけたかのように  
微睡みに更けていくのだった

## 力業

「よく見てろよ？」

パンッ！！

タツちゃんの掛け声と共に銃弾は私の心臓を貫いた。

激痛だった…一瞬だけ激痛が走ったが

世界中の物好きに分け与えでもしたかのように痛みは消え去った…

タツちゃんの予想通り、宇宙人がうまくやってくれたみたいだ…

…明け方

早々と目が覚めた私は

私を呼ぶドアベルで体を起こしたのだった…

ドアを開けた先には、館海と例の小学生…

名前を俊哉君と言っらしい…が、タツちゃんと共に立っていた…

こんなんで良いのか…

雨も強降りの中

館海が私に握手を求めてきた

「デコポン！…この奇跡に立ち会えるなんて俺素潜りやってて良かったよ！！」

色白なのにオーラは色黒…そんなイメージの館海…

「お兄ちゃんって不死身なの？空は飛べるし、不死身だなんて格好良すぎるよ！！スナック菓子持ってきたから！！これで緊張しないで済むよね？」

小学生にしてはデカイ五十寸とちよつとはあるだろう。小太りの俊哉君はテカテカのホッペに抑えきれない躍動感を蓄えているかのように…太っていた

「ありがとう！！二人とも！！タッチちゃんもっ！！！！絶対うまくい



くよ……！」

雨足は強くなる一方だったが、タツちゃんはそれを感じさせないほど冷徹に私の背中を押した

「デコポン。さっさと空を飛べよ。これは遊びじゃない。ミッシェンなんだ。」

タツちゃん……

厳しさの中にも優しさが見え隠れするタツちゃんの、激に応えなければっ！

「オーライだよタツちゃんっ……！」

私は一歩足を前に踏み出すように、地面から足を離した

## キープ&オーバー

空を飛び回り始めた私はギャラリーを見回した…

視界は雨のため最悪で、と言うよりは館海、俊哉君、タツちゃんと合わせて3人しかいなかった…

新しい出会いでもあるものかと、私の思考は悪条件であるにも関わらず、楽しめていた…

「よく見てるよ?」

パアンッ!!

タツちゃんの持つてる銃はリヴォルヴァー式で、レトロな雰囲気のある小型の銃で、飛ぶ前に見せてもらったんだが…

当たらないだろうと言う、何の根拠もない自信が私を、私の気分を抑揚させたのも言うまでもない。

のだが、案の定見事に命中…

仰向けにアーチを描いた私の遺体は宙に浮いたまま、多量の出血をしていた…

「わぁっ！ー！タツちゃん！ー！それホンモノじゃんか！？何してんだよ！ー！」

俊哉君は戦慄き、周りを走り回ったが、ぬかるんだ地面に足を奪われ、転んだ…

「俊哉っ！！タツちゃんを…デコポンを信じろっ！！これから奇跡が起きるんだ。」

何を思ったか  
すっ転んだ俊哉君を抱きかかえ、館海が語った。

しかし…館海が想定したであろう奇跡は起きなかった…

宙に浮いたままの私の体は浮力を無くし、地面に叩きつけられた…

「う、うおーっ！デコポおんー！」

タツちゃんだ…

銃を投げ捨て、私に向かい駆け込んできたタツちゃんもぬかるんだ地面に足を奪われ、すっ転んだ…

「ち、チクショーっ！！デコポおんー！」

タツちゃんはへたれ込み、空を見上げ叫んだ。

うなだれる3人…もはや、宇宙科学に翻弄され果てた3人には為す術なかった…

「怖かったんだ…宇宙人相手にはコレしかないだろ…コレしか…」

タツちゃんは

緊張の糸が切れたように泣いていた

雨足は一向に修まる気配はない。

私はどうなってしまったのだろうか

## タイムオーバー

幽体離脱というやつだろうか？

銃声をあざとくも聞きつけた住民が通報したらしい…

私の視線は空を飛んでいるときと同じで見下ろすように、復活祭の後を見ていた

タツちゃんが警察に連行された…

廃校が全焼した一件で疑いはかけられていたものの

タツちゃんの人脈がそれを許さなかった…

しかし、このままでは余罪まで着せられかねない…



タツちゃん…

血塗れで倒れる私の体は救急車に乗せられ  
おそらく病院へ…連れて行かれた

宇宙人にやられた。と言えば病院も取り合ってくれはす。

カーニバルがやってたじゃないか？

… タツちゃん

どんな正義だろうと  
人の気持ちが入らない世界なんて…

私は興味が持てない…

タツちゃんは悪くないんだ…

私が甦れば、タツちゃんは無問題で解放される…

サイコなマードーはホーミーじゃない…

あの草臥れた体に戻るべきなのか？  
宇宙人は何を考えているのか？

雨足は治まる気配もなく、救急車の赤いランプを頼りに私はフワフワと後を追いかけていた…

レクチン

私は死んでしまったようだ…  
しめやかに葬儀が行われていた…

運ばれた病院で、医者がタツちゃんを見るなり、

「コレはダメですね…」

と即答した…

タツちゃんは泣き崩れ、何も言わなかったが、私にはわかる…

宇宙人の仕業というネックが吉にも凶にも出ると言うこと

タツちゃんがこの辺りを仕切っていた点からも、嘘を真実に変える力がある（つまり、医者や宇宙人など信じていなかったわけだ）と捉えざるを得ない

タツちゃんは私を高層ビルの屋上で銃殺し、地面に突き落とした。

という現実を突きつけられたのだった…

タツちゃんが悪い訳じゃないけど…

何故だか、タツちゃんが選んだ道に見えてしまう…

「タツちゃん！！ありえねえーよ！！俺だったらこんな仕打ち、その医者<sup>の</sup>舌を食いちぎってでも取り下げさせてやるっ！！」

カルテが診察室に乗り込んできてから、話はややこしくなっていた…

「こんな馬鹿げた話を通つちまったら、俺らがあの11人の焼死体を作ったみたいになつちまうじゃないか？ だろっ？！」

しどろもどろするタツちゃんを余所に、医者はカルテを睥めた

「君…このカルテを見たまえ…死因である胸の銃痕など気にもならないほど…よほど高い場所から落ちたと見られる…死体遺棄の疑いさえあるのだよ？」

カルテは押し黙った…

「そ、空が飛べるんだよ。カーニバルみたいにさ。デコポンはさ。」

カードが後ろから出てきた…

「空？止してくれ…私もね？直に回転するベッドを見せられたことはあるが、人間界が管轄する問題ではないんだよ？あーっ頭がおかしくなりそうだ！！君たち出ていってくれ！！」

カーニバルはこうなることがわかっていたのか、現れなかった…

私はどうなってしまったのだろうか…



a f t e r   t w o   y e a r s

私が死んでから、二年がたった…

幽体のまま、二年間さまよい続けた…。

町の人々に助けを求めていたのが、一ヶ月くらいか…

何を境にかは忘れたが、願いは暴言に変わった…

しかし、何を喚いてもきつと寒気を催す程度で、変わり映えはしない…

女風呂を覗いたり…

原発の様子を見たり…  
売れ筋バンドのライブの裏側にも行った…

寒気がしたんだろう…

私は二年間、死ぬ思いで死んでいた…

もちろん、タツちゃんの様子も見に行っ  
たし

カルテやカードだって…

カーニバルだけ所在が掴めなかったけど…

二年たったんだ…

「宇宙人の話なんて誰も信じない… タツちゃんは刑務所で酷い目に遭ってるし… 何故、私の意識はまだ存在するんだ？」

元に戻る体はもう無く、私は何度も寺院や教会を訪れたが…

恐らく寒気がしたんだろう…

噓をされた…

葬儀では癒されない霊体とでも言うのか？  
宇宙人と関わったからか？

「辛い…辛い…辛い…宇宙人は本当にタッチちゃんにあの計画を持ちかけたのか？体よく私を葬り去るための口実だったのではないか？」

最後にはタッチちゃんまで疑う始末…

カルテやカードは、まだまだタッチちゃんをリスペクトしてるのに…

私はどうなってしまったのだろうか…

カルテやカードのように、タッチちゃんを支持したい…

カーニバルを探すしかない…

## 行司

二年間何故か、カーニバルを探そうとしなかったのは、やっぱりタツちゃんが好きだったからだろうか？

タツちゃんはカーニバルをホーミーだとは思っていなかったし、タツちゃんはカーニバルが裏で、何をやってるんだ？と思ってたに決まってる…

宇宙人と同等の力を手に入れた男だから…

そのサンクチュアリは大切にしていた…

だが…コレはたぶん…

そのサンクチュアリ像が独りよがりの先入観ってことなんだと

いろんな意味で考えざるを得なかった…

カーニバルが行きそうな場所…行きつけの美容室とか男物のランジ  
エリーショップとか

風漬しに…

他の仲間には二年間も付きまどってたのに…

どういうわけか

カーニバルに至っては、一、二時間で済ませたかった…のに

見つからない…

二年という時間の重みが体中を締め付ける…

「カーニバル！！どこに行ったぁー…！！」

たまらなくなつて、私は叫んだ…

カーニバル…カーニバルはホーミーなんだ…  
タツちゃんだって歩み寄ろうとしてた…



すると、空から光が降り注いだ…

私は魔法使いなのか？  
地震を感知する電気ナマズなのか？

そんな気分で、恐らくはUFOだが、今の私には救いの箱船…ノアの箱船に選ばれた生命体のように、信じられないほどの満悦の笑みで吸い込まれていった…

「カーニバルめ…寂しがり屋か？…フフフッ」

私は幸せの絶頂にいた

## 著聞を糧に越する男

UFOに吸い込まれた先には、タツちゃんがいた…

満悦の矛先が些か…狂っていたせいもあるだろうが…直立で立っている嬉しさよりも不動な自分を嘆きたかった

「タツちゃん？タツちゃんがどうしてここへ？」

タツちゃんはニヤリと笑い。モコモコと体を変容させ、カーニバルになった…

「探してたのは俺だろ？デコポン？先入観はよくないぜ？デコポン？現状は把握できてるか？」

煮え切らない怒りがカーニバルへ起きたが、如何せん煮え切らないものだけに、平常心を保てた。

「か、カーニバル…あれ以来姿を見せないから、悪魔にとり殺されて死んだのかと思ってたよ？ハハハッ」

すると、カーニバルはまた体をモコモコさせ、体を変容させ、例の宇宙人となった…

「ゴメイトウ…カーニバルハアクマニオチタアトクサツテシンダ…  
テンガイコドクノミデアツタカラ、ジケンニスラナラナカッタガ…

ジユウイチニンノニンゲンヲコロスコトデニイレタワレワレトド  
ウトウノチカラ…ヤツニハツカイコナセナカッタヨウダ…。」

ジユウイチニン…？  
か、カーニバルが殺したのか…

あの11人の焼死体は…

「ヤツハタチカワヲタテニ、ヒトリマタヒトリトサツジンヲオカシ  
タ…。ケイサツハレンゾクサツジントハトラエキレズ、ユクエフメ  
イトフンデイタガ、ヤツニウタガイハカカラナカッタ…ソシテ、シ  
タイノシヨブンヲタチカワノチカラヲカリオコナッタワケダ…」

そ、そんな…

タツちゃん達…あの同窓会の四次会でそんなことがあってたなんて…

「う…嘘だっ！！カーニバルだって不器用なだけで、サイコなマードーには及ぶわけがない！タツちゃんだってあんな風に言ってるけど、認めてたに決まってる…」

宇宙人はどこか不思議そうな顔で私を見ていた…

「オマエガドウオモオウトカツテダガ、キヅクノガオソスギタ…シカシ、オマエヲフツカツサセルノガコノケイカクノサイシュウモクテキダ…」

な、何を言ってるんだ…

私はとても深い意味で我にかえた…

今更甦ってどうする？

二年だぞ？

葬儀も行われたし

タツちゃんなんか刑務所で酷い目に遭いすぎて…くっ

館海は素潜りの世界ランクに登録し出すし

俊哉君は不登校続き…

カルテはキャバクラの呼び込み

カードはネット詐欺…

「この世に未練はないよ…私はこの世に未練はない…」

宇宙人は相変わらず不思議そうな顔で私を見ていた…

「イヤ、チガウ。キツクノガオソスギタンダ…ヨミガエルンダ!!」

私は眩い光に包まれ意識を失った…



## カルテの愚痴

甦った…と言うべきか…呆気ないと言うべきか…

私はネオン街の道の真ん中で素っ裸で倒れていた…

そして、生まれたての赤ん坊のように、何やら粘膜を全身に帯びていた…

さすがネオン街…  
クスクス笑う人は居れど、慌てふためいたり発狂するような人間はいなかった…

「お、おまえ…デコポンじゃないか？」

カルテだ…

メンソーレラブと書かれた派手な黄色のハッピを着ているが、相変わらずのもじゃ毛は…相変わらずだった

「ああ…甦ったんだ…」

カルテは発狂した

「あゝーっ！！何が甦っただ！！早くタッチちゃんを死刑にしろよ！」

「カーニバルの手柄をぶんどる気なんだよ…って死刑になったら、タツちゃんの手柄か…って手柄…か？とにかく…あ…タツちゃんは無罪だろ？サイコなマードーなんて、タツちゃんじゃないよ…カーニバルを探し出して、警察に突き出してやれば…おいおいっ大発見だぜ？宇宙人の存在が公的に認知されるんだぜ？デコポン？カーニバルの居所は知ってるんだろ？」

湯水のようにカルテが話通したが…話はややこしいカーニバルの説明もややこしい…タツちゃんはやっぱり11人殺したことになるみたいだし…

「カーニバルは死んだよ…宇宙人から聞いた…」

カルテはヘナヘナと腰が抜けたように座り込んでしまった…

「な、何が死んだだよ！！タツちゃんどうすんだよっ！！カーニバルの力は知ってるだろ？！」

うなだれる私の背後から声が聞こえる

「おーいっ！…さぼってんなよ？ちゃんと呼び込めや？…！」

どうやら、メンソーレラブでのカルテの上司のようだ…

「あつすみませんっ！ーもうっデコポン。話は後だ。じゃあな……」

二度と会うことはないだろう。と言う風にも聞こえるカルテの別れ際の台詞……

私は安易に言葉を信じることにした

## カードの期待

服…服を着ないと…

一人暮らしな私だが、家族はある…既に死んで二年…

ある程度のサイクルが持ち治った頃か…

粘膜塗れの体を引きずりながら、ネオン街を見渡した…

ん？カードが働く会社が近くにあるな…

腐乱死体のような私は、すでに怖いものはなく、ネオン街の暖かみを感じるに至っていた…

「あつた…」

カードが働く、あまり評判の良くないネット企業…

『チーフ』

出会い系からクレジットカードの制作まで

幅広くやっているらしいが…

ネット詐欺の汚名は付きまとう…らしい

私も幽体の頃はよく眺めていた…

「ダメだ…やっぱり止そう…私の家はまだあるかもしれない…ベツドがクルクル回ってるからね…」

二年の時間はすべてを億劫にしていた…  
勝手にうなだれた私は思いだしたように空を飛んだ…

「あつ…もしかしてデコポン？」



カードの会社はビルの九階、その窓から待ちかまえていたようにカードが頭からつま先までぴっちりした格好で顔を出した…

ブラウンのスーツに真つ赤な色眼鏡が、ネット詐欺と言う世間体と相まって、インテリ…かと思わせた…

「おっ…か、カードじゃないか？黄泉の国から戻ったよ？しかし、御覧の通りさ…何か服はないか？」

ニツコリとカードが笑い…社内に入っただけ…

「うちの会社のＴシャツと短パン…コレで良い？」

Ｔシャツをピンツと張り、私に見せてくれた…

筆記体で胸元に” c h i e f ”と書かれた紺色のＴシャツ…と紺色の短パン

「うーん…突っ込みどころがないなあ…でも、ありがとう…逆に助かるよ…」

カードは私に笑顔を絶やさず、手を振っていた  
(ハ・ハ・ハ)ノシ

空中で粘膜の上から着るＴシャツと短パンは…カルテのときと同じ感じがした…

「また来るからな？」

「うん、わかってるよ？デコポンも…頑張って…デコポン…タオルもあるんだけど？」

私はタオルも貰い  
夜の空をヨタヨタと飛んで、あのクルクル回るベッドのある部屋へ向かった…

私はどうなってしまったのか…

## カミカゼの隠匿

なんとか家までたどり着いたが…

そこには思いも寄らない客人が待っていた…

スキンヘッドに一本線のもみあげ…カミカゼだ

真っ黒なつなぎのビニールスーツを着ていたせいか最初、生首かと思わせた…

「いつもこの時間までデコポンを待ってたよ…」

そうなんだ…幽体の頃、唯一避けていたのは私自身の家だったのだ…

何故かクルクル回るベッドへの異常なまでの恐怖心からか、忘却に至っていた…

それに伴い…カミカゼも忘れてたってことだろうか？

カミカゼ…

「…カミカゼ？変なことが起きた…私はカミカゼのことを忘れていた。そんなことはないんだが、ふと気になった…おまえはいつから私達のホーミーだったっけ？」

カミカゼがニヤニヤし始めた。  
やっときましたか？デコポンさん。と言わんばかりの表情だった

「フフフツ…思い出したみたいだなデコポン。タツちゃんの幹部は初めからデコポン、カルテ、カード、カーニバルだよ…私がタツちゃんについたのは、ここ最近の話さ…」

やっぱりだ…  
カミカゼだけおかしい…

すべてタツちゃんより、早く優れた答えを出していた…  
タツちゃんはスポークスマンだと言っていたが…

本当にそうなのか？

「デコポンが幽体だったとき、二年の時間を費やさせるように町を動かしていたのも私だ…デコポン…ホーミーとは狭苦しい集まりだな…」

そんなまさか…幽体だったときだって…



「カミカゼ…おまえはいつたい何者なんだ？」

カミカゼはモコモコと体を変容させ、あのカーニバルがなって見せた悪魔になった…

「私が完全体…カーニバルが失敗作だよ…半宇宙人と界限では呼ぶが…宇宙人と同等の力を持っている…そして使いこなしていた…デコポン…二年の間、私は生き残る道はないかと模索していたよ…」

半宇宙人…

いや、それより何なんだ？生き残る道とは…

「カミカゼ…言いたいことはわかる…そして完全体なことも…しかし、だのに何故生き残る道などと言っただ？」

カミカゼは私の住んでいたアパートを見上げ、また私の方を向いた。

「終わったんだよ…タツちゃんは宇宙人に逆らいすぎたんだ…どんな歴史にも宇宙人の存在は確認されないけど、宇宙人に逆らったと言っただけで十分だろ？デコポン…お前が私にかかった呪いを解いたみたいだ…カーニバルみたいに…」

フシューッ…

嗅いだこともないような何かが腐った臭い…

それよりも目の前にある肉の塊はおそらく…カミカゼだろうか？

## カーニバルの最期

私は無気力のまま、部屋にたどり着いた…

ドアノブをさわると、スタンガンほどの電流が勢いよく体中に流れた…

気絶しかけたが…何とか持ち直した。

「こんな酷い静電気くらうなんて…うつっ…」

ガチャッ  
…

ドアが独りでに開いた…  
もはや、宇宙人のものってわけだ…

私は躊躇なく、部屋に入った…

部屋に入ると二年前と全く変わらぬ部屋があり、ベッドも変わらず  
クルクル回っていた

ザーッ

テレビがつきっぱなしだ…

砂嵐が映ってる…

「か、カーニバルお前…何だこれは？」

砂嵐から突如、廃校らしき映像に切り替わった…

タツちゃんが何かを見て驚いている

「タツちゃん。カミカゼはまだしも、俺やカードより情報遅いぜ？  
この死体の山はカーニバルが一人でやったんだぜ？」

カルテが自慢げにタツちゃんに説明していた…

「タツちゃん仕方ないよ？ハツタリも底をついたんだ。カーニバル  
が宇宙人にでもなつてさ。力つけなきゃ…さ？」

カードもタツちゃんを宥め始めた

「ば、馬鹿言っな！！マ―ダーだろ？コレは？しかもかなり名のあ

る奴らじゃないか？」

カーニバルはお手上げた。と言わんばかりに両の手を軽く挙げ、目を瞑り、首を横に振った…

「ハツタリは底をついたが、まあ…実力は元からあつたんだよ…名のある奴らとは言え、コバンザメみたいなもんさ…タツちゃんと言うクジラに張り付いてたに過ぎないね…」

タツちゃんは、カーニバルには何も言わなかった…

「火いつけるよ？それなら、こいつらの死がバレた方がタツちゃん  
ダサいわ…」



カミカゼがライターに火をつけた…

ザーッ

また砂嵐だ…

「やあ…デコポン…こんな醜い格好で御免よ？俺さ。カーニバルさ。今な？宇宙人に捕まって、ラストレターなるビデオレターを作らされてんの。」

悪魔になったカーニバルが画面に映った…  
私の方を直視した形で座らされている…

背景はあのUFO内のようにだ…

「宇宙人との契約の中に悪魔になったら、腐った肉の塊になるって条件があつたんだよな…デコポン…お前って奴は…まったく調子狂うぜ？俺がやった11人の人間も…これで浮かばれるんだろ？デコポンはあの夜来なかつたしな…わかってたんだろ？タツちゃん以外には教えといたはずだぜ？宇宙人つつて信じられなかったんじゃないか？ハハハッ…デコポンらしい…なっ…」

フシューッ…

カーニバルはどつやら、本当に死んだらしい…

## 出所

明るみにもでない。闇の中の闇の取引…

私がタツちゃんに会いに面会に行っただけで、タツちゃんは無罪放免、釈放された…

「あっ…うっうっ…デコポンありが…とう…助かった…うっうっ…  
夢かなあ？」

変わり果てたタツちゃんを直視できなかった私…

最近気づいたんだ…  
大切なものって最初からわかるものじゃないって…

でも、だからって最初っから大切なものって後からわかるなんて言  
ってても見つからないんだって思った…。

愛おしくも短い時間の中で…私だけが生き残ったのか…

「タツちゃんっ！今度S O Pのコンサート行こうよ？」

タツちゃんは顔がとろけたみたいに笑顔になった…

「デコポン…ありがとう…」

あんなに頼もしかったタツちゃんが何だか弱々しく見えた…

でも、やっぱり頼もしいのかもな…

「タツちゃん…これからどうしようかな？私なんて二年も死んでたんだ…宇宙人に生き返らせてもらったけどね」

タツちゃんはいきなり、私から離れうずくまって震え始めた…

「うっうっ…宇宙人は…いません…この世には…いません…」

私はたまらず、空を飛んだ…

「ほら、タツちゃん？宇宙人と仲良くなるべきだよ？」

それを見るなり、タツちゃんは顔を真っ赤にし、立ち上がった  
右手をピストルみたいにして、左手で右手を握り込み、私に向かって  
撃ち始めた…

「バアンツ！！バキューンツ！！バキューンツ…デコポン…宇宙人がいなければ、三発は要ったな？フハハツ…」

私はそのまま飛び去りたかったが、タツちゃんの前に降りた…

「そうさっ！！タツちゃん。私は復活したんだ！！」

タツちゃんはとろけたみたいに笑ってくれた…

黄昏時の話だ



## 型遅れの命

「タツちゃんは施設に入った…国の管轄だから安心と言えば安心だけど…ホルマリン漬けになったようなもんだ…」

何というか、「呟く」と言うよりは「嘆く」ような独り言がポツリとでた…

タツちゃんは国営のリハビリテーション学院なる施設に、国が是非にと言うらしく、まるで私から引き離されるように連れて行かれた…

私はすっかり、空を飛ぶことが日課になっている…

傲慢とか優越感とか、そんなではない…  
ただ、生き残った使命感がそうさせていた。

「空なんか飛べたって…もう俊哉君も驚いちゃくれないよな…」

定期的に宇宙人に拐かされるが、その度に

ソラヲトブナ!!

と怒られる…

何やかんやでタツちゃんは宇宙人からも認められているのかと…

悪魔になつて死んでいったカミカゼやカーニバルへのリスペクトと  
タツちゃんみたいに地に足を着けた地球人というか…

ジレンマは感じずには居れない…

そんな憂鬱な私の前に、何とやらなゲストが現れた…

「し、俊哉君…」

私の独裁というか排他的空域に…

あの俊哉君が現れた

「デコポンっ！この町はもうダメだ！！」

デコポンはニックネームだし、ホーミーだとは思っけど…

私は俊哉君にムッとしていた…

t o b e c o n t i n u e

いつそ俊哉君を叩き落としてやろうかと思うほど、私の無念は増大していた…

「デコポンっ！！宇宙人が町の人間すべてにデコポンにしたのと同じ質問してるんだ…今まで沈黙を保っていた宇宙人が何故なんだい？」

同じ質問って何だ？  
前置きにデコポンにしたのと同じ質問とでも言ったのか？

「…で？どんな質問なんだい？」

多分、空を飛んでいる俊哉君を見る限り  
あの三択だろうけど…

「馬鹿だな。デコポン。質問と言ったら質問だよ。デコポンになりたいか。カードになりたいか。カーニバルになりたいか。だよ。」

？

三択は三択だけど何か違うな…

「僕はデコポンになりたかったから、デコポンって言ったのさ…」

し、俊哉君…

私は俊哉君を誤解していたみたいだ…  
宇宙人も趣向を凝らしてるんだな…

「でも…カーニバルを選んだ町の人達が…腐って死んじゃったんだ…  
…いっぱい…カードになった人達は…目を…目を抉った…」

カーニバルを選んだら、宇宙人となり  
私は知らなかったが、カードを選んだら見たいものを見る力が手に入るのか…

それよりも…宇宙人はこの町をどうする気なんだ…

「そんな…俊也君。それじゃデコポン…私を選んだ人間はどうなったんだい？」

俊也君が親指を立て  
後ろを指した

「打倒宇宙人…それがデコポン派さ…」

士気を帯びているであろう…最早戦士と呼んでいいだろうか？  
打倒宇宙人を掲げる戦士達が空に浮かび上がってきた



## 命輕鴻毛

勢い立つデコポン派の戦士達に対し、空から光線が乱発した…

「うぎゃーっ！」

「あーっ！」

「きゃーっ！」

光線は戦士達に被弾し、蒸発させた。100人はいたであろうデコポン派の戦士達がすべて討ち滅ぼされた…

「ワレワレハウチュウジンダ。」

私達の滞空地点より、更に上空から宇宙人が言い放った…

「で、デコポン派が…空が飛べれば宇宙人に勝てると豪語していた  
デコポン派が…殲滅した…」

小学生だというのに、一丁前の軍師のように落胆する俊哉君…

私よりも高齡な士気を持っていたんだな…

「良いんだ…俊哉君…これで良いんだ…誰に憧れようと人智を逸することは許されないことなんだよ？素晴らしい教訓じゃないか？」

俊哉君はがっかりした顔で私を見た…

「それは宇宙人を油断させる為の演技ですか？デコポン…宇宙人が一人、二人油断したって、船内にはたくさん宇宙人がいたんだから…実力で勝つしかないんだよ…」

俊哉君…君って奴は…

「俊哉君…私からはもう云うことはないが…俊哉君もまだ若いんだから、命は大切にすべきだよ…少なからず…宇宙人から与えられた力で宇宙人に勝てるだろうか？」

俊哉君はムスツとした

「だって…友達に飛んで見せたら、宇宙人の奴隷のお出ましたとか…売星奴だとか…酷い言われ方されて…宇宙人が憎くなったんだもん…ううっ…」

泣き出した俊哉君を目の当たりした私…

俊哉君は私に憧れたせいで虐められたのか…

「ゆ、許せんっ！！俊哉君のお友達はなんて奴等なんだ！！」

俊哉君は泣きながら首を横に振っていたが…

私には何が何やらわからなかった…

## 墓穴

俊哉君は反対したが、私は意を決していた…

空を飛ぶことはとても素晴らしいことだ。それを蔑むなんて、正気の沙汰じゃない。

「俊哉君…大丈夫。お友達はきっとわかってくれる…」

私は俊哉君の通う学校に行き、俊哉君のクラスに入っていた…窓から

飛べると言うことが、いかに素晴らしいことをアピールしたかつ

たからだ。

「やあ、俊哉君のお友達っ？私はデコポンだよ？」

啞然とするお友達だったが…

気のせいかやけにでかい上に何というか…異国情緒漂うというか…

「俊哉の仲間か？俊哉は太刀川さんを裏切ったから仕方ない…私達は外国から来たから、生活年齢が俊哉と違って仕方ない…」

身の丈60寸を優に越える黒人の男が私の首根っこをヒョイツと掴み、持ち上げた…。

「わっ…ちよっ…ちよっ」と…」

私は窓から放り出された…

「私達も良い大人だから、俊哉のことは私達に任せればいい…ビバスーパーマン」



ガラガラッ

そのまま黒人は窓を閉めた…

俊哉君は特殊な学校に通っているんだな…  
もう少し話を聞いておけば良かった

私はまた、無心に空を飛び、心を開いた穴を塞いでいくのであった  
…

## フラゲ

最近、自負ではあるが鳥と話せるようになった…

ような気がする…

空を飛ぶことばかりがすべてではないが、私は空を飛ぶことしか脳がなくなってしまったようだ…

「よいことさ。デコポン。空は君を歓迎しているよ」

と隣を飛び去る鳶が話しかけたような気がした…

俊哉君が何故首を横に振っていたのかが、情けないタイミングで閃いた…

「傷口に塩を塗るようなもんだ…俊哉君には悪いことをしたな…有り難迷惑、ノーサンキューってやつか…」

俊哉君の安否を気にしながらも、どこか違う場所。新たな始まりを求めて私は空を漂っていた…

こんなときUFOに拐かされないかな…  
今ならわかる。タッチャンが日頃使いもしないような臭い言葉。  
l i f e   g o e s   o n ”なんて使っていたかを…  
”

私だってカードみたいに見たいものが見たいし  
カーニバルやカミカゼみたい宇宙科学を使いこなしたかった…

「ん？いや、待てよ。しかし、そうなってくると…カルテの奴は空  
も飛べないんじゃない…だいたいあの状態でどうやって断ったんだ？気  
になってきた…」

私はやつかみついでに、カルテの勤めるメンソーレラブに向かうこ  
とにした…

私の正義感や理想など語るまでもなく、  
越えられるはずの小さな壁を最大の理由にして、空を好き勝手飛び  
回っていたにすぎない…

「それでいい…いや、それじゃなくちゃ困るよ…」

何羽もの雀が私にそんな風に語りかけてきた

…ような気がした

「…カルテのやつ、タツちゃんみたいになりたいんだろっか？フフッ…」

私はどうなってしまったのか…まだまだ人生を楽しむ気のようにだ

輕蔑していた

私はほろ酔い気分でもあるかのように、ネオン街に降りたった…

カードの勤める会社「チーフ」に行く気力はないが、カルテのやつが勤める？キャバクラ「メンソーレラブ」に行く気力はあった…

「いらっしやいませーっ！！メンソーレラブの女の子達は粒ぞる男ですよーっ！！是非是非、メンソーレラブにお越し下さい。」

いたいた…カルテのやつやってるな？  
相変わらずのもじやもじや毛で…フフフッ

少し飛び回って見せるか？

「はあい？皆さん。メンソーレラブは最高のキャバクラだよーっ！  
」

私がネオン街を飛び回り、カルテのやつの真似をしてみた…

客引きって奴だ…  
カルテのやつキョトントしてるな…

「おっおいつ！ーデコポン！降りてこい！ーここは風俗街だぞ？宇宙人は軽蔑されるに決まってるだろ？まして、能力者じゃ…」



予想に反して…

ネオン街の人並みもカルテと同じことを物語っていた…

「そんなバカな！！タツちゃんがっ！！タツちゃんがっ！正しいわけないだろっ！！こんなの馬鹿げてるっ！！二度と手伝ってやらないからな？」

私は身を翻し、ネオン街を抜けようと高度を上げた…

ヒュンッと何やらものが飛んできた…

「デコポンっ！！そりゃ有り難いぜ？もう二度と来るなっ！！」

私の身を掠めたものは…カルテが飲み残した缶コーヒーの缶だった…

「あ、危ないだろ？！空き缶を…少し中身が入ってるからコーヒーが体についたじゃないか？後でベトベトになるだろ？」

ヒュンツとまた何か飛んできた…靴だ…

私の左太股に命中した…

「風俗なめんなっ！！デコポンの力なんか要らないんだよ！！はっ  
…」

振り返りもせず、私はネオン街から抜けた…  
一番高いビルより高く飛んだからだ…

「な、何が風俗なめんなっ！！だ…馬鹿げてる…」

そう…私は二度と来ないつもりでいる…メンソーレラブになど二度  
と…

## 絶対的死

カルテに冷たくされ、私は空をトボトボと漂うばかりだった…

「何なんだ？カルテのやつは…自分だって粒ぞろ男とか、はぜてたくせに…なんだなんだ…」

私の思考は陰鬱に堅く、暗く懐古的に、逆行催眠を喰らったように

人生の後悔ってやつばかりを強引に引き当てていた…

強い人間だと思われない…トラウマを凌駕した外観にとらわれない  
ソサイエティブなスーパーマンになりたい…

「はっ！！そうだ…そうだったんだ…」

私は自分が現世にて、スーパーマンと呼ばれていることに気づいた…

一度死んだというのに…

「つまりだ…カーニバルもカミカゼも蘇るんじゃないのか？私だって蘇ったんだからな…そうだろ？宇宙人。」

私は空から空を見上げ、宇宙人に尋ねたが…

返事はなかった…

「何なんだ…宇宙人は？カーニバルやカミカゼは宇宙人の驚異となるから封じられたわけか？なんて臆病な…うつ…」

意識が半分乗っ取られたような…

意識が乗っ取られたことを認識する意識が半分あるって意味だが…  
朦朧とする中、脳髓に刻まれるような声があった

「オマエニオクビョウアツカイサレテハコマル…ナノデ、セツメイ

シテヤロウ。ニクノカタマリトカシタオマエノナカマデモアツタフ  
タリノハンウチュウジンハ、ウチュウジントシテシンダノダ。ウチ  
ユウカガクヲモツテシテモ、ヨミガエリハシナイ。ワカッタナ？  
オマエノシコウハスベテカンシカニアル。ソレヲワスレルナ。」

突き放されたように半分の意識が戻ってきた…  
私はスーパーマンではなくパーマンだったのだろうか？

頼りない力瘤を作ってみたが…怪力ではない私はパーマンですらな  
いか…

底力

b o o m

b o o m

誰かからメールが来た…  
それは、カードからだった…

『僕が見たいものを見通す力があることは、知ってるよね？ 済まないとは思ってたんだけど、デコポンの未来が見えたんだ…デコポンは力に目覚めるよ…宇宙人は空を飛ぶ力を与えた際デコポンのミトコンドリア細胞にデコポンの意識を繋げている…つまり、デコポンは火の戦士さ…』



ひ、火の戦士さ…って言われても…

『唐突すぎるよ？火の戦士ってなんだよ？』

私は俊哉君の顔が一瞬浮かんで消えたことに気づいた…

火の戦士なら、俊哉君も喜んでくれるかな？

『ミトコンドリア細胞の過剰加熱と空気中の酸素を利用して発火現

象を起こすのさ…因みに空が飛べるのは重力を感知する働きがある  
ミトコンドリア細胞が宇宙人の科学力によって騙されているからな  
んだ…デコポンのミトコンドリア細胞は無重力だと信じ込んでいる  
ことになるね…」

ミトコンドリア細胞に重力を感知する働きがある…のか？

宇宙人がどこから騙しているかは知らないが…  
カードに見たいものを見通す力があることに疑いはないようだ…

『おっおいっ！（。 。 ）体を騙して飛んでるってわけか？ヤバ  
いな…火の戦士なんて尚更だよ…』

私の中でも、既に普通の人間の生き方とはほど遠いものになっている…  
どんな現実から逃れられたとしても…その変貌からは逃れられない  
…そんな気がする

『デコポン…僕も特殊な能力を持っているからわかるよ…99%デ  
コポンは火の戦士の力に目覚めるだろうけど…たった1%だけ逃れ  
る術があるんだ…』

あるのか？

火の戦士から逃れる術ってやつが…

『それは？1%だよな？できるものなのか？』

私は必死そのものだった…

『底力に達しないことさ…それしかないよ。』

底力…か  
わかるような…わからないような…

私はすでに、火の戦士に一步また一步と近づいているような気がして、身震いがしていた…

決して真似しない為

俊哉君…私はすでに次の段階に入ってしまったよ…

そんな気持ちで俊哉君に会いに俊哉君の小学校へ向かった…

校門前まで来た私だが、門は閉められていた…

飛び越えたかったが…私はよじ登り、校内へ入ろうとした…

しかし、こう言ったとき空を飛べると言う人間を超越した能力がワ  
ンテンポ判断を鈍らすことに、まず気付くべきだった…

空を飛んで封鎖された門を飛び越えることはできるが、よじ登った？

違っだろ…

「おいっ！おまえ何してるんだ？怪しい奴め！！」

がたいの良い竹刀を持った…恐らく体育教師だろうか？

私を発見するなり、噛みついてきた…

「し、俊哉君に会いに来ました…ヒーローって言うか…相談役って言うか…」

よじ登り途中の情けないポーズはあまりに説得力に欠けていたが…

問題はそこではなかった…

「俊哉か？鳥になった俊哉か？あいつはもうすぐ別の場所に引越すから、余計なことはせんでくれ。」

な、なんだと？

空が飛べるから…空が飛べるからなのか？

リストラと変わらないじゃないか……  
厄介払い？臭いものに蓋？

俊哉君に支持者はいないのか？

私は悲しみの中に確かな怒りを覚えた

「許せん！！腐った教師が！！学校経営の為に、年端もない外国人ばかり抱え込みやがって！！俊哉君こそ大切にすべき生徒だろ？！」

よじ登り、掴んでいた門が溶けた……



しまった…まさか

「ひっ…ば、化け物。エックスメンは日本の話だったのか！」

私は場が悪くなり、飛び去ろうとした…

「これでも喰らえ!!」

教師が投げた竹刀が私の寸前で燃え尽きた…

啞然とする教師を後目に私は飛び去った…

火、水、土、風、雷

火の戦士の力に目覚めた私は、次の段階などと俯瞰する余裕もなくなっていた…

「火の戦士か…やってしまったな…」

私は後悔の念は拭い去れず、ポケットと空を飛んでいた…

b o o m

b o o m

カードからメールだ…  
気付いたみたいだな。私が力に目覚めたことに…。

『デコポン…力に目覚めたみたいだね？』

やはりか…  
カードの千里眼は誤魔化せなかったみたいだ…

『そうなんだ…ついつい怒りを抑えきれなくて』

私だって底力には頼りたくなかった…  
だが、仕方ない、自分の運命だと受け止めるしかない…

『そっか…デコポン…火の戦士になったデコポンに伝えたいことがあるんだ。宇宙人が飛行能力を与えた人間のうち、デコポンを除いて、後四人戦士がいるんだ…それは、水の戦士、土の戦士、風の戦士、雷の戦士なんだ。デコポン…相性によっては争いは避けられないよ？存在し合うだけで互いを否定する係属にあるから…』

な、なんだなんだ？

宇宙人が飛行能力を与えた人間は私以外、消滅したはず…

『そんな。カードよ？私は誰と相性が悪いんだ？』

覚えてたの力で使いこなせるかもわからない火の力を一体どうすれば…

『デコポンの為に言うと、水の戦士、土の戦士、風の戦士、雷の戦士の順に相性が良いんだ…逆に言うと戦闘においてデコポンにとつて苦手な順番と言ってもいいね…一概には言えないけど…』

つまり、仲良くしないとヤバい奴順ってわけか…

やりにくいな…空を呑気に飛んでたからだろう…ツケが回ってきたか…

『なるほど…水の戦士が一番私の能力を抑えてくるんだな…しかし、カード…私に苦手意識はないんだよ…』

b o o m

b o o m

おそらく、カードからの返信だろうが、私はそれを無視した…  
そう、すでに私は水の戦士に対しライバル心を燃やしていたからだ…



## 意外な水の戦士

はて…水の戦士って誰なんだ？  
だいたい、争う意味はあるのか？

私は我に返り

カードからの返信を読むことにした。

『バカはよせ！水の戦士はデコポンより後に生まれた模倣戦士だから…しかも…タッチちゃんなんだ…自分ではネクトンBと名乗り始めたけど…すでに水の力を使いこなしてるよ…』

たっ…タッチちゃんが水の戦士？

訳が分からない…

ネクトンBってなんだ…ネクトンAは誰なんだ？

私は震える指でカードに返信を打っていた

『タツちゃんが？み、水の戦士なのか？他に私の知り合いが戦士になってやしないか？教えてくれ』

送信した…

『タツちゃん以外は知らない奴らさ…しかし、宇宙人には関連性が

見えているらしい…いずれ僕にも見えるようになるだろうね…』

そうか…タツちゃん以外はまだ見ぬ…なんとやらか…

『わかったよ。とにかくタツちゃんに会いたいな。居所知らないか？』

と送信した直後、何km先だろうか？  
突如水柱が上がった

温泉でも掘り当てたか？

…いや、これは運命だよな

「タツちゃんだっ！」

私は水柱の上がる方へ  
猛スピードで飛んでいった…

b o o m

b  
o  
o  
m

カードから返信が来たみたいだが…

## 発汗作用の疑い

水柱に近づくにつれて、空気が乾燥していることに気付いた…

なるほど…そもそもミトコンドリア細胞の働きによる現象だから…  
大凡、大気中の水分を集めたってことかな？

しかし、凄い集中力だ…

水柱が徐々に勢いをなくし、姿を消していく…

そこから、人影が現れた…

「タツちゃんか…やっぱり」

タツちゃんの姿を見つけるなり、ホッとする私だったが…

「あれは誰だ？」

真っ黒に日焼けした身の丈50寸ほどの老人がタツちゃんに手を翳した…

「うぎゃーっ…！」

タツちゃんは頭を抑え倒れ込んだ…

「タツちゃん！水の戦士が土の戦士に適うわけないやい？汗くさい技使いやがって、土の戦士は能力の無効化、還元化だってアレほど言っただじゃないか？」

バタリっと倒れたまま動かなくなったタツちゃん…

奇しくも銭湯屋の前での戦い…



私は恐る恐る

タツちゃんと土の戦士の対立する場へ降りていった…

「タツちゃん！大丈夫か？」

タツちゃんはピクリともしない…

「おや？汗くさ戦士の仲間か？さしずめ風ってとこだろっな…タツちゃんは今、ミトコンドリア細胞の使いすぎでダウンしてるがいくら回復するだろう…超回復を繰り返すことにより能力を高めているんだよ…汗くさいねえ…」

ち、超回復！

タツちゃんめっ…自分ばかり格好付けやがって。

私もなんだか死ぬ気でやる気が出てきた

「フッフツ…土の戦士だったかな？私は風の戦士ではないっ！！火の戦士だぁーっ！！」

両の手を前に突きだし、気合いを込めた…。  
徐々に熱を帯び始める両の手…

「…はて？攻撃はまだかな？」

土の戦士は完全に私を嘗めていた…

来る…これは火が出るぞ…！！

「喰らえーっ！！」

思ったより巨大な炎が両の手から飛び出した…

「うぎゃーっ…！」

土の戦士は炎を全身に浴び倒れた…

「キヤーツ！人が燃えてるう…！」

今までどこにいたのやら…通行人が野次馬と化し始めた…

炎を喰らった土の戦士の皮膚は爛れ赤黒く変色していた…

「そんな…無効化する力があるんじゃないのか？」

私は怖くなりその場から飛び去った

## 雷の傷

飛び出した…

自分の犯した罪から只、只逃れたいが為に…飛び出した…

「仕方ないだろ？水の戦士の次に私と相性が良いわけだから…なあ？」

しかし、鳥も飛んでいない…焼き鳥にでもされると思ったか？

「はあ……」

昼下がりの真ん前から来るような…そんな錯覚をした日差しが、少しだけ味方をしてはくれたが…

ため息は深く積み重なる雲のように心を戒めていた…

「よう…浮かない顔して浮いてんね？人には言えない傷跡は…人に押しつけちゃえばいいさ…人は…人とは電撃で繋がってるのさ…俺は雷の戦士タツ…よろしくな？お前だろ？土の戦士を焼いたの？」

60寸はないが、その分タフな体つきで短パン一丁で私の前に立ちはだかった金髪のもヒカン頭の…雷の戦士タツ…

館海より白い…

「お前が言つとおりなら…焼いたのはお前だな…タツ…雷の傷を持つ戦士よ…」

タツは一本とられた。と言わんばかりの表情を浮かべ立ち尽くした…

私はその脇をすりりと飛び抜けた…  
昼下がりの陽が射し込む方へと



## 風の戦士には気をつける

「お、おいっ！！待て待て…土の戦士のことは良いよ…ひとつだけ忠告させといてくれ。風の戦士だけには気をつける？今までいろんな奴に会ってきたが、あそこまで羨望の眼差しで見てきた奴はいない…気をつける？」

タツがわざわざ私を呼び止め、伝えてくれたこと…。

にわかにはわからないことだ…

「変な忠告をするな！！短パンマンが！！」

また啞然とするタツ…  
私は猛スピードで飛び去った…

余計な考えはないにこしたことはない。  
風の戦士だって同じ戦士じゃないか？

羨望の眼差しにせよ。タツが筋肉質で色白だからだろ…

そうだった…カードからのメールを見よう

『タツちゃんは今、銭湯の前で戦闘中さ。土の戦士こと大宇宙タナ  
ーは水の戦士にとっては、天敵だつてのに…タツちゃんも好き者だ  
よね…』

タツちゃんにとっては、土の戦士は弱点になるのか…だよな。タツ  
ちゃん苦しんでたよな

土の戦士はタナーって言うんだな…

『カード…私はそのタナーを燃やしてしまったんだ…ことの成り行  
き上致し方ないことだったが…して、カード？風の戦士について少  
し知りたいんだけど。良いかな？』

メールを送信した…

ビリビリっと体に電流が走った…

「何が短パンマンだっ？何が！！びっくりして、一瞬思考停止したんだぞ？精神健康上全く持って良くない事態だ」

タツが私を追ってきた…

どうやら争いは避けられそうにない…

「やってくれたな？タツ…力を持つ者がその力を力を持つ者に使ったとき…それは戦いの合図を意味する」

タツもまたミトコンドリア細胞の特殊な働きによって、電気を生み出す雷人間だろうが…

タナーでわかったんだ…

体は生身だとね

「おっおい…敵意はないんだよ？軽い冗談じゃないか？」

私は静かに首を横に振った…

そして左手を翳し、炎を放った

「…っ…っ…っ」

タツは赤黒く爛れ、真っ逆さまに墜ちていった…

私は自分が冷血な人間になっていることに気づいていた…

「タツよ？お前の理論が正しければ…傷を負ったのは私だな…」

私はその場から飛び去った…

Y o u r w i n d t h e r e i s .

私はひたすらに、飛び続けた…

こんな自分になりたかったのか？

火の力だつて本当は欲しくなかったのに…  
こんな自分なんて…

ヒューッヒューッ

ヒューッヒューッ



「突風だ…君？怪我はないか？」

怪我はないが…空中で話せる人間は他に考えられない…

真っ黒なタキシードにシルクハット、鼻筋から生えてきたようなまん丸のサングラス…

身の丈は55寸と言ったところだろうか？

風の戦士か…

私は反射的に右手に力を込めていた…

「突然の突風だったが…心配ないよ…。怪我はない…風の戦士だな？」

風の戦士らしき男は首を横に振った  
じゃあ、何だっって言っただ？

「違うよ…君が火の戦士さ…僕が風の戦士である前に風が吹いたのさ…鎌鼬だって…多分だけど吹くかもね…」

薄気味悪い奴だ…

明らかに風の戦士じゃないか？

面倒くさい…試してやるよ

「鎌鼬？結構じゃないか？巧い具合に吹くと良いなっ！！喰らえっ！！」

私は力を込めていた右手から炎を放った

「うひゃーっ！！」

風の戦士らしき男は火達磨になりながら、墜ちていった…

「お前は誰なんだ!!」

墜ちていく風の戦士らしき男に質問を投げかけた。

「ぼ、僕はターキー…か、風の戦士…さ」

ターキーか…

防衛本能の引き起こした過ちだろうが、今はまだ罪の意識に苛まれない…

私の自尊心は慣れない場所へ迷い込んでいった…

## ターキーは上司

カードの返信でも読んで、気持ちを落ち着かせよう…

確か風の戦士について聞いてたんだっとな…

『実は風の戦士ことターキー氏は僕の会社チーフの上司で、なんて言うかなあ…人間のできた人って言うか。頼りになる人でさ…実は、僕に宇宙人を紹介してくれたのがターキー氏なんだよなあ…デコポンにもいずれ、逢わせたいなあ…良い人だよ…仲間想いのさ』

ボタンッと携帯を閉めた…

私は勢いに任せるあまり、カードの上司に当たるターキーまで燃やしてしまったのか…

「ウワァーッ！」

私は雄叫びを上げた…

不甲斐なさすぎて、我を疑い始めたのだ…。

なんで…なんで私のような者が生きているんだ…！

最良の人格者を蔑ろにしたようなものだ…  
自分の未来を自分の手で潰したようなものだ…

「デコポン…まだまだ…まだ俺を倒してないだろ？」

聞き慣れた声のする方を向くと…タツちゃんがいた…

「全戦士を倒して初めて光の戦士となるんだ…だが、いくらデコポンとは言え容赦しないぜ？」

タツちゃんはぐっしり濡れたＴシャツを脱ぎ捨て、ぐっしり濡



れたGパンをパンパンと叩いて見せた…

光の戦士って何だ？

私は訳も分からず、考えるよりも先に炎を放っていた…

「フハハハッデコポン！！私は水の戦士ネクトンBだっ！！そんなチンケなチョロ火。かき消してくれる…うぎゃーっ！！」

タツちゃんはどうか……勘違いしていたんだ。

水を自在に生み出し操れる能力ではあっても  
肉体そのものは生身だ……ことに気づけなかったんだ……

「さ、さすがだ……デコポン……光の戦士よ……最後に一つだけ教えとい  
てやる……くっ……風の戦士を倒しただろ？アレはカードの上司で最高  
の人だ……」

赤黒く爛れたタツちゃんの皮膚は見るに耐えず

私は余所を向いてしまった…

「目を逸らすな?! デコポン! ! d o n ' t m i s s i t だろ  
? : フハハハッ」

タツちゃんは真つ逆さまに墜ちていった…

私はまだ意味も分からぬまま…涙が流れていることに気づくばかり  
だった…

what's color fart

涙する私を揺すり起こすように、宇宙人の声が頭蓋骨を内側から叩くように響いた…

「オメデトウ…デコポン。キミハコレデヒカリノセンシダ。ワレワレノナカマトナツタ。スベテノウチュウノチカラライノママニアヤツルコトガデキルヨウニナツタワケダガ、ワレワレニハサカラワナイホウガイイ…ホウソクニモトツイタチカラデアルコトヲワスレルナ？アト、アクマニハナルナヨ？ワレワレモオマエモソレハオナジダ…カイテンスルベツドイチダイニワレワレのナカマヒトリブンノイノチガツカワレテイルノダ…」

宇宙人の長たらしい話が、その一言一言が頭に蓄積されて行くのがわかった…

「わ、私が宇宙人と同等の力を手に入れただど？ やった！ それなら、  
やった！ 早速タツちゃんの怪我を治して… いや、戦士達すべての怪  
我を治したいっ」

頭の中にいる宇宙人が微笑んでくれたような…

そんな気がした…

が、私はまずタッチちゃんの怪我を治すため、地面に降りたつた。

タッチちゃんは俯せに倒れ込み、グッタリしていた…

しかし、治すと言ってもどうやって治したら…

と疑問符を浮かべたのも束の間…瞬時に閃いた。

私はタッチちゃんを呼び起こすようにタッチちゃんの体に触れた…

タツちゃん…タツちゃん…タツ…

「おいっキミ？何してるんだ？」

や、やばい警官だ…

どうなんだ？警官に宇宙科学なんて言って通用するのか？

「いや…喧嘩ッス。単なる…大丈夫ッス。こいつタフだからすぐ治ります故」

そんなこんな出鱈目を言っているうちにタツちゃんの傷は癒えた…

「うっうっ…お、俺は死んだか？デコポン…デコポンが治してくれたのか？光の戦士ってやつか…あの拳銃…二年前のやつのお返しだな…これでチャラだよな？」

私はそれに快く頷く…

奇跡を目の当たりにした私とタツちゃんだったが…警官にはまったくの無関係だった…



「怪しい奴らだ…署まで来てもらおうか？」

私はそのときパツと光を放った

「タツちゃん今のうちに飛んで逃げよう…」

私はタツちゃんの返事を聞くまでもなく、飛び立ったが…

それが…それが…タッチちゃんの最後のやり取りだった…

心から諫めて

「逃げろっ！！デコポン逃げろっ！！お前がこの町を守れっ！！」

私が言うのもおかしい話だが、あの時のタツちゃんは冷静さを欠いていた…

「だ、ダメだ！！タツちゃん…」

光から覚めた私はタツちゃんが警官にしがみつき、動きを抑えているのが見えた…

「や、やめろ！公務執行妨害で逮捕するぞ？」

い、いけない…

どうしたらいいんだ…

タッチちゃんは…タッチちゃんは…

何なんだ！！

「そ、そんなにこの力が欲しいならタッチちゃんにやるよ！！光の戦士なんていないさ！！」

私はタツちゃんに向かってありつただけの想いを込めた…  
体から、絶対的な自信は消え…寒気がした…  
自分は死んでしまう…そのくらいの恐怖が私を襲っていた…

「うおーおっ…おーおっ…あーっ…」

タツちゃん…イヤだ…

私はタツちゃんを知らなすぎたのか？

宇宙人の言ったとおり  
これは宇宙において絶対の法則なのか？

タツちゃんが…タツちゃんが…悪魔になった…

「ひっ…ば、化け物…わ、私は悪い夢を見ているのか？」

警官がタツちゃんを振り払おうとしていた…  
いっそう強く…頑なに…

「タツちゃん…んっ…！」

フシューッ…

タツちゃんは…タツちゃんは…死んだ

私の光の戦士と言う称号と共に…

Mr・escape? you aint simple・

私は空をぶかぶか浮かんだままだったが、悲しみに暮れている場合ではない…警官はまだそこにいるのだから、タツちゃんが身を挺してまで作ってくれた絶好のチャンスだよな…逃げるなら今しかない…

…でも、まあしかし…肝心の警官は肉の塊になったタツちゃんを見て吐いていた…

「デコポン。オマエハヒカリノセンシノチカラヲタチカワニアズケタキデイルヨウダガ、マダオマエノモノダ…ウチュウジンニハノウリヨクヲアタエルチカラモソナワツテイルカラナ。キヲツケロ。キヨクンニシロ。」

また…宇宙人が話しかけてきた…



な、何が教訓だ…タツちゃんの偉大さを知らないからそんなことが  
言えるんだ…

タツちゃん亡き今、誰がこの町を守るって言うんだ…

「うおーっ！あ、悪魔になってやる…！」

私は有らん限りの邪気を集め、悪魔になろうとした…

⋮

⋮

「オマエガアクマニナルノハタイヘンムズカシイ…アキラメロ…」

警官の嗚咽がこだまする中…私はなんて純真な心を持ち合わせたのか？などと、思いたくもない自己顕示を余儀なくされた…

デコポンなんて愛らしい呼び名もイヤだ…

これほどの邪気でさえ…いや、この程度の邪気しかでない…自分がイヤだ…

私は見たいものを見る力を使い。  
タツちゃん以外の戦士の居所を特定し、傷を癒した…

「私は揺るぎない…そうだ。決して揺るがぬ天使となったのか…タツちゃん…この町は良くなるよ…」

無理をしていたのは、自分でもわかってるつもりだ…だけど、悪くなるわけじゃない…タツちゃんだってそれを知ってるから…

私は現金な奴だ…。それで良い。

まだまだ警官はゲーゲー吐いているようだが…  
私は無情にもタツちゃんを置いて飛び去った

## 自己判断に対する宇宙の法則

「ダメダ。デコポン…タチカワニチカラヲアタエタコトハダメナコ  
ウイダ…」

定期的に私が感傷に浸ろうとすると

宇宙人が話しかけてくるようになった…

教訓つてやつだ…

そして…

「デコポン…思い切ってこのベッドで一晩過ぐせよ…」

私の家の回転するベッドには、悪魔となり死んだタツちゃんの命が  
注ぎ込まれた…

その前に、元から私の回転するベッドに居た宇宙人の魂は…俊也君  
のところへ行ったとか…

行かなかったとか  
タツちゃんは毎日毎日私に話してくる…

なんたる憎々しい待遇やら…逆に笑けてくるやら…タッチちゃんの魂は生き続けていた…

クルクル回転するベッドがまるで映写機みたいに、ベッド上に映し出される立体的なタッチちゃんの虚像はなんだか…切なくて慣れるのには些か時間が要りそうだ…

「タッチちゃん…毎日毎日タッチちゃんは…無茶ばかり言つて。どうせなら、カミカゼとかカーニバルの魂と話したかったよ…」

などと愚痴をこぼしたり…

まだまだ前途多難のようだ…

「チガウゾ？デコポン。コレハキョウクンヲワスレナイタメノワレ  
ワレカラノハカライダ。タチカワハシンドダ…」

宇宙人がタツちゃんより先に諫めてくる…

ああ…私は心底ナーバスだった…

宇宙人となり、宇宙科学の力を持ち合わせても  
使い道なんて本当にない…

それを無理強いして使おうものなら…



「デコポン。カミカゼやカーニバルのこと忘れないでくれよ？お前は力を正しく使えばいいだ。」

私には不可能だと思っていた、悪魔化の手段が色濃く見えてくる…

勘違いしていたのか…  
私もタツちゃんもカミカゼやカーニバルも

変わらぬ野心を胸の内に隠し持っていたんだな…

「チガウゾ？デコボン。オマエガアクマニナルカクリツハウチュウ  
ノチリヨリヒクイ。キョウクンニシロ。キョウクンニシロ。キョウ  
クンニシロ。」

リピートにリピートを重ね…宇宙人は私に宇宙の法則なるものを授  
け賜れた…か？

それなら、タツちゃんなんて忘れたいよ…

それでも

宇宙人の洗脳は私の脳内に刻まれつつある…

うしたら

タブーに興味がある…

何をいきなりと思うだろうが…

毎日宇宙人に頭ごなしに正されていると…気が滅入る

考え方が悪いのか？

悪夢のような無限のループに陥るようなタブーがあるはずなんだ…

だからこそ、タブーを避けたい

タブーに興味があるのはそのためだ

いや、待てよ？

興味がある程度ではダメだ…

違うか…興味程度に在るからこそ丁度良いのか？

ダメだ…タブーらしきタブーも見当たらないのに…タブーを發した  
ような無限のループへ入り込んでいる…

タブーを考えていただけなのに…

「ダメレッツ！！オマエガムゲンノループニハイリコンダトイウコト  
ハ…ワレワレモハイリコンダトイウコトダ…シカシ、ソレハエネル  
ギーノネンシュツガタダシクオコナワレテイルトイウコトダガ…」

じゃあ、ダメレツ！！ではないだろ？

しかし…私が無限のループに入り込んだからエネルギーが正しく捻出されていると認知されるだけであって、

エネルギーは正しく捻出されている…よな？

私は人の死に痛みを感じなくなっている…  
タツちゃんともベッド越しに話しているし

カーニバルもカミカゼもどこかでエネルギーを生み出しているなんて…

無限のループに入り込み、淀んだ無限地獄に突き落とされるより…

「ナンデモイイガ、イミモナクソラヲブナ!!」

そう…私は空を飛びっぱなしだ…

無意識のうちに私はそれでも、空を飛ぶことに罪悪感を持っていた

宇宙人もそれに気づいているんだろうな…

ピカッ!!

ゴロゴロゴロゴロ...

青天の霹靂とでも言っべきか...  
これは...タツの仕業だな...

私は何かを忘れている...  
しかし、私はタツに会いに行くのだった

## 誰が争い

私はタツの元へ急いだが…もう一人浮上してきた…タナーだ…

「タツ…わかってないんだろうかい？俺っちはおまえ等の攻撃は無効化するけど、傷までは癒せないぞい？」

体中に電気を帯びるタツは、タナーの意見には納得いかないようだ…

「話の判らない人だな…私の傷を癒したのはターキーではない…あなただっ！！」



タツのその台詞を聞くなり、タナーはグッと手を突きだし、どす黒い土塊を生み出した…

「ターキーが傷を癒したに決まっとるやい！！この土巨人で少し懲らしめるしかないな？」

土塊が見る見るうちに巨大な人型を成していく…

ゴーレムってやつか？

「なるほど…偶像対決がお望みか？ならば、出よ雷鳥！！」

タツが電撃を巧みに操り、巨大な鳥を作り出した…雷鳥か…

「止めたまえ！！私こそそなた達に癒されし戦士だ！炎に蝕まれ、息絶え絶えに死を待つばかりだった私を癒したのはそなた達ではないか？！その偶像対決。私も肖るう…出よ！！風魔神！！」

ターキーまで現れた…

ターキーは風で魔神を作り出したようだが…肉眼では見えない…

「黙れ黙れ黙れ！！俺っちは怒ったぞ！ターキーよ？癒すだけ癒して、知らんぷりとは、格好付けてるおつもりかい？やれっ土巨人よっ！」

土巨人が風魔神を殴った…  
突風が吹き荒れる…

「や、やりましたね？風魔神の鎌鼬で切り刻んでやる！！」

細切れにされたタナーのゴーレムが崩れ去った…

「やっぱり…やっぱりお前が俺っちを癒したのか…」

すると、タツが生み出していた雷鳥が姿を消した…

「そのようだな…ターキー素直になれとは言わないが…見苦しいほどだ。ニヒルにも程がある。気高い人格者とばかり思っていたのに…」

すると、ターキーもどうやら風魔神を収めたようだ…

「良いでしょう…私が被りましょう…あなた達のどちらかが私を癒したのは一目瞭然ですが…仕方がありませんね…」

3人は一瞬私の方を見た…

「光の戦士が生まれた以上…あれも生まれる。」

タツがそう言い放った頃合いに3人は各自が方へ散っていった…

## 助言の意図

タツの助言が示唆すること…私はそのことばかりで、頭がいっぱいだった…。

あれって何だ…

タツちゃんが生んで、水の戦士が不在だから水の戦士が新たに生まれるのか？

それとも、私が火の戦士から光の戦士となったから、新たに火の戦士が生まれるのか…

飛行能力のある人間に限るはずだ…

はっ！

まさか…見たいものを見る力…つまり、スティールアイの持ち主が何か能力に覚醒したとしたら…

違うか…

スティールアイには霊的な干渉が作用されていて、実像を映し出すものが眼のレンズと共鳴し、情報を得る仕組みになっているわけであり…

そこから、超能力に発展するわけがない…

「イヤ、ソレガセイカイダ…ステイルアイヲシヨジスルモノガア  
ヤツルチカラ…テレパス、サイコキネシス、テレポート…ナドリガ  
クテキカンシヨウラムシタノウリヨクラミニツケルダロウ…」

また…宇宙人か…

勝手にダイレクト送信しやがって…  
私だって光の戦士となった以上…  
超能力という分野が開けた以上

宇宙人の干渉を許すわけにはいかない！



「うおーっ!!」

ドガンッ!!

遠方で何かが爆発した…おそらくUFOだろう…

私にもわかるようになってきたんだ

## 宇宙人の正体

勢い余り、UFOをサイコネシスのようなもので爆破した私は…  
頭でも吹き飛ばされやしないか？

強制的に肉塊にされやしないか？などと

高を括っていた…

ステイルルアイの力で、他の宇宙人、つまりUFOを確認することはできるのだが…

「コロスナラコロセ…ワタシハコトシデヨンヒヤクナナジユウハツ  
サイニナル、モトチキュウジンダ…コノセンレンサレタカラダヲテ  
ニイレルマデニヒヤクネンハカカル…ヒヤクネンハヒカリノセンシ  
トシテイキナケレバナライ…アクマニナツタモノヲアマタニミテ  
キタガ…ハナシテモキリガナイホドダ。コロスナラコロセバイイ…」

…言葉に詰まり、本来なら出るはずの出るはずであろう想いが胸の内で弾け、体中に不快感を知らせる…

宇宙人は寿命にさえ勝てる…500年近く生きていても、まだ自分の年齢を把握している…

地球人と宇宙人の境界線は100年もあるのか…

途方もない幸福が訪れ、そこに殺意があることさえ、宇宙人には凡庸に思えているのだろう…

「キラツケロ…ワタシハチキュウジンカラウチュウジンニナツタガ  
…サイシヨカラウチュウジンダツタウチュウジンガ…サイキンチキ  
ユウジンニナツタ…ツウシヨウ、ツチノユウシャダ…」

土の勇者…

土の勇者…て…火の勇者とか居そうだが…

「カンチガイスルナ？ユウシャトヨバレルモノハ、ツチノユウシャ  
シカイナイ…ホラ、デコボン？コロスナラコロセ…コロスナラコロ  
セ…」

膝がガクガク震えていた…土の勇者とは？

いまいちインパクトには欠ける出逢いだが、決して油断ならぬ存在  
生粋の宇宙人にして、地球人になった土の勇者…

すべての戦士達の根元…

宇宙科学の立案者…いや、創始者か…それに当たる生命体

地球に引っ張られたとも言っのか？

「やあ！デコポン。私が土の勇者タベルだ！！1000年の時を経て、やっと…やっと血肉となれた。宇宙岩石から生まれたタベルだ！！よろしくな？セックス最高！！」

土の勇者タベルは私と同じ身長でありながら恰幅がよく…何より全裸だった…快活な笑顔が眩しく…頬のてかりが印象的だった…

## 七つの価値を歩き来する勇者

私が剰りの出来事にたじろいているのを、察してか否か  
勇者タベルが更に話した

「デコポン君のおかげでやっとコンプできたよ？ 昆布じゃなくてコンプ。コンプリートの意だよ？ 意って意味の意であって、胃袋の胃ではないよ？ って胃袋を意味するって意味じゃないし、胃袋を意図するようない言っではないよ…わかるだろ？ 僕は嬉しいんだ…地球人になれてさ。フツッまだまだ言い足りないけど…本題に移っても良いかな？」

私はされるがまま頷くような…木霊というか…なんというか…呆気にとられていた…

「あつ、そうかい？じゃ話すけど、僕ら宇宙人？まあ、今のところは地球人だけど元は…元来は宇宙人だつて意味でね？僕ら宇宙人？が提唱…いや、君には腹を割って話そう…僕らにとつてはそれが常軌であり、抗うべきではない価値なんだ…たとい、どんな気分になつてもそれから逸脱することはないんだ…」

私はただ頷くばかりだった…

この空気に文句があるとすれば、照りつける真夏日つてところだろうか？

館海なら真っ赤になるほどだ…

「ゴホンッ…それでは、本題を今から話すからね？本題つて言うのはさっきも言っただけ、決して逸脱することはない絶対的な常軌だから…。何度言つても足りないくらいだ…僕らのように岩から進化



したわけじゃないだろ？君達はさ…。それが強みなのはわかるんだけど、デコポン…君の場合は既に光の戦士なんだから、今から話すであろう本題は君が腐った肉畜生にならないための最善…いや、最低限の手段だからね？そういう僕なんかはわざわざ地球人となったわけだから、かなりのギリギリな宇宙旅行を体験してるわけだけど…良いかな？」

前言を些か訂正したい…一目置いて、今文句を言われているのは他ならぬ私だ…

勇者と言うよりは皇子か？

肝試し…に似たものだろうか…カジュアルに縮小された皇子の軌道…そして、現在…私は少し笑ってしまった…

「なっ…デコポン！！笑い事じゃないんだぞ！？とても、とても大事な話を今からするんだぞ？君が光の戦士になった以上血肉の騎士

がウイルス化するんだ…それに憑かれた人間は血肉の騎士となり、  
我らが宇宙人を駆逐せんと動き出すんだ…きっと君の仲間であった  
カーニバルやカミカゼ…そして、タツちゃんまでも…血肉の騎士と  
いう八番目の価値により…敵となり蘇るんだ…」

えっ？タツちゃんが蘇るのか？

カーニバルも？カミカゼも？

私は嬉しくなった…

「八番目の価値ってなんだい？」

勇者タベルは我に返ったように私の質問に答えた。

「そうなんだよ。世の中には、宇宙人、地球人、火の戦士、水の戦士、土の戦士、風の戦士、雷の戦士と七つの価値があるんだ。デコポン…君が八番目の価値に達したおかげで私は土の勇者となったわけだけど、その代わりに血肉の騎士という異常再生を可能とする我らが敵視する…本当は管理したいんだけど…ウイルスが生まれたんだ…」

こゝこれは本題ではないか？  
私は八番目の価値であつたのか…  
それより…血肉の騎士はウイルスなのか…  
どんな注意をしたらいいのか…

「おっと、マザーシップから呼び出した…デコボンまた会う日まで…血肉の騎士の感染者には気をつけて、君が感染する心配はないからね？」

そう言うなり、勇者タベルは目前で姿を消した…  
ワープだろうな…

何が本題だったのだろうか？  
私は、とりあえず頭を整理するためにも良しとすることにした…

## ミルキー騎士道

血肉の騎士とはウィルスのことであり、決して…私達のような人間を指すものではないのだが…

具体的に血肉の騎士とは何なのだろうか？

私は家路につき、事態の深刻さに気づいた…

ベッドが止まっている…終いにはオーラを放っていたであろうベッドが止まっている…

「もう…始まっているのか？」

タツちゃんが…タツちゃんが復活した…

タツちゃんが黄泉の国から帰ってきたんだ…。

「うぎゃーっ！！」

突然の叫び声にびっくりした私は屍餅をついた…  
声のする方を見ると、タツちゃんが窓の際にしゃがんで立っていた

それは猿か蝙蝠かのような狡猾な格好で…これが俗に言う悪魔の仕業ってやつかと思わせるほどだった…

「デエコポオン？辛かったぜ？デコポンみたいなつまらない奴とのベッドトークな日々はさ。俺にだって宇宙人になる準備つてのがあったのによ？台無しだな？台無しだな…デコポンよ？まあ…良いよ。俺は知つての通りホーミーを大事にするからさ…デコポンとはこれつきりにせよ、血肉の騎士のクレイジーさを教えといてやるよ…」

そう言つと

タツちゃんが目を瞑つた…

禍々しい空気が辺りを包み込んだ…

なんだ…前にもこの空気感じたことあるな…

「ヒツヒツヒツ…久しぶりだね？私だよ鬼婆だよ？」

私のベッドの上には…あの帰り道に見た鬼婆が…

…そんな

私はすでに血肉の騎士に出会っている…

「さらばだデコポン！」

タツちゃんは去っていった…鬼婆を残して



## 消極的な一面

鬼婆とは言え、私はこの地獄から一度抜け出しているんだぞ？  
しかも、今となつては光の戦士だ…

恐れるに足らずだな…

「ヒッヒッヒッ…あんたが力を付けているのは百も承知だよ…あんたがあの特別行動をとらなければ、カーニバルのような半端な宇宙人では血肉の騎士の感染者11人も殺せなかっただろう…血肉の騎士のウィルス性はするようにできているからね…私もかつては宇宙人だったのさ…」

鬼婆が…宇宙人だった…

…まさか、血肉の騎士の感染者は回転するベッドを介して、移動で

きるのか？

「な、何が鬼婆だっ！それは私の恐怖心ではないか？実体は何なんだ？」

鬼婆は包丁と研ぎ石を取り出し、研ぎ始めた…

「そうだよ…恐怖心とは人の記憶、血肉の騎士はそれを元に再生させる…カラスが光り物を集めるように…もっと正確に…もっと鋭敏に…さて、光の戦士よ？恐怖心を拭い去ることなどできようか？光の戦士から生まれた恐怖心はさぞ屈強な血肉の騎士を産むだろう…ヒッヒッヒッ」

鬼婆…鬼婆の言ったとおりだ…

この辺りは既に血肉の騎士に侵されていると言っても過言ではないわけか…

どうする？…悩むことさえ恐怖心を生み出しやすい…

…どうする？…

「血肉の騎士…捕らえたりっ…！」

鶴の一声とでも言うべきか？  
鬼婆が砂になって消えていった…勇者タベルだ…

「デコポン…消極的構えとは中々見所ありだな？血肉の騎士は恐怖心を喰らうインテリジェンスウイルスであるから、消極的な恐怖心ではうまく働かない…が、しかし退治とまでは行かないな…確固たる強い意志を持ちたまえ。君はそうあるべきだ。」

なぜかまだ、全裸な勇者タベルは的確な指摘を私に授けた…

「ありがとう…勇者タベル。心強いよ…」

勇者タベルは深く頷いた。

「当然だとも。デコポン…血肉の騎士とはあまり長くは続かないものだ…恐怖心を喰らうと孤独に押し潰され…やがて一塊の文字通り血肉の騎士に成長するんだ…それを打ち倒すのが7つの価値と我々というわけだ。つまりだ。デコポン君は恐怖心に負けてもいいんだぞ？ハッハッハッでは、さらばだ！」

相変わらず、本題を濁す男だ…勇者タベル。  
私はしても、相変わらず良しとすることにした…

遅れる幸せと奪われる不幸せ

私のような、素晴らしい？戦士の抱く恐怖心はより強力な血肉の騎士を生み出すようで…

勇者タベルの計らいで、光の戦士としての行いを制御されている…

「悪く思わないでほしい…こちらで巧い具合に調整して血肉の騎士を生み出す方が早く退治し終えるんだよ。」

と…わざわざベッドを回転させて、勇者タベルは通信してきた…

優しい嘘って奴だな…

いくら、勇者タベルと言えども私の生み出す恐怖心…そこから生まれる血肉の騎士を毎回退治しては身が持たないと言っわけだな…

定期的に怖い話でもしてくれるのだろうか？最終的な血肉の騎士になるまでに一体何回怖い話を聞くのだろうか？

なんだか腑に落ちない甘さだが…私の潔さが伝わるなら良いだろう…

「因みに…デコポン君。僕も血肉の騎士なんだよ？七つの価値を行使き来する際に絶対血肉の騎士の働きが不可欠なんだ…」

出た…怖い話が…

「でも大丈夫だつ。デコポン君が平常心を保てば…私と俊哉君を含む五属性の戦士達が血肉の騎士に感染した者達を退治するからね？君の出番はそうだな…最後に一塊となった血肉の騎士を討つときに…スポットライトを頼もうかな？ハッハッハッ…冗談だよ。血肉の騎士が完全に駆逐されるまで、光の戦士は秘密だな？」

恐怖心…なのか？

私は打ちひしがれていた…



「むむっ、強力な血肉の騎士が現れたようだ。デコポン君安心して  
いておくれ？」

ベッドの回転が止まり、勇者タベルの虚像が消えた…

私もまた血肉の騎士のように孤独に押し潰されかねないような…

どうなっているんだ？

## 警察犬的座敷犬

強力な血肉の騎士…  
気になる…

「あーっ！頭ではわかってても気になって仕方ない！！見るだけでも良いから見せてくれー…」

スティールアイを使い勇者タベルの同行を追った…

これはどうやら、チワワの目線のようにだ…飼い主に抱き抱えられている…

『シェパードイブオブブールドル感謝祭』

と題された看板がデカデカと掲げられた会場…

そこに現れたガチのヒール…

「タッちゃん!!」

飼い主がびっくりしてチワワを落とした

「今、ピュンちゃんが叫んだわっ！―プードルなのに…」

チワワかと思ったのだが…プードルだったか…

水たまりに移る犬はしかし…目のクリクリした小型？のチワワだった…

熱狂的なファンなんだろうな…

私は視線を変えることにした

飼い主の視線にしよう…

「タツちゃん…あら、イヤだわ…私まで…」

どうやら、光の戦士のステイルアイは強力らしく、脳内の言語野まで刺激しているようだ…

それはさておき…

タツちゃんを水の球体に閉じ込めているのは俊哉君…

タツちゃんはすでに常軌を逸しながらも、人間のとき一番強かった  
想いを頼りにSOPに会いに来たのだろう…

SOPのリーダー、ピュンが自慢の腹筋を見せたときタツちゃんが  
壊れたらしい…

まだピュンは腹筋を見せている…

水の中で溺れゆくタツちゃんはその名の通りネクトンのような虫に  
変わり…

やがて、光る砂となり天に昇っていった…

俊哉君が丁寧にお辞儀した…

ピュンはやっと、Ｔシャツを下ろし、俊哉君に向け拍手をしていた。  
すかさず勇者タベルはピュンやその他のメンバーに握手を求めて  
いた…

タツちゃん…

腹筋を見たら天に召すべきだよ…

私は先程のチワワ（プードル？）の飼い主から涙を流させてしまったようだ…

「あれあれ…どうしたのかしら？涙が止まらないわ…」

私の目線に戻ったとき、私は既に大丈夫になっていたが…



## カーニバルの凱旋

地肉の騎士に感染し、醜い姿に変えられたにせよ…

カーニバルのような美意識の持ち主は不死鳥フェニックスとなるらしい…

カミカゼは風神…

タッチャンに至っては、控え目な性格と揺るがない意志さえなければ、ネクトンではなく、水竜リヴァイアサンだったと言うが…

地肉の騎士とは…

「…と言うことだ。デコポン。おまえは御子様だつてことさ。勇者  
タベルも鬼になったり天狗になったり、やりたい放題なのが実状だ  
ぜ？」

手乗り文鳥サイズに小さくなった不死鳥カーニバル…

私の手のひらに頻りに乗りたがった…

「まさか、デコポンが巨大化できないとはな…健全な奴だ…」

私がタッチちゃんの早すぎる死を受け止めきれず、うずくまっている  
と窓際にフェニックス…炎が立ちこめた…

それがカーニバル…現在火の戦士の臨時の代行を行う勇者タベルの  
お墨付きの感染者？だ…

私が火の戦士のままだったら…戦うことになっていたかもな…

「巨大化はできないよ…カーニバルはホント、柔軟だよな…」

カーニバルは私の手のひらから、そつと浮き上がり私の眼前までや  
つてきた…

「柔軟ねえ…ハハハッデコポンもそう言えば、あの世から蘇った口  
だったな…デコポン？ここだけの話だ。地肉の騎士を有効利用し管  
理する技術が完成しそうなんだ…勇者タベルが言ってたよ…」

有効利用か…  
なんたら戦士だのなんだの七つの価値に依存するよりは…ってこ  
とか？

いやいや、弱気になるな…  
勇者タベルは何か秘策を練っている…

私にはわかる…カーニバルが今もっとも注意すべき相手だ

## 次の世代

「うわぁーっ竜だ!!!水の…水竜だ!!!この町はどうなっちまったんだ!!!」

館海の声だ…

私は慌てて窓から顔を出してみた…

館海がヒョウ柄の海パンを身につけ、あたかも素潜りでもするかのような意気込みで、水竜を仰いでいた…

水竜…タツちゃんが蘇ったのか？

「ワハハハッ凄いぞ？俊哉君！！しかし、僕のブリザードには勝てまい！！」

上空には勇者タベルと俊哉君。雪男となった勇者タベルは冷気を水竜に放ち、カチコチに凍らせてしまった…

「あーっ！タツちゃん酷いよ！？僕のリヴァイアサンを凍らせるのはなしたよ？」

悔しがる俊哉君を見ると、なんとも…ゲーム感覚というか…ポケモンやデジモンではないかと思うほどだ…

「早く、魂抜きをするんだ。皆さんに涼んでもらおう！…！竜の形をした氷の彫刻さ。」

それを聞くなり、俊哉君は両腕を突きだし目を瞑った…

「ブラッドバック…ブラッドバック…マイペイン…ブラッドバック…ミートグッバイ…」

呪文のようなものを唱える俊哉君…



そ、そうだ！！館海が近くにいるが大丈夫か？

「おーいっ！俊哉君。びっくりしたじゃないか？」

館海が詠唱中の俊哉君に手を振り声を掛けている…

「ブラッドバック…ミートグッバイ…マイペイン…ミートグッバイ…」

しかし、まだ詠唱中のようにだ…  
まあいい…館海は無事みたいだし…なんだから、人も集まってきたみたいだな…

なるほどな…俊也君そのものがリヴァイアサンになるのではなく、水の戦士の放出される水力に血肉の騎士を含ませることにより、リヴァイアサンとなるわけか…

「俊也君！オーライだ。その辺で詠唱は止めたまえ。」

俊也君は構えを解き、力尽きたのか、ぐったりと地に引き寄せられ

ていった…

「しゅ、俊也くん!!」

それを受け止めた館海の両肩の骨が外れた

「うぎゃーっ!!」

転がすように俊也君を地面に置いた館海の両腕は力なく垂れ下がり、

館海は痛みに悶絶していた……

## カミカゼの要求

その後、勇者タベルは脱臼した館海を見事に治して見せた。

「デコポン。いくら温厚そうに見えても、過去に繋がりのあるホーミーに見えても、地肉の騎士に感染したことに変わりはない…彼らは欲望のままに人間に戻ろうと躍起になっているが…それこそ己が身を怪物化する最大の要因であることに気付かないんだよ…」

勇者タベルは窓辺までやってきて、私に注意を促した…

勇者タベルも地肉の騎士を使っているのに…  
俊也君も…

よっぽどの自信があるようだ…

カーニバルにせよ…カミカゼにせよね…  
私はホーミーを裏切らないさ。

「カーニバルやカミカゼは、平常心を保っているよ。大丈夫さ。」

勇者タベルは残念そうに首を横に振った…

「違うんだ…デコポン。私もデコポンと同じ意見だ。いや、そうだった…同じ意見だった。しかし…ターキーがカミカゼに倒され、私も渋々ながらカミカゼに風の戦士の称号を与えざるを得なかった…肉の塊となったターキーはいつ、地肉の騎士に感染するかもわからないからね…カーニバルをお願いして焼いてもらったよ…」

そんな…ターキーが悪魔に？

カミカゼが風の戦士の代行に？臨時の？

「そ、そんな…ターキーほどの男が悪魔になるなんて…カミカゼは一体どんな手を使ったんだ？」

勇者タベルは肩を竦め、私の返事にも答えず、背を向けた。

「デコポン…私も血肉の騎士に感染しているんだ。気をつけたまえ」

飛び去っていく勇者タベル…

置き去りにされたような…

私は宙ぶらりんの気持ちを預けられた局のようだった…



## 浄化の必要

俺は雷の戦士タツだ…人より多く痛みを知り、雷の戦士になった…

仲間を幾人も集め、宇宙人と交渉したこともあった…

血肉の騎士についても、誰より早く取り組んできたつもりだ…

俺の左腕は血肉の騎士に完全に乗っ取られている…雷神の腕だ…

俺は地球人として、雷の戦士として血肉の騎士を駆逐した後は左腕を切り落とすつもりだ…

「雷の戦士タツ。君には敢えて伝えるが、君の座を奪う優秀な血肉の騎士の感染者が…狙っている。彼の騎士は麒麟に化ける…僕としてはやはり、地球人に勝ってほしいんだが…血肉の騎士とは宇宙人が持つ特有の細胞でね…」

勇者タベルと名乗る血肉の騎士の化身…地の勇者。俺には真実を話しているらしいが…

「わかつている。勇者タベル…おまえは絶対的な中立の立場だと言いたいのだろ？俺らは血肉の騎士を受け入れ、破滅と再生を受け入れてきたじゃないか？記憶にないのか？どんなに仲間が宇宙人になっても、俺は地球人に拘った…。左腕を雷神に譲り渡すことだな…野暮は止してくれ」

勇者タベルは薄気味悪く笑った…

「違うっ！！違うぞ？雷の戦士タツ！！左腕を捨てただと？僕は生粋の宇宙人のさらに上に行く、隕石だったんだ。僕こそ、隕石である絶対的存在価値を捨て、宇宙人となりミトコンドリア細胞を注入された最低な地球人さ！！」

勇者タベルは私の口を右の手で塞いだ…

「雷の戦士タツよ。お前は全身全霊、雷神となり、これからやってくるであろう麒麟を倒せ！！」

体中に血肉の騎士が入り込みミトコンドリア細胞を食い尽くし始めた…

「うゝウゴゴア…アアア…」

気を失った俺を地面にたたき落とし

勇者タベルは飛び去った…

フッフ…宇宙人になった奴らはすべて血肉の騎士に感染しているが、それは宇宙社会においてタブーとされている。

血肉の騎士を取りただされるのは、俺のように知りすぎた奴ばかりさ…

痛みを知りすぎたようだ…

## ジャオの錬成師

血肉の騎士に感染した者は、体が変質し化け物となる…

しかし、必ずしも前例のある化け物とは限らない…

一つ目小僧にせよ、のっぺらぼうにせよ、山姥にせよ、

前例があれば、歴史に身を委ね振る舞う？こともできようが…

目の前にいるジャオの錬成師というゴムの化け物…

血肉の騎士に感染し、ゴムの性質をひたすらに研究し尽くした結果。  
不老不死の域に達したという生き字引…

「光の戦士も、もう何代目やろうか？」

ジャオの錬成師は私に耳朶を引っ張らせてみせた。

伸びた…

「わしは、ゴムやから…伸びたら縮むのではなく、伸びたら元に戻るんよ。斬られても燃やされてもな…」

パツと手を離し、耳朵を弾き出した…

ジャオの錬成師は元から福耳であり、元に戻った耳朵はふくよかにブラブラ揺れていた…

「それってこじつけじゃないか？ゴムは伸び縮みするものだよ。」



私は謹慎生活による陰鬱な感情も手伝ってか、否定的になっていた…

いや、それでも恰好の話し相手だと思ったのも隠しようのない事実だ

それ故に、些か問題発言だったことは否めない…

「おまえさんは、血肉の騎士のことをわかつとらんな…人間はトラ  
ンプタワーのように組織立つひ弱な生き物やが、血肉の騎士を備え  
た人間は思いのままに体を操れるんやよ？」

そう言うなり、ジャオの錬成師は帰って行った…

ゴムの化け物など今まで前例がない…

## N O i d e a N O l i f e

「ほう…噂では左手のみの感染だと聞いていたが、どうやら完全に感染したようだな…」

私の住む家の前では、雷の戦士の座を狙う。麒麟に化ける、自分のことを雷速の騎士と謳うルーチン

それを迎え撃つ現雷の戦士タツが熱き戦いを繰り広げていた…

タツはいつの間によら、雷神と化していて、これではどちらが勝っても感染者が雷の戦士ということになる…

「不可抗力に過ぎんっ！！お前と一緒にするなっ！！雷槍っ！！」

タツは蒼い雷の槍を生み出し、投げた

目にも止まらぬ速さ…ゼノンの矢とでも言っべきか？

ルーチンの右肩に突き刺さった…

「うぎゃーっ!」

空中戦ながら、ルーチンはうずくまった…  
ルーチン…雷速を謳いながら、なぜ避けられないのか？

「付け焼き刃の雷属性の馬並野郎が…いくら素早く動けても、使いこなせなければ意味がない。」

わなわな震えてうずくまったままのルーチン…

「ヒョッヒョッヒョッ…安心なされ、ルーチンよ。麒麟に雷の戦士の座を与えようぞ?」

スツと雷の槍を握ったかと思うと槍は霧のように消えてしまった…

ジャオだ…ゴムの錬成師ジャオが現れた

「ジャオ様…忝ない。ジャオ様の忠告通り、雷槍を投げてきたのに…」

ジャオはルーチンの側に立ち、タツを見据えた…。

「勇者タベルにこれ以上好き勝ってやられては困るのだ…どうや？  
タツ。このルーチンを馬として使ってみる気はないか？」

突然のジャオの要求に啞然とするタツ…  
しかし、思い出したようにタツは嘲りだした

「ハッ…それじゃまるで茶番だ…わざと俺の雷槍を受けたみたいじゃないか？」

ジャオは目を瞑り首を横に振った…

「お主も感染して日が浅いようやな…雷神とは言え心力のある雷…  
いや、わしから見れば電力でしかない…。」

ジャオは腕を伸ばし、タツの左腕を掴み、掻き消した…

「うぎゃーっ!」

うづくまるタツを余所にルーチンに跨るジャオ…



「左腕：返してほしくばわしの元へ来るんやな…良い返事を待って  
おるぞい？」

ジャオはルーチンの腹を蹴り、ルーチンは駆け出した…

うづくまるタツを私はただ見守るばかりだった…

A i d e a b o r n s r e a l l y

「で、デコポン…う、腕が…」

悲痛な眼で私を見つめるタツはうずくまり、左腕を抑えていた…

どうしたものか…

錬成師ジャオはタツに対し、取りにくるように言っていたし…なんか位置的に勇者タベルと同等か、はたまたそれ以上の力を持つてそうだし…

「わかったよ…左腕を再生させるから…」

私は窓越しに、タツの左腕をタツの細胞に呼びかけ、治した…

何というか…血肉の騎士が手伝ってか。異常なまでに手応えがなかった…

「わっほいつ！…ありがとうっ！…デコポン…なんて凄いんだ…光の戦士って奴は…血肉の騎士にも感染してないのに…」

キャラに似合わず、喜び哮るタツだったが…

本当は痛みを拭う程度になるだろうと踏んでいたのだが…

理想通りの形が反映されてしまった…これではジャオの錬成師に顔が立たない…

「ていやっ!!」

私は、タツの左腕にある催眠を掛けた。

『タツの左腕よ？お前は血肉の騎士を取り除かれ無になったんだぞ

『?』と

すると、みるみる内にタツの左腕は消えてしまった…

「すまない…ジャオの力の方が私より数段上のような  
いか？タツ…君はジャオに呼ばれているんだぞ？ルーチンと手を組  
み雷の戦士を更なる高みへと昇華すべきさ…」

タツは一瞬、私の行いを見抜いたように見えたが…すぐさま自分を  
取り戻したようだった…

「…だな。デコポン…危うくターキーのように、ジャオへの怒りで悪魔になるところだったよ…ジャオの放つ。諷し、は風の戦士のプライドを著しく傷つけた…いや、この話は光の戦士であるデコポンには不必要な事実だ…デコポン。ありがとう…」

やがて、タツは飛び去った。私はターキーの死を著しく悔やんだ…

カードの上司であり、人格者であるターキーがなぜ悪魔になったのか…  
カミカゼもジャオに選ばれた勝つべき男だったのか…

私は不甲斐なさを憂鬱でかき消すようにしばらく、夕日を見ていた…

i f T u r k e y s b a c k ?

ドン<sup>ド</sup>ドン<sup>ド</sup>ドン<sup>ド</sup>ドン

ドン<sup>ド</sup>ドン<sup>ド</sup>ドン<sup>ド</sup>ドン

夜も深まる頃、私の家の窓が揺れた…  
誰かがノックしているようだ…

誰だろうか…タツちゃんかな？  
タツちゃんがまたもや、蘇ったかな？

ないか…タツちゃんは絶対的死である肉塊となつた後蘇つた訳じゃ  
ない…  
アレは…

「デコポン。俺だよ！！カミカゼだよ！！開けてくれ！！」

カミカゼ。

カミカゼも絶対的死を与えられている…

俊哉君のリヴァイアサンでわかったんだ…

血肉の騎士に感染したものは…もはやこの世のものではないのだと

あれは、私の知るカミカゼではないのが現実だったんだ…



私は狸寝入りをすることにした…

「デコポン…お前の力があれば、ターキーを蘇らせられるって、ジヤオ様が仰ったんだ…。デコポン詳しい話がしたい。開けてくれ！」

ドンドンンドン

ドンドンンドン

すまない…

カミカゼすまない…

お前なら私でもまだ悪魔にできる…

「ていやっ!!」

私はタツの腕を治した要領で血肉の騎士を操るコツのようなものを見つけていた…

催眠さえも…

『カミカゼよ…お前は悪魔だったじゃないか？風神ではなく…悪魔だったじゃないか？』

ドンドンドンドン

ドンドンドンドン…

窓を叩く音が止んだ  
カミカゼが悪魔になったことは確かだが、やけに静かだな…

「…」

静かだな…と思えば  
これだ。カミカゼが戦慄き悪魔となった。

「うがぁーっ！！デコポンっ！！ぁーっ！！うぎゃーっ！！」

私の力があれば、ターキーは蘇るらしいが…  
そうだな…予想はつく

血肉の騎士はすでに、この町に蔓延しているから、塵となったターキーを具現化することはできなくもない…

だっ たらなんだ？

だっ たらなんなんだ？

私はカミカゼが風の戦士になったことに憤りを隠せなかった…のだ  
ろう

風神から悪魔へスライドさせることは容易だった…

カミカゼの断末魔も止み…私は窓を開けた

「やあ？デコポン。」

そこには、カミカゼのらしき肉塊と勇者タベルがいた

「期は熟した。血肉の騎士が行えることはもうないに等しい…デコポンのおかげだな？よくぞ…心の目で見抜いたな。血肉の騎士に感染したものは、どんな形であれ根っからの化け物であるとな…やがて、最終段階に入るが、先にも言ったとおりデコポンは何もしなくて良い…では、また…」

勇者タベルはカミカゼの肉塊を焼き消し、飛び去っていった

士の勇者として…

勇者タベルが何の気なく、ベッドを回転させ私と更新をとってきたり、テレビを使って、妖怪退治の様子を見せてくれたり…

私は光の戦士という枠に欺瞞さえ抱くほど…例えるならハンスフリ  
ーな貴族か

頻りに狩りに出たがるプリンスか。と言う気分だった…

「デコポン…僕はデコポンに一つ嘘を吐いていた。」

テレビから勇者タベルがユニコーンに跨り、タツとルーチンを従え  
(どうやら、ゴムの錬成師ジャオとは話は付いたようだ) 私に語り  
かけてきた…

しかし、テレビと言うのは、視聴者には反論の余地のない一方的な通信手段であり、昨今では視聴者の心身や自尊心への気配りを徹底し、一方的でありながら、あたかも電話機でもあるかのような意志の疎通を可能にしている…

アーと言えばカーのような…

「デコポン聞いてくれ。僕達の手の内はもはや、デコポンの知るところだ…これで僕達の面目も躍如されたよな？…デコポン、僕はデコポンに土の勇者として、理性的に接してきた…けれど、僕は…僕こそが、隕石から堕ちた騎士…血肉の騎士なんだ…」



血肉の騎士はウイルスだと勇者タベルは言っていたが、血肉の騎士とは隕石から生物化したものを指すのだろうか？

何が嘘なのやら…すべての経験から得た知識を上手く組み替えて、話について行くしかない…

勇者タベルは土の勇者ではなく、血肉の騎士だったと言っわけか…

「血肉の騎士に感染したものはやがて、集合体となり一つの生物と化す…。僕がその際の引力になるのさ…」

なるほど…勇者タベルが血肉の騎士の核であり、血肉の騎士をウィルスと呼ぶ意図は、最終的な形態がそれら感染者の集合体を血肉の騎士と呼ぶからだろうか？

流暢で便利な言葉には、逆にマイナスの言霊が宿ると言うわけだ…

「デコポン…つまりだ…僕はもうすぐ勇者ではなくなるが、デコポンのような光の戦士に倒されるなら本望だよ…今までありがと…デコポン…」

勇者タベルの爽やかな笑顔…隣のタツもだ。  
親指なんか立てやがった…

やがてテレビは砂嵐となった…

血肉の騎士に感染していないのは地球人と俊哉君とタナー…か  
宇宙人は宇宙人と言っただけで、血肉の騎士に感染していると推察で  
きるからな…

「はあ…」

私は溜め息混じりに、テレビの主電源を切り、半ばシユールに考え  
を巡らすことになっていた。

「私が血肉の騎士を倒すのか？」

はて…医学書などうちにあっただろうか？

crazy girl

「デコポンさん…妹の俊美です…これから血肉の騎士との戦いに備えて、デコポンさんに俊美を預かってほしいんです…」

俊哉君から紹介された俊美というまだ、七歳だという少女は栗色の髪を輝かせ、私を見て笑った…

「アハハハッ隠れメタボみつけw若禿以下だよ！隠れメタボ！」

私を指さし笑う俊美ちゃんを制したのは俊哉君だった…

「と、俊美っ！！若禿の方が質悪いだろ?!ってか、そうじゃなくて、デコポンさんは見るからに小太りじゃないか…って…もう…デコポンさん。すみません…こんな妹ですが、血肉の騎士を打ち倒す

まで、預かっててくれませんか？」

俊哉君…まだ若いのに…お兄ちゃんだからか…しっかりしてるな…

「しかし、俊哉君？血肉の騎士に対抗できる戦士は、君以外にはタナーしかないけど、大丈夫なのかい？」

俊哉君は困った顔をした…

「タナー？ああ…土の戦士のおじいちゃんですね…彼は死にましたよ…実は俊美を預かってもらおうと訪ねたんですけど、わしは戦うだの言って発狂しまして…悪魔になりつてな具合で…でも、たぶん

血肉の騎士なら、倒せますよ…僕一人で。水の戦士ですし…」

タナー…

俊哉君もかなり逸脱した感性を持っているようだ。

私も危なかったようだが、変なプライドがなくて良かった…。

「わかったよ…俊哉君…俊美ちゃんは私が守ろう…そして、テレビ  
でも戦いの様子を見るからさ…」

どうも私の発言に不満があるようだ…

俊哉君といい、俊美ちゃんといい…

「アハハハッテレビ観戦するつもりだね。この隠れメタボ。私達も赴くのよ!」

「残念ですが、デコポンさん。妹は嘘が吐けない質でして…そういうことになりますね…」

一瞬、自分は悪魔になってしまったかと思ったが、どうやら、まだ大丈夫のようだ。

「…わかったよ…」



俊哉君は淡々と予定や場所について話し、愛くるしい俊美ちゃんを置いて去っていった…

「メタボお…なんで悪魔になんないの？はあ…」

我慢だ…血肉の騎士を滅するまでの我慢だ…  
私のスピリチュアルな戦いが切って落とされたのだった…

Q

俊美ちゃんは俊哉君がいなくなるなり、黙りこくってしまった…

「俊美ちゃん…予定では、明日の夕暮れ時に町の公民館前で血肉の騎士が最終段階に入るみたいだけど…家に居ても良いんだよ？」

俊美ちゃんはちっちゃな背中を私に見せていたが、振り返ってくれた…

「いや…わたし血肉の騎士に感染してるし…なんと、ど直球の悪魔ちゃん…悪魔になったのに肉塊にならないの…フッ」

バカな…

悪魔だと？いや、まてまて…

つまり、これにも意味が二分する訳があるんだ…

「俊美ちゃん？血肉の騎士は悪魔になって肉塊になるわけではないんだ…悪魔となり、肉塊になるのは宇宙人や戦士…宇宙人も血肉の騎士に感染しているけれど…」

話の途中で俊美ちゃんが悪魔になった…

どす黒い肌となり、牙は突き出て、目はまっ黄色に輝いていた…

「それではコレはなんだ？なぜ、宇宙人は悪魔になると肉塊になる？私はなぜ肉塊にならない？悪魔だろ！？わたしは悪魔だろ！？」

ドガンッ！！

私の部屋が吹き飛んだ…

悪魔とは言え、まだまだ未熟な力が暴発したようだ…

「俊美ちゃん…私もよく知らないが、宇宙人の前に半宇宙人てのがあってね。たぶんだけど、地球人から宇宙人になった奴が悪魔になると肉塊になるんじゃないかな？」

私は吹き飛んだ部屋を一瞬で直して見せた

「アハハハッ。気障な奴…違うよ。これはあくまでも化学的な悪魔。化け学でしょ？肉塊になる前に変貌する悪魔は科学的な過剰状態…つまり、オーバードースね…わかるかしら？まあ、私は意図的にオーバードースしたときの悪魔に好きなときになれるけどね…」

悪魔から少女に戻った俊美ちゃんは、私の暗い常識を悉く打ちのめしてくれた…

「そ、そうか…俊美ちゃん…凄いな…」

またちっちゃな背中を向けて座り込む俊美ちゃん…まるで何もなかったみたい…

「予定どおり、明日の夕暮れ時、町の公民館前で勇者タベルがオーバードースするわ…私達はお兄ちゃんがそれを倒すのを見守るだけ。保険とかじゃないから勘違いしないでね？」

それ以降二人が話すことはなかった

## ナイトメア

夕暮れ前、公民館に行く途中、私はあまりのアバウトさに予定は狂うのではないかと疑わずには居れなかった…

「ねえ？俊美ちゃん。俊哉君ってさ。そんなに強かったかな？まだ、小学生だし…何か凄い力を隠しているんじゃないかい？」

俊美ちゃんは私の方は向かず、淡々と質問に答え始めた…

「持つてるわ…てか、見たことあるでしょ？お兄ちゃんは水の戦士にしてナイトメアと呼ばれる魔法を使えるようになったわ…勇者タベルはあんなふうに核心を避けたがる人だから、自分を地球人にしたのはお兄ちゃんのナイトメアの所為だと思ってるの…そんな素振

りだった…」

ナイトメア…悪夢？

オーバードースを促す力か？

「はっ！！そう言えば、俊哉君はリヴァイアサンを操っていたね。  
あれのことかい？」

俊美ちゃんは頷いた

「そうそれ。お兄ちゃんは血肉の騎士を感染させる力を手に入れた



の…私も…お兄ちゃんに作られた悪魔よ…」

いや…待てよ…

そのナイトメアがあるからってどうやって血肉の騎士（この場合は、化身と言っ意味で）をどうやって倒すんだ？

「俊美ちゃん！！それじゃダメだ！！勇者タベルはやがて、血肉の騎士の感染者を集めて、地上最凶の怪物となるんだよ？感染させる力があってもどうしようもないじゃないか？」

俊美ちゃんは振り返り、私の脛を蹴った…

「違うっ！お兄ちゃんがすることは抑制。私達…ほとんどは勇者  
タベルのだけど、計算によると勇者タベルのストレスはすでに極限  
化していて、ちょうど今日の夕暮れ、勝手にオーバードースして悪  
魔になっちゃうのよ。そのまま放つといたら肉塊になっちゃうから、  
お兄ちゃんが血肉の騎士を使って、引力にするの…だってそうしな  
いと、町が清浄しないでしょ？」

脛を押さえつずくまる私を後目に、俊美ちゃんは歩き出した…

「な、なるほど…わかるような気はするよ…つまり、勇者タベルは  
すべての血肉の騎士を吸い込むブラックホールに化けるわけだ…」

また、俊美ちゃんは頷いた

「そうよ。あなたが問題視してるのはその後みただけど…気にしないで…」

私はいったい何のために光の戦士になったのか…

意図もなにもない、恐怖心に急かされたのだ…

そう思うしかない…か

## 類推

それは胸焼けしそうなほど、不思議な夕日だった…。暖かみや親しさが逆手となり、まるで自分のものかのようだった…

「なんか…ストーブみたいだ」

私は公民館前で立ち止まり、思わず漏らした…

世界中がこの夕日を見ているのかと思えばの胸焼けだが…

時間が悪戯に止まってしまったかのようだった…

その夕日の右部からやや下部辺りに黒い点が見えた…

「残念だわ…予定と少し違ったみたい…勇者タベルはもうすでに…」

その黒い点は次第に大きくなりながらも、夕日に広がる焦げ後みたいにのっぺり張り付いていた…

気持ち悪くなり、私は公民館の窓に張り付けてある火の用心のポスターに目を奪われた…

シェパードイブオブブードルのピュンがパーソナリティを勤め上げるドキュメンタリー。『ワタシレスキュー体質』と言う番組がきっかけでアイドルが何気にやっているこういった公務活動がやけに表立っているのが昨今の主流だ

「引き連れてるわね…ダメだわ…お兄ちゃんは今も…」

俊美ちゃんの声に引き戻され、私はまた夕日の方を見つめた…

黒い点は渦のようになり、私でさえも事態を飲み込める範囲にまで迫ってきていた…

「あ、アレは？俊哉君は勇者タベルをブラックホールにできたんだね？」

無理矢理言葉を絞り出したのが悪かったか…俊美ちゃんは泣き出してしまった

「なんで？なんでなの？！お兄ちゃんがなんで公民館に先にいないの？！もう終わりだわ…何もかも…」

答える術もなく、黙り込んだ私に呆れてか俊美ちゃんはすぐさま泣き止んだ。

そして、とりつかれたかのように、悪魔に化けた…

「俊美ちゃんが戦うのか…」

私はそれしか考えられずにいた。

横から首根っこを捕まれたみたいに、俊美ちゃんは黒い渦に吸い込まれるように飛び去っていった…

あれは…化けたのか？

わからない…

取り残された私…黒い渦は確かに私に迫ってきていた…



## 腹上死

黒い渦が無常にも迫り来る…

「は、話が違っじゃないか？私は戦う必要はないと…」

誰が言っていたのか…  
そう言っていた張本人が今、黒い渦となって迫ってきているのに…

「私が…私が戦うしかないのか…」

とうとう私の眼前までやってきた。黒い渦は…何やら群をなす鳥か？羽虫か？のように、意志を持って私の前で止まり、

すぐさま私を避けるように前進した…

フツと私の中で何かが終わり始めていた

なんなんだ…この虚空は？

血肉の騎士だろ？ ”アレ”は…

私は思わず自分の頬を撫でてみた…  
いくら避けたとは言え

一粒でも ”アレ” が付着していないものだろうか？

私は光の戦士だぞ？

どうやら、頬に血肉の騎士はついていないようだ…

私は緊張の糸が切れたように、尻餅ついでに倒れ込んだ…

そうだ…そうだ…

私は戦う必要はなかったんだ。

きっと私の知らない戦士か何かが現れて倒すんだろ？

木の戦士か？氷の戦士か？砂の戦士か？

「アハハハハッ アハハハハッ」

笑って更に力が抜けた私はコンクリートにキスをするように俯せになつて気絶した…

## 軌跡（前書き）

気絶したデコポンは、タッチちゃんの生涯のアイドル、シェパードイブオブプードルのリーダー。ピュンと火消しをする夢を見ていた。梯子を使った曲芸を見せるピュン。マツチ一本火事のもと。と叫ぶデコポン…二人の掛け合いがまるで火を起こしたかのような夢…目を覚ましたデコポンが見たものは、あまりの現実だった…

## 軌跡

翌朝、私は公民館の前にまだ居た…

ちようど、植え込みの木の隙間から漏れる陽射しの所為で一瞬面食らったが…

私は気だるさをはねのける様に一声あげた

「火の用心、火の用心、マッチ一本火事のもと!!」

空を仰いだ私は視線をゆっくりと前に降ろした…

岩？

何やらでっかい石ころがそこにはあった…

「なんだ…血肉の騎士はどこへ行ったんだ…」

周りを見渡した…

早朝だからだろうか？人っ子一人いない

いや…血肉の騎士が吸い尽くしたんだろう…

「デコポン…デコポン…」

誰かが私を呼んでいる…辺りには誰も居ないんだぞ？

「…こぼん…デコポン…」

幻聴か？

私は耳を澄まし、声のするらしき方へ近づいていった…



どうやら…と言うか。今となつては案の定だろうか？でつかい石ころから聞こえてくる

「…こぼん…やっと気づいたみたいだね…もうすぐ僕は人間の言葉も忘れてしまう隕石なんだ…ごめんねデコポン…君の町は破滅してしまつた…僕みたいな地球外物質が飛来したら…ね？ゆつくりゆつくりと僕は地球を新しい段階へ運ばなきゃならないんだ…」

私は隕石を蹴飛ばした…

右足に走る激痛…

疲れていて、痛みに対する怒りもなく、些かの気持ち良さに変わつていた…

「ば、バカな？私の町が破滅しただと？建物は元のままだし、ひ、人はいないけど…そんな…」

息も絶え絶えに、私は必死で隕石に話しかけていた…

「デコポン…最後のお願いだ…僕を学会に売ってくれ…宇宙学会に…そして、研究成果を経て地球は新しい段階へと回り出すんだ…」

が、学会…

走馬灯のように今までの異常な体験が頭を駆け巡った…

「学会？数多ある学会の中かなぜ？宇宙学会を？」

また私は隕石を蹴飛ばした。

「なぜ？つて…僕は地球外物質だから…わかるでしょ？」

私は足を痛めない程度に、隕石を蹴り続けた…

「わかるわけないだろ？おまえはすでに、疫病を蔓延させたんだ。宇宙学会…う、宇宙学会にどうやって話を付けたらいいんだ？おまえを隕石ですと紹介して信じてもらえるのか？」

話は見えている…

私が伝えなければならぬことは、超常現象のことではなく、隕石

が飛来したこと…

どんな誤解を受けても、それ以外は報告してはならないんだ…

でも…あまりに犠牲が多すぎて…

私は涙が止まらなくなった…

地球人として、喜ばしくてもこの町に住むものとして町人として…  
これほど惨いことはない…

「頑張つて！！君ならできるよ。僕はそれだけの知識と経験を与え

たんだ……から……」

それから、何度も話し掛けたり、蹴ったりしたが……隕石は返事をしなかった……

私の葛藤はそれと同時に片付いた

## laundring sense

建物があれば、人は移り住んでくるものだ…  
石の上にも三年…とは行かなかったが…

誰かが不審に思い。隣町ないしどこかしらからやってくるのではないかと丸一日、隕石の上に座って待っていた…

奇しくも公民館の前でだし、簡単だろう…宇宙学会になんて届けずに、もつと信頼できる血の通った人達に預けるべきさ…

「おーっおーっ…できたか…こりやまた小さいのう…例年に比べて…」

ゴムの錬成師ジャオが現れた…

私が座っている隕石を撫でながら、語りかけていた…

何故だ…ゴムの錬成師ジャオは何故、血肉の騎士に取り込まれなかったのか…

「お主、石の声を聞いたか？学会がどうか言っただろう？気にしなさんな…やがて隕石は朽ち果て、町に人が満ちる…歴史は再び思い起こされ、辻褄が次第に噛み合ってくる。そして、出来過ぎた文明が人を傲り、また隕石を呼ぶだろう…デコポンと言ったか？お主が今期の受信者であるようじゃが、今までより些か我慢がなかったようじゃな…」

淡々と話すジャオには、生気が感じられず、おそらくは幾度となくこの巨大な輪廻を目の当たりにしてきたのだろう…

現実のようで、それは単なる悪夢。覚めない夢はないんだ…

「ゴムの錬成師ジャオ…私のような受信者はどうなったんだ？幾度もこのような輪廻はあったと聞くが？」

ジャオは私の問いかけに操られるように着飾った派手な編み込みの  
された麻のマントをとった

地肌に纏ったばかりのマントであった為か…  
いや、そうではない…



ジャオの体中に人の顔が無数に張り付いていた…

「バカな奴らじゃて…お主みたいに隕石に座っていたのは始めてみる…受信者は血肉の騎士を選ばずワシを選ぶ…生きながらえたいやら死にたいやら…ワシが血肉の騎士に取り込まれない理由がお分かりだろう?」

マントを羽織ったジャオは私に背を向け歩き出した…

「デコポンとやら…良かったら?ワシを殺してくれんか?」

躊躇なく私は真空の刃を生み出し、右から切り下ろすようにジャオを切り裂いた…

「ハハハッありがとうよ？伸びたじゃないか？すぐ元に戻る…昔はこんなじゃなかったんだがなあ…」

みるみるうちに傷が塞がっていく…それは伸び縮みするゴムのように思えた…

やがて、隕石は砂のように風化し、タンポポの綿毛のように町中に飛んでいった…

## 完全なる平和

不思議なものだった…

眠りにつく瞬間を見つけられないように、まして町が蘇る瞬間だ…

隕石が風化しているのを見ていた内に町に人が戻っていた…

b o o m

b o o m

メールか…おっ、カードじゃないか？

『デコポン…この町で起きたこと…いつたいどれだけの人間が覚えてるんだ？今、ターキー氏が目の前に現れたよ…』

カード…カードも生きていたんだな…

私は強い鬱と対面したようだ…

「で、デコポン…！タッチちゃんがメンソーレラブに行きたいって電話掛かってきたんだよ。どいう風風の吹き回しだ？」

例の半被を着たカルテが野生の勘だろうか？  
私を求めて、公民館前までやって来た…

そう言えば…私達はよく公民館に集まっていたな…

野生の勘は訂正しよう…  
習慣だ…

「ハハッカルテ。タッチちゃんがやつと現実を見だしてくれたかな？  
アイドルなんて無理だって気づいたんだよ。きっと」

そうだ…思い出したぞ。

私達はただ、大人としての義務感に苛まれていただけなんだ…

きっと、そんな不安定な気持ちが幻を、リアルな幻を見せたんだな…

「デコポン。妖怪大戦の間どこにいたんだよ？よく無事だったな？」

どこにつて…まったく私が張本人と言っても過言じゃないだろうに…

「私は家にいたよ。そして、ここは最終決戦場だ……」

カルテは首を傾げていた…

「デコポン…何が言いたいかはわからないけど、妖怪大戦はアメリカで起きたことだから…俺らの話とは違うだろ？いくら毎日つまらないからって…家でゴロゴロしてるからだよ…デコポンって相変わらず釣れないな…じゃっ、俺これから仕事あるし、タツちゃんと同伴だからw」

私は覚束ない相づちを返しながら、携帯を開いた…

時事をいち早く知るには、携帯が手っ取り早い…

『アメリカ各地でY O U K A Iと呼ばれるモンスターが多数発見され、F B Iや国防省が動き出す。』

…か。

カルテのやつまさか…蘇った口か？

小気味の悪い笑いがうつすら浮かんた…



隕石は動き始めたようだ…

i n c o n s i s t e n t

何もなかったかのように、いや、血肉の騎士など向こうのゴシップだったかのように、町は『いつも通り』を着飾り、回り始めていた…

私は少なからず二年は死んでいたし…こんなに平和なら…銃殺じゃないか…

殺人罪が立証されないまでも、殺人未遂ではあるわけだし…

473

病院側はいつたい何を考えていたんだ…

いや…タツちゃんは逮捕されたか…

「やばいな……」

まるで生き字引にでもなった気分だったが……計算はずれる……

事件はあった

しかし、解決し平和になった

それが私に対し、この町が望むこと

そう言えば、わたしはまだ光の戦士としての力は残っているのだろうか？

一つ目小僧とか…出ないかなあ

「フフッ…」

私は浮遊感に苛まれていた…  
奇しくも死んでいたあの二年間と似た境遇だ

しかし、訳が違っ…

私は早速、一つ目小僧を呼び出してみた…

「おんや…自分？いつぞやのワレやないか？」

冷や汗がブワツと湧いてでた…

そうだった…

あの化物列車のアレは血肉の騎士の影響ではなく…おそらく、宇宙人の仕業…

地球人を妖怪のように見せていただけなんだ…

私が望む一つ目小僧と言えば…この厳つい極道屋ということになる

「あつ…ハハハハッ。に、二年以上も前の話なのに…よ、よく覚えてらっしゃいましたね…」

どうしたものか…

私はこれ以上何も考えられない…

「あんさんな？自分が加害者やからって、都合の良い風に解釈したらあかんで？悪いもんは悪いんや…以後、気いつけや…ほんまならどつき回すところやが…時効や時効…」

そう言うと、極道屋は翻し、背を向け、私に手を振って去っていった

はて…これでは光の戦士の力がまだあるかどうか…図りかねるな…

## 関白

宇宙人とは言え、勇者タベルのように隕石から生まれた訳じゃなく、地球人 半宇宙人 宇宙人と進化していった者達らしく、最終的な私の独断と偏見としては、血肉の騎士に感染していたとしか言いようがないわけだが…

私の単なる飛行能力にさえ、血肉の騎士が作用していないわけがないのだ…

故に、町は勇者タベル…いや、血肉の騎士を浄化する為に生み出されたブラックホールにより吸い尽くされた…

例外として、代々の光の戦士。



そしてゴムの錬成師ジャオが生き字引としてか？生き残る…

しかし、光の戦士は私が初めてこの周期を確認したようであり…

例外と言えば、ジャオなんだろうが…

「私は何だと言っただろうか？どれ… UFOでも浮かべてみるか？  
ベタに円盤型のw」

私は天に両手を翳し、念じてみた…

感覚で言うなら、肉眼では確認できないであろうマイクロレベルの微粒子、つまり原子レベルの新たな融合。そこは地球外レベルの自由度があり

できないわけがなかった…としか言えないだろう

UFOが…直径100寸程度のUFOが浮かび上がった…

あそこに…UFO内に…そうだな…私が拐かされたときのような宇宙人を配置しよう…

私はコンダクターのように、繊細でエレガンスな気分に取り憑いていた…

悦と呼ぶには余りに愛おしく…

心の傷が癒えていくのが、しかとわかった

頂から

「はっ！！何をやっているんだ…これじゃ、私が原因になるだろ？  
…いずれ新たな土の勇者が飛来する…」

私は急いでUFOを消し、血肉の騎士を浄化した…

「…うひゃーっ！」

どこからともなく叫び声が聞こえた…

なんだろうか…血肉の騎士はすべて浄化したのに…

「言ってなかったかな？血肉の騎士をこの地球から完璧に消し去ることはできないんじゃないぞ？つまり、おまえのような光の戦士が念じない限り、血肉の騎士の感染者のいくらかは、あのブラックホールから逃れ生き残っていたのじゃが…まさか、念じるとはな…」

後ろを振り返ると、ジャオがいた…

「ゴムの錬成師ジャオ…と言うことは、血肉の騎士の感染者はまだまだ、この町には居て、私の念力により…つまり、い、いや…嘘だな。ジャオあなたが生きているのが何よりの証拠だ…」

ジャオはしわくちやの顔を笑顔にして、私の問いかけに答えてくれた

「ワシは伸びて縮んだんじゃ…それじゃ、また逢うその日までな?」

ジャオは砂のように消えた…死んだのか?伸びたのか?

私は血肉の騎士をこの町から消しされたのだ…

## 善玉菌

穏やかな時間が流れた…

血肉の騎士を淘汰しきったのは…もしかして、私の思い込みではないだろうか？

私の目の届く視野内では、発見されないだけではないだろうか？

それでも良いか…

今日はカードの計らいで、ターキー氏と話す機会をもらった…  
現在町の喫茶店にいる…

当人たつての希望であると、カードは言っていたが…

世辞に決まってる…

「ふむふむ…血肉の騎士は細菌であるというわけだね…しかも、体を異常化させる悪性の地球外ウイルスだと？」

まだ、オーダーも来ていない中、ターキー氏は私の切り出した話に答えてくれていた…

その話と言うのは、血肉の騎士の危険性についてだ。

人を墮落させ、欲望のままに体を変態させられると言う旨を伝えたわけだが…



私の淡い期待からは、若干逸れた回答が返ってきていた…

「デコポン君。欲望を具体化すると言う表現は極端すぎやしないかい？人を見損なっては駄目だ…私はそう思う。思惑が高ぶりすぎて、そう言った結論が出たのかもしれないね…しかし、どうだい？その血肉の騎士を有効利用できれば、自己治癒を著しく促進させられるじゃないか？病気や怪我、肢体の欠損部の再生。劣化した臓器の再生…等々、内科医にとっては、夢のようなウイルスじゃないか？」

いや…ターキー氏はすでにあの血肉の騎士が起こした惨劇を忘れて  
いる

血肉の騎士が有効利用されるなんて…判断を鈍らせるだけなんだ

善玉菌？

「そんな…夢みたいなこと…血肉の騎士は人の欲望のみを狙います。絶対に…無欲な人間なんて居たとしても一握りでしょ？忌むべきは血肉の騎士そのものなんです。」

ターキー氏はやってきたコーヒーを一飲みし、しばし考えるように目を閉じた…

「デコポン…血肉の騎士とはなんだい？アメリカで流行っているんだろうか？私も半ば軽返事で済ませていたが…少し考えてみないかい？もう少しわかりやすく頼むよ。このままでは君の虚言でしかない。」

私は冷や汗が溢れるようにでたことに気づいた…

一旦それに気を向けることで落ち着くためだ…

そうなのか…私以外、血肉の騎士を知るものはもういないのか…

アメリカ…そうするしかない…

変人奇人扱いで終わっては…

「アツハハハツ…そうなんですよ。アメリカで今Y O U K A Iが流  
行ってるでしょ？そのY O U K A Iが変態する要因として、私の筋  
では血肉の騎士というのが有力だっただけですよ…」

失敗だったか…ターキー氏は少し不機嫌になった様子だった。

「バカにするのも大概になさい！！君はニートなんだぞ？私はカードに言われて仕事を紹介しに来たんだ！！真面目な話をしなさい！！」

ニート…

そうだったのか…

カードはそんな根回しを私に…

私はターキー氏を睡眠状態にさせ、その場を去った

善玉菌？

血肉の騎士…さんざん否定はしたが…私の体内には血肉の騎士が必ず…

喫茶店から抜け出した私は、心にぽっかり空いた穴を埋めるように、自分を戒めた…

カードとはますます、距離が開いた…

私の伝手の中で、信頼できそうなのは、カードとカルテ…

ブラックホールにより、更新されたこの町では、最早何が起きるか

わからない…

大したことは起きないだろうが…

光の戦士の力があるからと、驕り高ぶりは良くない…

社会人として振る舞わなければ…

「アツハハハッ！…どうだいベイビー達？俺はついに鳥になったぜ  
」？」

どこからともなく声がする…聞き覚えのある声…

タツちゃんだ!!

タツちゃんが空を飛んでいる…

「タツちゃんすげーな？マジで空飛べるんか？マジックかと思った。

」

カルテがメンソーレラブのだろうか？女性陣を連れて来ていた…

一体どんな件で空を飛ぶやら飛ばないやらになったのか…

私はまた…タツちゃんに頼りそうになった…

「ダメだ…私はニートなんだ。タツちゃんはとても楽しそうだし…このまま去るのがいい…」

私はそそくさと、その場を後にした

「あっ！…デコポンじゃないか？何やってんだよ？」



私はその場を後にしたかったのだが…カルテに見つかった…

善玉菌？

制御できない力…そんな後ろ向きな考え方だから、血肉の騎士なんてウィルスに気付くんだろうか？

タツちゃんは澁刺として…空を飛んでいた

「デコポン。見てみるよ？タツちゃんあり得ないだろ？空飛んじやうんだからな…これはまだまだタツちゃん派の勢力は衰え知らずだな？」

昼下がりの町並みは不思議に見えた。

帰宅するには少し早く、出勤するには遅すぎる時間帯にビジネスルックな人がごった返していたからだ…  
営業中だろうか？外回りか？

しかし、何より不思議なのは、タッチちゃんを見上げる人はすぐさま下を向き、なかったことにしたいようだった点だ…

何故だ？

人が空を飛んでるんだぞ？

「あー…凄いいじゃないか？タッチちゃんは病魔に冒されているのかい？」

すると、カルテはムツとした…

「違うだろ？デコポン。僻みにもほどがあるぞ？アレはアメリカ製のボディヘリウムだろ？タッチちゃんはターキーさんの依頼でモニターとして今仕事してるんだ…平和ってのはタッチちゃんみたいな奴がつくってるのさ」

しまった…血肉の騎士はタブーとは言え、私の会話のベクトルはまさに血肉の騎士のそれだった…

病魔に冒されているのかい？だと…いかれてる…

「悪い…少し具合が悪くて口走ってしまったんだ…ネガティブすぎた…」

カルテは首を横に振った

「ダメだダメだ。デコポンみたいなマイナスイメージはボディヘリウムのモニターにはいらな<sup>い</sup>よ。体がヘリウムに変化するんだぜ？とにかく、デコポンはどうか行<sup>き</sup>ってくれよ。」

私は仕方なく、どっか行くことにした…飛んで

「お、おいっ！…ちょ、デコポンもボディへ持<sup>も</sup>ってんの？」

持っていない…

私は呼び止めるカルテを無視するように飛び去ってしまった

善玉菌？

「うつ…ぐうつ…」

いきなり胸が締め付けられるように痛みだした

バカな…

やはり光の戦士としての寿命は、とうに過ぎていたか…

脈打つ心臓はやがて、体中に熱を持たせ、私はゆっくりと地に降りた…

「はあ…はあ…どうしてしまったんだ…私はもうダメなのか？」

うずくまり

私は電信柱に張り付けてある「融資致します」と電話番号の書かれたチラシに引き寄せられるように、這った。

「デコポンっこんなところにいたか？探したんだぜ？あの後タツちゃんにボディヘリウムなしに空なんて飛べるのかって聞いたんだよ…したらさ、天然の飛行能力はアメリカではもう病人扱いだとさ…副作用として心臓病になったり、後天性のダウン症を引き起こすとかでさ。ミトコンドリア細胞が体に負荷をかけ過ぎるらしくてね。知ってるか？ミトコンドリア細胞。」

う、うざいっ…

何がミトコンドリア細胞知ってるか？だ…



私はあの地獄を知ってるんだぞ？

怒りのあまり

カルテの奴を眠らせた私は、確固たる後悔を味わうことになる…

これがアメリカナイズされた血肉の騎士の末路か…

私は血反吐を吐き出した。

そばで眠っているカルテを励みに私はフラフラのまま空を飛び

UFOを作り出した…

そこに乗り込んだ私は、気を失ってしまった

## UFO内

目が覚めると辺りは真っ白で、一瞬私はまた拐かされたのかと責任転換していた…

しかし、その思いは力として発揮されず、宇宙人が生まれることもなかった…

辺りは真っ白な二次元のままだ…

意識すると良いのか？  
無意識ではダメなのか？

私はどうやら、余程の袋小路に、はまっているらしい…

すべての思惑がエゴに感じ、自分はど畜生のなれ果ての果ての…と  
にかく最底辺に叩きつけられたような…

それでも私はUFOの中にいる…

意識よりは意志なのか？  
力はもしかすると失われたのか？

物体の難解さ…

比例するだけの意志が必要となるわけか？

「いや、そもそも力を失ってしまったのではないか？」

私はUFOから外を見たいと念じてみた

すると…丸い窓が現れた

「なんだ…違ったか」

上の空とは言いたくはないが、上の空であった…

私は淀む気持ちを抑え  
窓を覗いた

そこから信じられない景色が見えた

「タツちゃん!!」

手前で眠るカルテの直線上にタツちゃんが血を流し倒れていて、女性陣があたふたしていた…

そんな…ボディヘリウムの効き目がきれたのか？

「よ、よし…行ってみよう」

私は自分の力がまだ健在であることを認知するためにも、UFOを  
突き動かしたのだった

## 謎の飛行物体

タツちゃんの倒れているちょうど真上にUFOを停めて、私はノーブラんなことに気付いた。

「しまった!!!どうしたものが…ええいっ!!!どうとでもなれだ。」

私はタツちゃんを光で照らし、吸い込んでUFO内に取り込んだ…

タツちゃんはどうかやら、ボディヘリウムの効き目がきれて地面に叩きつけられたわけではなく、ボディヘリウムの要求に体が堪えられず、内出血したように体中が紫色に変色していた…



どうやら、流血していたのは、口や耳や鼻などから垂れ流れてきた血のようで…

「最悪だ…血液中のミトコンドリア細胞が活性化しすぎて血管を膨張…そして破裂させたんだ…くも膜下出血の全身バージョンみたいだ…これは、私が治すわけにはいかない…アメリカの医療スタッフに渡そう…タツちゃんの仕事もそれで達されるだろうし。」

私はアメリカまで飛び、ボディヘリウムを開発した、アメリカ本社  
の校門前にタツちゃんを置いた…

『investigate this case』

と注意書きをして

ホーミーの命を託したのだった…

## チューン

胸焼けがする…

ボディヘリウムを開発した会社（アメリカ本社）にタツちゃんを任せてはきたが…

胸焼けがする…

人は考えを巡らせるとき、考えがまとまったと判断するのは、胸…  
心臓だと言っが…

どうやら、アメリカ本社は芳しくない印象を受けたようだ…

「な、なぜだ！？最高の研究材料じゃないか？タッチャんだって、日本の一キャンペーンスタッフを越えて大出世さ！！なんだこの胸くその悪さは?!」

UFO内で私は有らん限りの声を張り上げた

人は常に願うものだ…

天から金銀財宝が降ってきやしないか？

石油でも掘り当てて石油王になれやしないか？

すべての人類に愛されて、大富豪になれはしないか？

など…

しかし、どうだ？この胸焼けは？

私はそれほどの善行をやったに決まってる

「治れ！！治れ！！私は爽快感に満ち足りたい！！」

やがて、私の行き場のない願いは一つの存在感を生み出すことになる

それは、奇しくもゴムの錬成師ジャオだった

## プリオン

相違点がある

昨今の情報社会において、事件性を示唆することにより、外部からの個人情報へのアプローチが可能な時代に…

協調性のなさは、相違点となり、猜疑心を生み、言うなれば疑心暗鬼。やがては集団心理の主軸として、表向きには興味や関心として保護されるべき個人情報へのアプローチを可能にしよう…

「つまり、デコポンよ？今の閉鎖的なおまえの感性では、すべての物事が自分に向けられた悪意に見えるんじゃないよ。皆、お前について関心があり、歩み寄ろうとしておるのじゃ。太刀川…タツちゃんに起きた異変はまさに集団心理…お主への罪の仮借故の事故…民族精神に則り、人は思いやりで体を維持するものなのじゃ」

嫌悪感の最終地点は決まって人道的な救いに満ちているが

いきなり現れたジャオは、大きな嚙を二発した…

一発目で私の注意を引き、二発目で生理現象であると思わせた

ジャオの後ろには幾人もの人間が見えるものだ…

「ち、違っつ！…わ、私は女にちやほやされるタツちゃんこそ間違



っている。なんて思っ てない！！いつもいつも…タツちゃんのやる  
ことにはついていけないんだ！！」

私はそれでも、ジャオのした嘘に依存するような大声で、なんとも  
情けない言い訳じみた返答をぶつけた

「おーっおーっ威勢の良いことじゃな…してデコポンよ？タツちゃ  
んの安否は気にならんか？いくら、製造元であるアメリカ本社とは  
言え、にわか仕込みの信頼など如何様にもならないと思うのじゃがな  
…ワシなら日本支社に連れて行き、ことの成り行きを説明するもの  
じゃが…」

冷や汗がでた…

私は盲信的にアメリカ本社にタツちゃんを見つけさせれば、タツち  
やんの命は保証されるとばかり思っていたが…

「つ、つまり、タツちゃんは死に、尊い犠牲のように弔われると言いたいのか？あちら方だって対応力くらい備えてあるさ……」

私は心許なくなり、どんどん声が小さくなった

「そういう意味ではない……タツちゃんを丸投げされたアメリカ力本社の気持ちになれと言っておるんじゃないよ……」

そうだな……これではあまりに任せっきりだ……

大切なタツちゃんなのに…

「わかったよ。ちょっとタツちゃんの様子見てくるよ。」

それを聞くなり  
ジャオはにっこり笑った

「もちろんじゃ、タツちゃんも喜ぶじゃろっ」

真っ白なUFO内は、人の温かみに飢えていたかのように嬉しそう  
だった

## 跋扈

ボデイヘリウムを取り扱う会社。世界各地に支社があり、本社はアメリカにある。表向きには、各国の天才を集結させた超エリート企業だと謳われるが、実のところはガリレオ・ガリレイ…いや、コペルニクスか？

わかりやすく言うと、まあ…思想犯だろう

まず大前提として

鉄の塊が空に浮くのは、勢いがあるからである。と言ったところか？

キャピタリズムの基礎と言っても過言ではないが…

そうではなく、鉄というのは磁力に左右されるものだと言唱する集まりなのだ

私は丁度かつぎ込まれる寸でのタッチちゃんを見つけた

「H・h e y? l o o k u p? w h a t ' s . . . w h y?  
R u s s i a?」

どうやら、一人の作業員が私…ではなくU F O に気づいたようだ

カルテみたいにもじやもじやした髪の毛は天然のブロンドがプリン化していて、黒髪が入り交じっていた

白衣から覗くジーパンは意外だったが、新品そのものだった

「F\*ckin' why? Russia!! you under  
stand us!!!? F\*ckin' why!!」

もう一人が顔を真っ赤にして怒っている…

ツルツル頭に銀縁メガネの男だ

「大変なことになった…しかし、タツちゃんは大丈夫そうだな…引き返すでしょう」

私は小窓から顔を引つ込め、アメリカ本社から立ち去った

## 跳梁跋扈

タツちゃんなら、もう大丈夫だろうな…  
言っても本物の天才達だからな…

円周率を数えるのが面倒で、御 様なんてほざいてた私などは、見  
栄の利いた…ラッキーボーイだろう…

「いや、運ではない…巡り合わせだ…」

少し天才達が小さく見えた気がする



だって考えてみてくれよ？

私が念じて生み出したUFOに嫉妬していたんだ…

「それでは、どうやって生み出したんだ？根拠は？テーズは？ハハッ…私などどこまでじゃないか？」

ひよっとすると、予知する力が人より弱いのかもしれない…

偶然まったく、その場に居合わせたラッキーボーイなのかも…

「ひゃあーっはっはっはっ！！ラッキーだ。大幸運、超幸運だっ！  
！UFOが生まれたときに傍にいて、空が飛べて、動き出すときに  
動けと念じたんだ！！」

私は名もなき達磨だ…  
手足などなくとも…幸運が助けてくれる

「タツちゃんのようなリァリストになりたかったな…」

行き場をなくした私は…  
予想通りにやがて飛来するだろう隕石を迎え入れ、妖怪を浄化する  
算段を考えるばかりになっていった…

## 対隕石

これからは、私の隕石に対する防衛手段のことばかりになるだろうが…

私にとって隕石はまったくもって悪いものではない…

それは利潤を満たすものであり、老廃物の効率的な循環を保つ上でこれほどの劇薬はない…

しかし…何事にも問題点と言つものが生じる

世界は隕石の飛来によって再生するのだから

これでは、私にとって地球は体内、つまり胃袋の中というわけだ

飲み込んだ薬が胃袋で溶け、染み渡るような  
胃袋の中にいて、世界がどのように再生していくのかを頭に叩き込  
まれるわけだ…

まるで井の中の蛙  
私こそが世界の循環を知っているのに…

隕石は魔法のように人を動かすのだから、動いた人間こそ世界を知  
るものなのだ…

よって…私の独断と偏見により、隕石は悪意となっていくのであつ  
た

## 金の盾

コードネーム『金の盾』

戦場において、鉄や鋼はまさに硬度を求められ、実際に防御力を問われる材質だが

金に至っては、意味が違う。

金と言うのは硬度も去ることながら、希少価値が高く戦場では、傷つけるからにはそれなりの覚悟、つまり必要以上の気力を消耗してしまう…

よって…対隕石の最初的手段として、地球を覆うシールド、大気圏の強化を行うことにする

既に隕石の軌道から落下地点はアメリカによって解明されていて、  
後はそのデータを元に私の力を使い、大気圏を濃厚に強化すればいいわけだ…

隕石は意志のない地球外物質の塊  
それ故に、強化された大気圏に気づくことはない

私の作る大気圏の盾は、鉄や鋼のような硬度に加え金のような負荷  
価値さえも帯びている

コードネーム『金の盾』

果たして…隕石は金の盾の価値を知っているのだろうか？

## 懸念

完璧な作戦である『金の盾』に懸念されることなんてあるのか？

.....

.....

.....

ある訳ない…

私は少し広めに大気圏を分厚くしたから、大丈夫だろう…

しかし、アメリカの宇宙開発局のデータを理解する方が大変だった

いくら、光の戦士の力を持っても、大気圏に細工を施すまでの  
スパンは洒落にならないほど大変だった…

まず、隕石の軌道

これは計算はすでにされていて、要は大気圏のどこを通過するのか  
を知りたいわけだから、私はコンピュータに独自のコネクトを結び、  
大気圏の厚みを調整する準備をした



隕石の軌道を映したディスプレイに則り、軌道と大気圏の接点にある大気圏濃度を濃いくする

まあそれで終わりなんだが…

私の頭は熱を帯び、意識は混濁していた…

後は、見たいものを見る力で隕石の様子を追跡すれば良いだけだな

「どれどれ…隕石は今どの辺かな？」

私は目を瞑り、宇宙空間へと視界を移した

ば、バカな！

無数の隕石が群を成し、こちらに向かってきていた

「流星群だっ！！しまった…あのデータは研修生が過去の事例から割り出した課題に過ぎない…どうしたものか…今から練り直して間

に合うか？」

コードネーム『金の盾』

どうやら、次の段階にレベルを上げなければならないようだ

ブルシャ

しかし、隕石の接近に伴い妖怪騒動が起きているのは事実だし…

コレはすでに…

隕石の飛来を止めては、私が体験した、あの再生が起きなくなるのではないか？

と言う考えが頭を過ぎった…

勇者タベルのようなものも現れなくなるだろうし…いや、そのような模倣的再生かどうかはわかりかねるが…少なからず、隕石ができるであろう再生を妨げた場合…

今回は再生の働きはないのか？

「どうする？私の力で再生するよりは、隕石に任せた方が自然で美しいのではないか？」

懸念すべき点はないはずだったのに、事態は一転し、一石一石の隕石に名前を付けなくなるほど、いきなり愛情がにじみ出てきた…

このまま隕石を…見過ごした方が良いのか

漏斗を付けるように斥引力で囲い、金の盾に隕石群を集中させる作

戦もあつたが…

未然に破壊しても良いだろうし…

でもダメだ…

格好付けてコードネームなどと企ててみたが、  
蛇足に至るか？

私は自然治癒に賭けてみることにしたのだった

## a t m o s p h e r e

金の盾も取り外し、通常どおりの大気圏となったわけだが、妙な違和感が残る

あそこまで考え抜いた結果、隕石のデータは過去のもので

しかも、隕石は一つではなく流星群…

半ば諦めも手伝った感は否めないか…

流星群は地球を襲い  
大損害を受ける…が、隕石は地球に根ざし地球をより強靱な星に作

り上げるだろう

「オッケーっ！ストライク！！」

私は町中で人の目も気にせず叫んだ…

この後すぐ…隕石が…流星群が降り注ぐ



ヒソヒソ...ヒソヒソ...

.....

.....

.....

人の目は白くなり、私を蔑むようなヒソヒソ話がこだました…

「ハッハハッ皆さん流星群が地球に到来しましたよ？お気をつけくださいね」

すると、皆ドツと笑い出した

「アハハハハッ真っ昼間に流星群拝めるかよ！見たかったら、アメリカとか行けよw」

ヒソヒソ話はボリューム最高潮となり、私の胸に突き刺さった…

目を閉じてステイルアイを使った

流星群は大気圏で見事に消化され、宇宙の藻屑となっていた

「そ、それもそうですね…」

私はUFOを呼び、その場を飛び去った

購入

とんだ赤っ恥をかいたものだ…

あの疎外感…なかなか忘れられるようなものではない…

しかし、そんなこと光の戦士という誉れな力を手に入れてからは、  
こう思うようにしている

疎外感など誰しも一つや二つ持っているものだ、アメリカでは few-talk と言い、ポジティブな会話法として現在主流となり  
つつあるのだ

英語において、few や often など日本語ではあまり使われないニュアンスの表現を排他的に用いることにより格差を緩和させようという動きもある

もちろん、苦手を克服するのが何よりだが、近年、苦手克服とは立場の交代でしかないという見方が強く、あまり世の中からはよく見られない傾向にある。最近では、一世を風靡したバランスのよいミニマムなモデルも、リアル思考なモデル社会では懸念されたりと…

世の中はつまらなくなつては来ている

とまあ、私が立ち直るまでにかなりの世論にかじり付いたが…

要は、病は気からと言っわけだ…

「し、しかし、それでは隕石が飛来して欲しいみたいじゃないか？」

ああ…何か気休めでも構わないから

この罪を購うようなものはないだろうか？

「苦しんでおるようじゃな？ワシもこんなつまらんUFOにほったらかされて辛かったもんじゃ…そんなときはコレ、ムキムキガム。一噛み、また一噛みする度にミトコンドリア細胞が筋肉に作用し、ムキムキになるっちゅー発明品じゃ。ミント味じゃ。ホレッ」

ジャオに渡されたガム…薄緑色のムキムキガム…フラボノガムみたいだな…

「これって、ボディヘリウム作ってる会社の商品？」

ジャオは頷いた

「そうなんじゃよ。最近ミトコンドリア細胞に働きかける商品が多数日本でも出回っておるようじゃな…」

早速、食べてみた…

口の中にミントの香りが広がり鼻からスーッと抜けていく…

そして、右の二の腕がパースが狂ったように膨れ上がった…

「空気を肉に変えているといふかな…化学式を見せてもらつたが、はつきり言つて理解不能じゃつたな…成り立つと言えば成り立つのかもしれないが…羅列されたに過ぎんと言ふかな…」

なるほど…ジャオは博識なんだな



## インスタント

軽い…右腕が軽い…

本当に空気みたいだが、意味が違う

ずっしり肉の重みはあるのだが、自転車…窓から見える走行中の自転車を片手でひょいと持ち上げなくなるような軽さ

「ほほう…お主は右腕を一番大事に使っているようじゃな。このムキムキガムに嘘はつけんぞ？何せ世辞などとは言えぬからなw」

楽しそうにジャオは私の腕を撫でた

ジャオの話によると、ムキムキガムの効き目は一時間だそうだが、個人差があり中にはそれをそのまま持続させるタフネスもいるとかで…

一時間の夢であるはずのムキムキガムがそんな結果をもたらすとは…

日常生活に話を戻してみても、

インスタントフードも民族精神によつては宇宙に通ずる画期的食品、地球の食文化を宇宙に伝える手段となるのではないか？…いや、逆か？

宇宙食をモチーフにしたインスタントフードか…お湯なんて地球上にしかないからな

まあ…それぐらい今右腕は力が漲っていると言っわけだ…

「コレは凄いガムだな？出回っているとは言いが、安全性は確かなのか？体への負担云々より、治安とかさ」

ジャオは少し考え込んだようだが、すぐさま私を見つめ話し出した

「治安か…お主からはその言葉がでるようじゃな…世の中性善説。たとい、傷害事件に至っても、それは善意だとワシは思う…おかしいかの？」

わかるわけないだろ？傷害事件の増加＝治安の悪化なんだから…

わかるわけない…

私は一時間は持続させるはずのムキムキガムの効き目を10分で萎  
ませた

## contents of application

「納得いかないようじゃの？今、お主の内情はムキムキガムへの疑心感で満ちておるようじゃが、ムキムキガムは夢の商品でのう…」

夢の商品か…

夢：憧れ：ウルトラマンのように怪獣を打ち倒すことが憧れでは、現実問題：問題がある

「それではジャオよ？ムキムキガムを持っていない人間はどうする？怪獣か？違う：きつとウルトラマンはラストヒーローなんだ」

察しのいいジャオのことだ、私の心情を読みとってくれるだろう

「ラストヒーローか…確かにウルトラマンは古いな…安心しなさい。ボクシングもその昔はアンダーグラウンドな格闘技であったが、今やスポーツにまで昇華された。ムキムキガムはすでにその域じゃよ…」

いや、私の言うラストヒーローと言うのは…つまり、強さへの憧れは最後には使命感に至るというか…ウルトラマンと怪獣の違いは憧れと使命感ではないか？と言うか

まあ、意味は同じか…

「じ、じゃあ、どうだ？ムキムキガムによって食中毒が起きたらさ？危険な商品じゃないか？」

ジャオは少し困った顔をした

「どうやら、ムキムキガムはお気に召さなかったようじゃな…ワシもそのくらは考えつく、夢を語るものある限り、それに異議を唱えるものが生まれるのじゃ」

殺伐とした空気がUFO内に流れた

「そ、そうだ！…ムキムキガムの力に負けて、暴力に走るような奴を怪獣と呼ぼうじゃないか？それを私達を取り仕切ると言うのはど

うかな？夢の為にさ」

ジャオは玩具を取り上げられた子供のようにつまらなそうな表情を浮かべていた

「なっ？なっ？」

しかし、私とて最早、引き下がれない気でいた



## ギルティセンス

「では…テストをしよう。人が人を裁くのであれば、人と人との間には信頼が必要だ。わかるかな？」

テストか…  
ムキムキガムを気に入っていると受け取って欲しかったのだが、まあ私はそのつもりで挑もう

「わかった。そのテスト受けよう…して、どんなテストだ？」

少し考える時間のあったジャオだったが、ゆっくりその口を開いた

「ワシがムキムキガムでムキムキになった部分でお主を叩く。それでどうじゃ？それに耐えられたら合格じゃな…」

な、何だと？

ムキムキガムを気に入っていると受け取ってもらったために叩かれなきゃならないのか？

馬鹿げてる…いや、待て待てあのヨボヨボのジャオが一体どの部位を鍛えていると言っんだ？

はっ！わかったぞ！  
そう言う意味か…

道理が通ったな…

「良いだろう。受けて立つよ」

これはジャオにとっても試練になるな…

自分が一番酷使している部分で叩くなど、ジャオの美德に反するかな…ましてムキムキガムで意図的に膨れ上がった部位なんて、ジャオのような賢者には耐え難いものがある

最悪、腕とかなら

ジャオがギブアップするやもしれん

ジャオは徐にガムを噛み始めた…が…

…な、何…変化がない

ジャオの体にはまったく変化がない

何だ？ジャオはフラボノガムでも食べたのか？

「変わり映えしないが？ジャオよ？いつたいムキムキガムをちゃんと食べたのか？」

ジャオは深く頷いた

「無論、ワシはムキムキガムを食べた…その証拠にワシの鼓動が酷く落ち着いておる…1分間に1、2回深くゆっくり力強く動いておる…」

し、心臓が…ムキムキになったのか？

ジャオ…なんて奴だ

「バカな！！私だって右腕より心臓を酷使しているはずだ！！バカな！！」

ジャオは左胸に手を当て、私に問いかけた

「さて…ここで矛盾が生じたな？心臓ではお主を叩けない…わかるな？」

裁けないと言うわけか…

またもや

UFO内に流れる殺伐とした空気…少しでも面白くならないかと私は変な顔をジャオに向けていた

「誤魔化しても無駄じゃ…お主はそんな賊者になる必要はないのじゃよ…恐らく現れはするじやろう…裁きし者がな」

UFO内の殺伐とした空気はやがて、蔓延していく。

今回の血肉の騎士の正体は…それだと核心した

人＋口〃？

UFO内はなかなか快適にリフォームされた

ジャオの発案でミトコンドリア細胞が異常な人間をピックアップする装置を生み出したり、私の脳味噌はオーバーヒートしていた

「80000人か…売り上げは総計でも700000000人は購買していると言われておるに…お主の作ったこの装置は正確なのかの？」

さあ…（ー、）

それはわからないが…700000000人がボディヘリウムやらムキムキガムを購入したにせよ。700000000人が一斉に使い始める訳じゃないと受け取るしかないよな…



「80000人が常に同じ人間とは限らないだろ？泡ぶくのように入れ替わり立ち替わりしてるのさ」

ジャオはいささかつまらなそうだ…

「しかし、これでは事件性までは追及できんな…白か黒か…お主ならできるじゃろ？」

白か黒か…って、それを決めつけるのが良くないって話じゃなかったのか？

ジャオが何を考えているやらさっぱりわからんが…

「白黒はつきたいが、数多ある商品の使用方法に則った善悪を、私が把握できていない故に、安易に分けるのはどうかと思うが？」

ジャオはさらにつまらなそうなおーラを放った

「良いんじゃないよ……これは余興じゃて、お主の独善的線引きで良いのじゃ。女性の胸を触ったら黒とか、そんなんで構わん」

女性の胸……か

「じゃあ、それにしようっ！…出歯亀ついでに見に行っても良いな  
」？」

どうやら、少しジャオの機嫌が治ったようだ

「良いのう…つまり、ミトコンドリア細胞に著しい異常があり、女性  
性の胸を触っている人物が黒くなるわけじゃない？」

私は頷いた

「まあ、これくらいのことなら簡単だから、すぐ機能を追加できる  
よな」

私は早速、ミトコンドリア細胞異常発見装置に白黒判断機能を追加すべく、念力を込め始めた

「ぐっ…があっ…あーっ!!」

UFOのリフォームに力を使いすぎたのか？  
私の頭はどうやら限界に達していたようだった

## 探掘場は聖地

頭を酷使しすぎた所為か、まるでお告げかのような夢を見せられた

夢は頭に優しい

様々な出来事を自分の身の程程に要約して教えてくれるから…

私の右脳はそのとき宇宙一明晰だったに違いない…

「デコポンwおまえ土下座しろよ？ここは聖地だぞ？」

仮面ライダーの戦闘シーンに出てきそうな砂利が山のように積まれた荒地と言うか…

タツちゃんは神話に出てきそうな神々の出で立ちで、ローブを左肩から掛けて着ていた…  
葉っぱでできた冠をつけ、タツちゃんは土下座し始めた

「た、タツちゃん…何やってんだよ？こんななんの変哲もない場所でさ？」

タツちゃんは土下座の姿勢を崩さぬまま顔だけ私の方へ横に向けた

「ここはな？良質なアルミニウムが採掘されるんだ…荒れ地は荒れ地だけど、ここは神様が住まう大切な土地。人は先を急ぐあまり大切なことに気付かないんだよ？」

心の底からバカにされたような…

しかし、否定はできず  
私は仕方なしに土下座した

「デコポン。今どんな気分だ？辛いかな？嬉しいかな？」

もはや、謎の質問…愚問でしかない

「私の感情は抜きに、ここはアルミニウムの採掘場なんだろう？立派なサンクチュアリじゃないか？」

それを聞くなり、タツちゃんは腹を抱えて笑い出した

「アツハハハハッ！！デコポン？違うだろ？ここは採掘場だよ。アルミニウムの採掘場だろ？サンクチュアリ？アツハハハハッ！！聖地な訳ないじゃないか！アツハハハハッ！！アツハハハハッ！！」

な、なんだ！！た、タツちゃんだって土下座してたろ？



何なんだよ…私は何なんだよ

夢の世界がぼやけ始めた…そうか、夢が覚めるのか

## ものの記憶

目が覚めると、そこはUFO内に備え付けられたベッドの上だった  
ジャオが運んでくれたんだろうか？

実は光の戦士になる前から、私にはものに宿る記憶を読みとる力が  
あった…

しかし、見たいものの記憶などないに等しい

好奇心はやがて使命感に変わり、使命感はやがて抱えきれないほど  
膨れ上がり、後悔になる

誰も  
が  
知  
り  
得  
な  
い  
も  
の  
で  
は  
な  
く、  
誰  
か  
が  
誰  
か  
の  
目  
を  
か  
い  
く  
ぐ  
り  
行  
っ  
て  
い  
る  
場  
面  
を  
の  
ぞ  
き  
見  
る  
よ  
う  
な  
…

あ  
ま  
り  
い  
い  
気  
分  
は  
し  
な  
い  
…

「  
ど  
う  
や  
ら、  
ジ  
ャ  
オ  
が  
運  
ん  
で  
く  
れ  
た  
よ  
う  
だ  
な…  
腕  
と  
か  
ム  
キ  
ム  
キ  
だ…  
は  
あ…  
」

私  
の、  
も  
の  
の  
記  
憶  
を  
読  
み  
と  
る  
力  
の  
所  
為  
で、  
ジ  
ャ  
オ  
が  
か  
な  
り  
熟  
達  
し  
た  
ム  
キ  
ム  
キ  
ガ  
ム  
の  
使  
い  
手  
で  
あ  
る  
と  
わ  
か  
っ  
て  
し  
ま  
っ  
た  
…

しかし、フラボノガム説も捨てきれない…

「せめてあの時、ジャオの鼓動を確かめるべきだったかな…」

などと早速後悔している私を見かねたか？  
閃きの神とでも言うべき導きがあった…

ジャオの言っていた、胸を触ったミトコンドリア細胞異常者を発見するメカニズムを閃いたのだ

例の白と黒を判別する装置だな…

「そつだ！おっぱいに聞いてみよう！！」

そして、恥ずかしげもなく、私は叫んでいた

## 顯示欲

判別装置のメカニズムは至って簡単

ミトコンドリア細胞の異常は探知できるので、後は胸を触ったときに  
ミトコンドリア細胞の変化を装置に記憶させれば良い

私の力は星の記憶を頼りに、数多のセックスセンスを分析し

ある種の規定値を見つけたした…

この規定値を満たしたものが黒く表示され  
満たさないものが白く表示される

というわけだ

規定値には煩悩や支配欲、つまり顕示欲を満たす要素を総合的に計算してある

性欲とはつまり、もっと高尚な感覚というわけだ…

「しかし、ジャオはどこに行ったのか？まさか？おっぱいを…」

早速、私はジャオのミトコンドリア細胞データを駆使し、ジャオの位置を特定した…

「く、黒っ…！」

ジャオの位置を示す点が黒く染まっていた…  
地図と照らし合わせ、私はジャオの元へ向かった



## ルゴール

勤修されてそんなジャオにハレンチ疑惑が…  
確かに欲求の階級として性欲は高尚だとは言ったが…

「まだまだ試作段階だ…きっと何か違う異常があったに違いない…」

ふと、私は窓の外を眺めてみた…

「えっ？あれっ…」

私はまるで掛け違えたボタンに気付いたみたい な軽い驚きを見せたが…むしろ逆だ…

重すぎて反応を抑えてしまったのだ

町は隕石群の飛来により、火の海と化していた…

「バカな…おっぱい何たら言ってる場合じゃなかった」

私は遊び心を一切捨て、スティールアイでジャオの様子を確認した

「…これは…」

ジャオが何やら女性を覆うように倒れ込み、丁度ジャオの手が女性の胸に当たっていた…

この隕石群の襲来で、ジャオは瓦礫の下敷きになっているようだ…

ジャオのことだ…気にしているんだろう  
当たっているというよりは、触れている程度じゃないか？

ん？

ジャオが覆っていた女性の体が見る見るうちに男性に変わっていく…

私は目をUFO内に戻し、判別装置を見た

「白くなった…」

ジャオを示す点が白くなっていた

## 地滑り

「いやあ…助かったわい。ムキムキガムの効力も切れかけておったからの…館海の奴の女水おんなみずの効力は切れてよいのじゃが…」

私はジャオ発見後、すぐさま現場に行きUFO内に救出した

あの女性らしき相手は館海で、女水と言う、ミトコンドリア細胞からDNAに働きかけ、男性から女性になれる水を使っていたようだった…

そんな館海も一緒に救出し、今UFO内にいる

「昨今、ミトコンドリア細胞に作用し、人智を超越する変化をもたらす商品が出回っていて…俺はやけに高額な水だと思いグルメ気取りに買ってみたんだ…女水。軟水というか。良さそうだろ？」

館海が私に経緯を伝えている…

そうか…館海には軟水に見えたのか

女性向けのホルモン劇薬に男水もあるが、それは硬水に見えたんだろ…  
おんなみず

「あ、ああ…それは災難だったな…ジャオとは偶然会ったのかい？」

館海は少し困った様子を私に見せた

「災難？災難と言えば災難だが…地球と連動している気分だよ。まさかこんな…あり得ないことすぎるだろ？しかも、UFOの中に今俺はいるんだ…因みに、ジャオとは偶然会ったんだ…彼の方からアプローチがあつてね…」

真面目な正確が好評で、常にクラスのムードメーカーだった館海。

「デコポンよ？どうやら、今回はかりは再生のしようがなさそうじゃの…隕石がまだまだ熱を帯びておる…」

ジャオの見解が正しいやら間違いやら…熱を帯びているから再生は困難なのか？

唯一の安全な場所。UFO内で冷静すぎるくらいの話合いが、地球の存亡を賭けた話し合いが始まろうとしていた



響

「ちよつとすまん…鍛えたいんだが？」

早速、館海の意味深な発言から地球の存亡を賭けた話し合いの火蓋が切つて落とされた

「かのような御老体が私を庇い…しかし、申し分ないほどの肉体をその歳まで維持し続けているなんて…いや…情けないばかりだ…鍛えさせてほしい…」

私とジャオは目を合わせ、吹き出した

「館海よ？あの筋肉もお主が飲んだようなミトコンドリア細胞に作用するアメリカの新製品なんじゃよ？ムキムキガムと言っんじやがな」

ジャオはムキムキガムを館海に渡した

「ムキムキガム…知らなかった…」

館海はムキムキガムを受け取り、席を外した。

そして館海は  
それ以降話さなくなった

「して、デコポンよ？この町並み…絶望的じゃな…お主の力さえあれば、いささか無理矢理ではあるが再生…いや、復元は可能じゃろうが…ワシも初めてのことかわからんのじゃよ…今回はアメリカの新製品の影響で隕石の受信者が大量生産されたようじゃ…」

なるほど…

さすがアメリカと言うわけか…光の戦士が大量生産されたわけか？

いやいや…待てよ

光の戦士など大量生産されるわけがないだろう

現にジャオだつて

血肉の騎士の恩恵を受けているに過ぎない

光の戦士が大量生産されているってのは言い過ぎだ

「確かに：町の復元はできるかもだが：隕石群の襲来に関しては受信者の大量発生とは結びつかない気がするが？」

顎に手を当て、ジャオが少し考え込んだ

「うーむ…では、今回の光の戦士は異常なようじゃの…お主と云わず、歴代の光の戦士とは比べものにならないほどの引力を持つておる」

そう言われてみれば…

私は既に型遅れの光の戦士だ…

それを加味しただけでも、今回の光の戦士は背筋が凍るほどヤバイ…

「た、確かに。この町は壊滅状態だが…今回はアメリカも絡んでる…地球が危ういってことだよな？」

私達は凍てついた沈黙を、恰も平和でもあるかのように大事がっていた

## 妙貞問答

沈黙はやがて惰性にまで達した…

良いものだ

先の見えない答えを宙に浮かべ、よもや神だ仏だと論ずるよりは、  
こうした沈黙こそが近道な気もするが…

ドガンッ！！

凄まじい衝撃がUFO内に走る

どうやら、隕石がUFOに直撃したようだ…

「罰が当たったか？」

私とジャオは口を揃えて言った

「お、おい？隕石が直撃したんじゃないか？どんだけ頑丈なUFOなんだ？」

館海が話し始めた…

館海…なんて頼もしい奴だ

「そうだな…私も強度までは計算してなかったが、かなり頑丈みたいだ」

館海はつまらなそうにまた黙り込んでしまった

強度までは計算してなかった。なんてのがまた分からないんだろうな…

「しかし、どうしたものか？隕石の直撃を凌ぐ云々よりも、まだまだ隕石が飛来してある…このままでは地球が保たんのではないかな？」



本当に…それなんだよな

ジャオの言うとおり、いや、ジャオが言うからには、隕石の襲来が止まない限り再生は始まらない…

次の時代が始まらないんだ…

「ジャオ。私が強制的に隕石を止めるってのはどうだろうか？」

一度は白紙に戻した。金の盾をもつ一度立て直すしかない…

「じゃのう…それが考えられ得る最善策であるようじゃな…」

二人は頷いた

試しに館海の側へ目をやると、窓から外を無気力に眺めるばかりだった

s o t a k e y o u u p . . .

さてさて…

ジャオの実働的観念も館海の所為で核心に極まっているようだ…

私は今地球付近の宇宙空間に居る…

光の戦士と銘打たれて、ここまでできるとは…

宇宙空間において、地球上と同じ働きを自分の体に促すには、特殊なフィルターが要る…

これに関しては、私は全くのノーアイデアであり、ジャオから貰

ったスペースタイツ（色はスケルトン）を着用し、宇宙空間でありながら、地球上と同じライフパフォーマンスを実現させている…

私はやってくる隕石を一つずつ風潰しに破壊すると言つウォームアップに明け暮れていた…

なんだか宇宙空間にまで出てきたら、金の盾作戦がバカらしくなったからだ…

「Great you! I had taking you up so hard. Could you make a good at space-tights?」

もちろん… スペースタイツはアメリカが作り出した新商品だが、地球上と同じライフパフォーマンスを実現させているが故に通信も楽々というわけだ…

「イエス。アイゴテット…」

「you're super hero・never mind?」

うーむ… しかし、これほどの隕石が地球にやって来るなんて… 星が一つ爆破したか？

はっ…!!

「へ、ハイ？ユーキャンシーザムーン？」

「ooh...I am a single gentle guy  
y...deep jokes...I love invent  
ion」

どうやら、伝わってないようだが…

仕方なく

私は自分で月があるかどうか。確認することにした

## 流星のごとく

地球の衛星として、存在する月

その月が爆破し、地球目掛けて隕石を放っているとしたら…

宇宙にでる前の調べでは、世界各地で隕石の襲来があっているようだった…

月が爆破して、地球全体に隕石が襲来するにはどんな星同士の動きがあつたのだろうか？

一つに月が爆破し、地球の自転により隕石が世界各地に広がったと

言う考え方

同時にとはいかないが  
説明はつく

もう一つに月が地球を公転する際に少しずつ朽ちていった場合だ…

それも考えられる…

「There's moon on your space. Don't worry about it. Keeping you work.」



あれ？月はある…

アメリカからもどうやら、月は既存であると報告されたようだ…

私はため息混じりにまた、隕石を虱潰しに破壊し始めた

## 土の勇者

「はあ……」

根元を突き止めれば、隕石群の襲来は止められると思っていた私だったが、月はあるし、それ以外、太陽系の星々もあるようだ…

ため息は宇宙レヴェルに色濃くなり

どこからともなく飛んでくる隕石群に私は嫌気がさしていた…

「私の代の頃はよかったな…勇者タベルが何かと世話を焼いてくれて、今思えば、勇者タベルが元凶だったと言わざるを得ないが、起

承転結終わりがあった…」

せめて地球に飛来した隕石群が熱を冷まし、風化すれば…再生するはずなんだが

その考えそのものが違うのだろうか？

土の勇者たるものが地球にいて…それが根元なのではないだろうか？

星の爆発が根元ではなく…隕石を多量に生み出している者が居たとしたら？

土の勇者を探すべきだったな…悪魔にして…隕石にしなければいけなかったのかもしれない…

宇宙空間では、しかしそれ以上の思慮はなく、土の勇者が呼吸をするかのように絶えず生み出す隕石群を壊すことしかできなかった…

「勇者タベル…そして、新しい光の戦士が巡り会い織りなすことを願うばかりだ」

スペースタイツのおかげで体は保温されているが、心はどうやら宇宙空間にチューンしているようだった…

t e a r i s f e a r o f t h e o n e

「現れたぞ！デコポンよ。ワシも心待ちにしておった…光の戦士と名乗る者が今TVで、タベルと地球を救う為に条件があると話しておる」

タベル？

またタベルだったか…

それに光の戦士

地球を救う為に条件がある？

隕石を破壊しすぎた所為か…というか溜まりに溜まった疲労の所為か…

苛立ちを隠せずにいた…

早くしてくれ…こっちは隕石の襲来を食い止めてるんだぞ？

「ジャオか？悪いが、なんとかTV局に繋いで話をさせてくれないか？条件なんて聞いてられない…タベルを悪魔にするんだブラックホールに。」

焦りがあつたのは確かだ…

しかし、そこには確かなプライドがあつた

「な、何を言うとか？新たな光の戦士と勇者タベルが掲げた条件とは、地球を一度殺すことじゃそうじゃ…それほどの再生力を想定しておるそうじゃ。確かにの…新光の戦士と勇者タベルがそう言うんじゃないの…そして…デコポンよ？もう一つ条件があるんじゃない」

地球を殺すだつて？破壊するってことか？正気なのか？

まさか、勇者タベルは先の私との対立を記憶しており、それを考慮した上で…悪魔になる気はないというのか？

「な、なるほど…ジャオ、わかるようなわからないような…地球ごと再生するわけだな？で、もう一つの条件ってなんだ？」

少し間があったが、ジャオは意を決したように話し始めた

「デコポン…お主の死じゃ…地球が破壊されればお主も」死ぬと奴らは思っておる…しかし、デコポンよ？お主の死なしには、再生は起きないと言つのは事実のようじゃな」

そ、そんな…

私の命が地球を救うのか？

そうか…まだ私が光の戦士の力を携えているから…地球がこんなことに…

「そうだったのか…それではいくら隕石を破壊しても、地球は救えないんだな…」



すべての事柄が一つに繋がったような…そのような覚悟は前からあったんだ

「デコポン…？デコポン…？」

ジャオの応答には堪えられずにいたが、私の目から溢れ出る涙は、それでいて喜びに満ちていた

## 陽動

私は早速、金の盾作戦に切り替え、勇者タベルと新光の戦士の元へ向かった

構わない…地球の為なら命など…

「新たに生み出した移動術ワーピングもこれきりか…」

私は大気圏のストレスを受けないほどの粒子にまで分解し、地球と宇宙を行き来していたのだ…

その際に地球の磁力に集中することにより、迅速に地球に戻れるというわけだが…

「まあ…良いだろう」

私は甘い判断を自分にした

宇宙から見る地球は美しく、絵や写真で受ける印象とはまったく別物だった…

まあ…良いだろう…と私は自分に甘い判断をしていたのだった

私は粒子のまま、磁力を勇者タベルに合わせ  
勇者タベルにやつつけてもらいに行った

「よしっ…頃合いだ」

私は勇者タベルの眼前で実体に戻った

暖かいというか…湿っぽいというか…じんわりと何か液体が体中に  
染み込んでいくような…

シャワー室…

「キヤーッ！！で、デコポン現るよっ！！キヤーッ！！」

勇者タベルの磁力に確かに従ったはずだが…

そこには、真っ白く透き通った肌をもつ、金髪の女性が真っ青な目を私に向け、恐怖におののくように体を隠した…

「もう…デコポンっ！！あなたを待っていたのだけど…シャワー室に現れるなんて…サプ返し？」

サプ返し？

さて…私の時間は止まってしまった。

## 再生不可

「今回の光の戦士はまだ、五歳の女の子なのよ…」

シャワー室から一転して、私は談話室に通された…

談話室には、面談用の机と椅子が対に1：2の割合で7セット置いてあった

私達以外は誰も居らず、奥から二番目の席に着いた

真っ黒なスーツに着替え終わった勇者タベルは、スカートから覗く足をポリポリ掻きながら座った

「まあ…座って、なんて言うのかしら…加減を知らないというか。

私が再生の話を先にしてしまったからかしらね？彼女天才だから、半永久的に地球に隕石が飛来するシステムを作っちゃったのよ…」

…そのシステムは私にはわからないが、私の目はまだ黒い

「土の勇者本人を前に、こんなことを言うのもなんだが、隕石の問題ではなく、結果あなたが隕石となることにより、再生は始まるのではないか？」

核心だったのだろうか？  
しばしの時間があつた

が、勇者タベルは心配そうに私をみてきたのだった



「あらあら…男なのに以外とラジカルなのね…そう…あなたは話を前に進めたい一心みたいね…でも、違うのよ？あなたの力、発想力、念力、気力程度ではあの子には勝てないの。要はあの子が私よりあなたを選べるかどうかね…」

壁に苛まれたような。無理矢理志気を奪われたような…

ホルモントークで男が女に適うわけがない…  
私が五歳の女の子に気に入られるわけがないだろ…

「し、しかし…それでは隕石を半永久的に飛来させるのはナンセンスじゃないか」

パンッ

私は頬を打たれ、椅子から投げ出された

「違うのっ！！あなたよりあの子の方が強い力を持っているのよ？  
彼女の意志を尊重しなくては駄目なのよ？な、何よナンセンスって  
？」

身震いがした…

そうなのか、私ではどうすることもできないみたいだ

どこか女々しく抱き寄せてやりたいが… たった一枚の壁がそれ以上を求めているようだった

バヴァーヌ

「つ、連れてくるから…」

私が情けなく頬を覆い見つめていると  
たまらなくなつたのか勇者タベルは談話室から出て行った

このままの体勢で居ようかな？

私は妙な気持ちになり、とても悪戯な気持ちになった

「そうだっ！！ケーキなどを用意しよう。天才光の戦士と言えど、五歳の少女じゃないか？フッフ…さてさて…」

私は早速念じ込み、サグラダファミリアのようなパンケーキを生み出した

雪のようにまぶされた砂糖がチョコレートベースの生地を彩り、きつと「食べるのが勿体ない」などと…

「食べるのが勿体ないっ」

！！！！！！！！

確かにケーキを置いた机の椅子から声がした：

ガチャッ

「お待たせ。」

勇者タベルが談話室に入ってきた

が、天才光の戦士は居ないようだ

「御免なさいね？彼女キヌって言うんだけどね…土臭そうなケーキは食べたくないって…ププツ」

私は何か閃いたような、物事が繋がったようにケーキのあるテーブルを見た

「ジャンジャジャーン！！キヌよ？私はキヌ。おキヌちゃんよ！！ケーキは美味しく戴いたわ！！」

キヌと言う…

天才光の戦士は秋田小町のような…その…お菊人形のような…不思議な雰囲気を持っていた。45寸程の身の丈に、派手な着物を着て

立っている

「こ、困ったな…美味しかったかい？」

彼女は私の問いに頷き、お返しにとでも言わんばかりに満面の笑顔を見せてくれた

「美味しかった！美味しかった！美味しかった！」

何度も言つもんだから、私はもう一度ケーキを出してあげようとしたんだが…



「もう止せっ！！貴様っ！！」

七つの声が同時に重なったようなおぞましい声が私の心臓を直撃した…

嫌な予感が、すべての力を出し切っても太刀打ちできないような…程遠い力を感じた

そう…どうやら私の長い夢が覚めるときが来たようだ

死んでいた

わたしはすっかり萎縮していたが、淡々とキ又は私のこれまでの経緯を尋ねてきた

「そう…化け物列車で円周率のことを考えてたら、おっばいにね…  
そこから…あなたの伝説は始まったのね…」

私とキ又はあのケーキがあつた机で話している

キ又は涼しげな顔を私に向けたかと思うと、勇者タベルの方に振り返った

「残念だけど…このタイムラインは死んでるわ…」

談話室の出入り口となるドア付近に凭れるように腕を組み、立っていた勇者タベルは、それを聞くなり、居たたまれない顔をした

「…そう…彼には次の周期まで残ってて欲しかったけど、残念だわ」

勇者タベルはドア付近から、私達のところまで歩み寄り、私を見て話し始めた

「私からの提案よ？あなたは実はその同窓会の帰りの電車内で睡眠薬による自殺を図った…そしてここはあなたの夢の続きの世界…わかるかしら？夢から覚ましてあげたいのよ」

どうやら…

二人の天使が現れたようだ

彼女達は私に天国への切符をくれると言っているのだ…

「バカな…私は臨死体験までしたし、すべて現実だと受け入れてきた。そんなはずはない…」

勇者タベルは呆れた顔をした

「あなた…光の戦士なのに時間の概念もないの？光の戦士ならタイムトラベルは地球の自転の巻き戻しと早送りにより可能なことを理

解すべきよ？あなたはその同窓会の帰りの電車内に戻り自殺するしかないの…」

それは曲がりなりにも、光の戦士として無敵を誇っていた私には、単にラストオーダーを聞きに来る店員のそれでしかなかったのだが…

否定する文句がすぐ浮かばない…

それは不可能なことではないからだった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0766u/>

---

円周率の天才

2011年10月10日12時26分発行